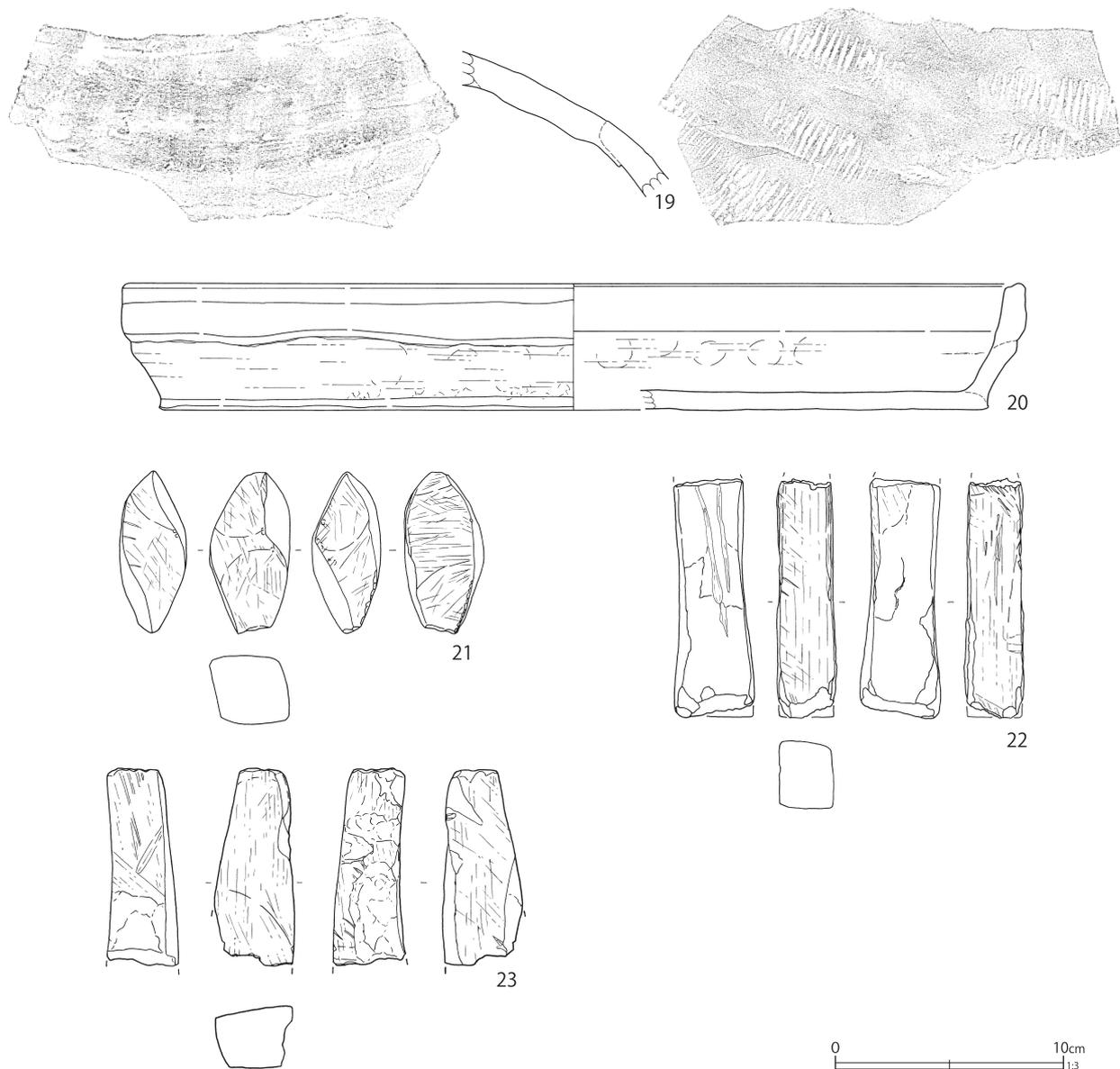


第60図 中・近世グリッド出土遺物(2)



第61図 中・近世グリッド出土遺物（3）

部分の破片で、内耳の付く部分の器面部分に外側から二次的な穿孔が行われている。14は酸化炎焼成ぎみに焼成され、赤味が強い。胎土には長石が一定量含まれ、径5mmの長石角礫も含まれている。外面の体部下位には、やや強く縦方向のヘラナデが施されている。

15～17は常滑焼の甕である。15は口縁部縁帯

部の破片で、常滑生産地編年の10型式、15世紀後半に相当する。18、19は渥美焼の甕で、18の底部内面には二次的な使用痕（研磨痕）が認められる。

20は瓦質土器の焙烙で、体部外面は全体がヨコナデされる。内面体部中位の稜は痕跡的である。

21～23は石製品の砥石である。

第24表 第7・8号地下式坑出土遺物観察表 (第54、55図)

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	
54-1	SK7	かわらけ	小皿	-	[3.1]	(8.3)	H	20	普通	にぶい橙	胎土粉質 全体摩耗激しい 緑泥片岩 押し削り痕がごく一部に見られる 側縁は打割成形後ごく一部削り整形 緑泥片岩 裏側は両側から押し削り痕が見られる 側縁は打割成形後ごく一部削り整形 緑泥片岩 種子・銘とも認められず 下面に目遺存 供給孔と外面に縦の尖頭状工具による工具痕 胎土酸化炎焼成きみ 燻す 外面煤附着 胎土酸化炎焼成きみ 燻す 外面下位磨き状のヘラナデ 煤附着 胎土酸化炎焼成きみ 燻す 外面煤附着	
2		石製品	板碑	長さ32.0cm 幅21.9cm 厚さ2.8cm 重さ2808.3g								
3		石製品	板碑	長さ[31.7]cm 幅24.5cm 厚さ3.5cm 重さ3469.5g								
55-4		石製品	板碑	長さ[22.7]cm 幅14.2cm 厚さ1.6cm 重さ1009.4g								
5		石製品	石臼	長さ[8.2]cm 幅[14.3]cm 高さ9.7cm 重さ1143.2g								
6	SK8	瓦質土器	内耳鍋	-	[2.8]	-	DEH	5	普通	にぶい橙		
7		瓦質土器	内耳鍋	-	[7.8]	-	BDEH	15	普通	にぶい橙		
8		瓦質土器	内耳鍋	-	[6.3]	-	DEH	5	普通	にぶい橙		

第25表 中・近世ピット出土遺物観察表 (第58図)

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考
58-1	X-2	磁器	皿	(11.6)	[2.0]	-	I	5	不良	灰色	中国(景德鎮窯系か) 内外綿施釉・染付胎質・釉調粗悪
2	Y-2	陶器	天目茶碗	(10.9)	[5.7]	-	I	20	良好	灰色	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c 中期～後期

第26表 中・近世グリッド出土遺物観察表 (第59～61図)

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考
59-1	SC4	瓦質土器	焙烙	-	[3.4]	-	C I	5	普通	黄灰	内耳欠失 燻す 外面煌付着
2		瓦質土器	鉢	-	[6.3]	(12.0)	BDE I	10	普通	褐灰	底部余切痕 内面摩耗
3		陶器	甕	-	[14.8]	-	DE	5	普通	暗灰黄	常滑 外面降灰 ヘラナデ 3～6は同一個体とみられる
4		陶器	甕	-	[12.9]	-	DE	5	普通	暗灰黄	常滑 外面降灰 ヘラナデ
5		陶器	甕	-	[8.7]	-	DE	5	普通	暗灰黄	常滑 外面降灰
6		陶器	甕	-	[8.5]	-	DE	5	普通	暗灰黄	常滑 外面降灰 内面付着物
60-7	グリッド	瓦質土器	鉢	-	[9.1]	-	BDEH	10	不良	灰白	燻す 内面下位使用により摩耗
8		瓦質土器	鉢	-	[5.8]	-	BDE	5	普通	にぶい横橙	断面酸化
9		瓦質土器	鉢	-	[3.3]	-	ABDEH	5	普通	にぶい横橙	外面微量の煤付着
10		瓦質土器	鉢	-	[4.9]	-	BDEH	5	普通	にぶい横橙	燻す やや酸化炎焼成
11		瓦質土器	鉢	-	[4.0]	-	ADE	5	良好	淡黄	燻す
12		瓦質土器	鉢か	-	[4.1]	-	DEH	5	普通	浅黄	外面煤付着 内面摩耗
13		瓦質土器	鍋	-	[6.1]	-	DE I	5	不良	にぶい横橙	外面煤付着 二次穿孔
14		瓦質土器	内耳鍋	(34.2)	[6.4]	-	CDEH	10	普通	にぶい橙	やや酸化炎焼成 外面煤多量に付着 口縁部小破片からの反転図化
15		陶器	甕	-	[9.2]	-	DE I	5	普通	黄灰	常滑 外面降灰 10型式15c 後期
16		陶器	甕	-	[7.6]	-	I K	5	良好	灰白	常滑 外面自然釉 13c 後期～14c 前期
17		陶器	甕	-	[7.1]	-	DG I	5	良好	灰白	常滑 外面自然釉 13c 後期～14c 前期
18		陶器	甕	-	[6.0]	-	I	5	良好	灰白	渥美 内底面剥離 二次利用
19		陶器	甕	-	[6.4]	-	G I	5	良好	灰白	渥美 外面押印文 12c
20	瓦質土器	焙烙	(39.0)	5.6	(36.2)	CGHI	25	良好	浅黄橙	底部しわ状痕 弱く燻す	
21		石製品	砥石	長さ7.0cm 幅3.5cm 厚さ2.9cm 重さ77.2g							
22		石製品	砥石	長さ[10.5]cm 幅2.6cm 厚さ3.6cm 重さ170.7g							
23		石製品	砥石	長さ[8.6]cm 幅3.5cm 厚さ3.1cm 重さ117.4g							

V 芦荻場遺跡の調査

1 旧石器時代の遺構と遺物

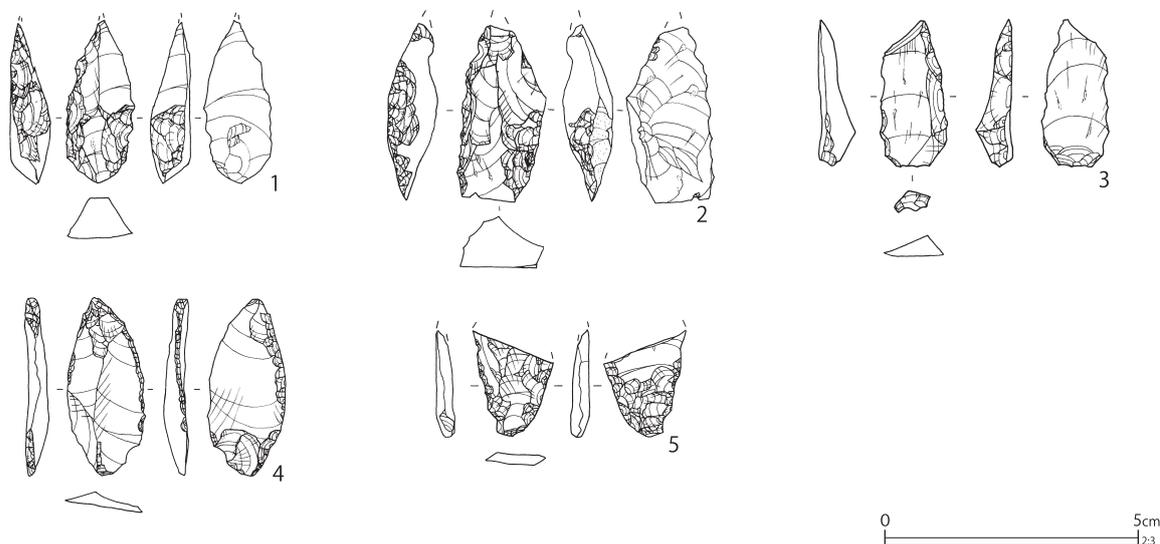
芦荻場遺跡の第2・3次調査では、遺構の覆土内やグリッド出土遺物としてナイフ形石器4点、尖頭器1点が出土している。いずれもプライマリーな出土状況ではなく攪乱を受けた遺物として出土しているが、旧石器時代の遺構が存在していたことは明らかである。

芦荻場地区は関東ローム層が厚く堆積しており、Ⅱ区のU-11区、Ⅲ区のD-25区の調査区際の壁面で、遺跡の基本層序を確認した（第63図）。Ⅰ層は表土層で、攪乱もしくは削平を受けており、その直下のⅡ層は縄文時代の包含層である。Ⅲ層は立川ロームⅢ層対応のソフトローム、Ⅳ層は立川ロームⅣ層対応のハードローム、Ⅴ層は立川ロームⅤ層対応の第1黒色帯、Ⅵ層は立川ロームⅦ～Ⅸ層対応の第2黒色帯、Ⅶ層は立川ロームのⅩ層に対応する層。Ⅷ～Ⅹ層は武蔵野

ローム層と推定される。

出土した石器の1は縦長剥片を素材とする尖頭器状の二等辺三角形で、左側縁と右側縁の基部付近に調整剥離を行うナイフ形石器である。2は横長剥片を素材とし、両側縁に調整を施すもので、下端を刃部とする切出し形石器の可能性がある。3も同様の先端部に左傾する刃部を有する切出し形石器と思われる。4は基部付近と右側縁及び先端部に調整を施すナイフ形石器である。5は柳葉形を呈し、両側縁に細かな調整を施す尖頭器で、基部のみ現存する。

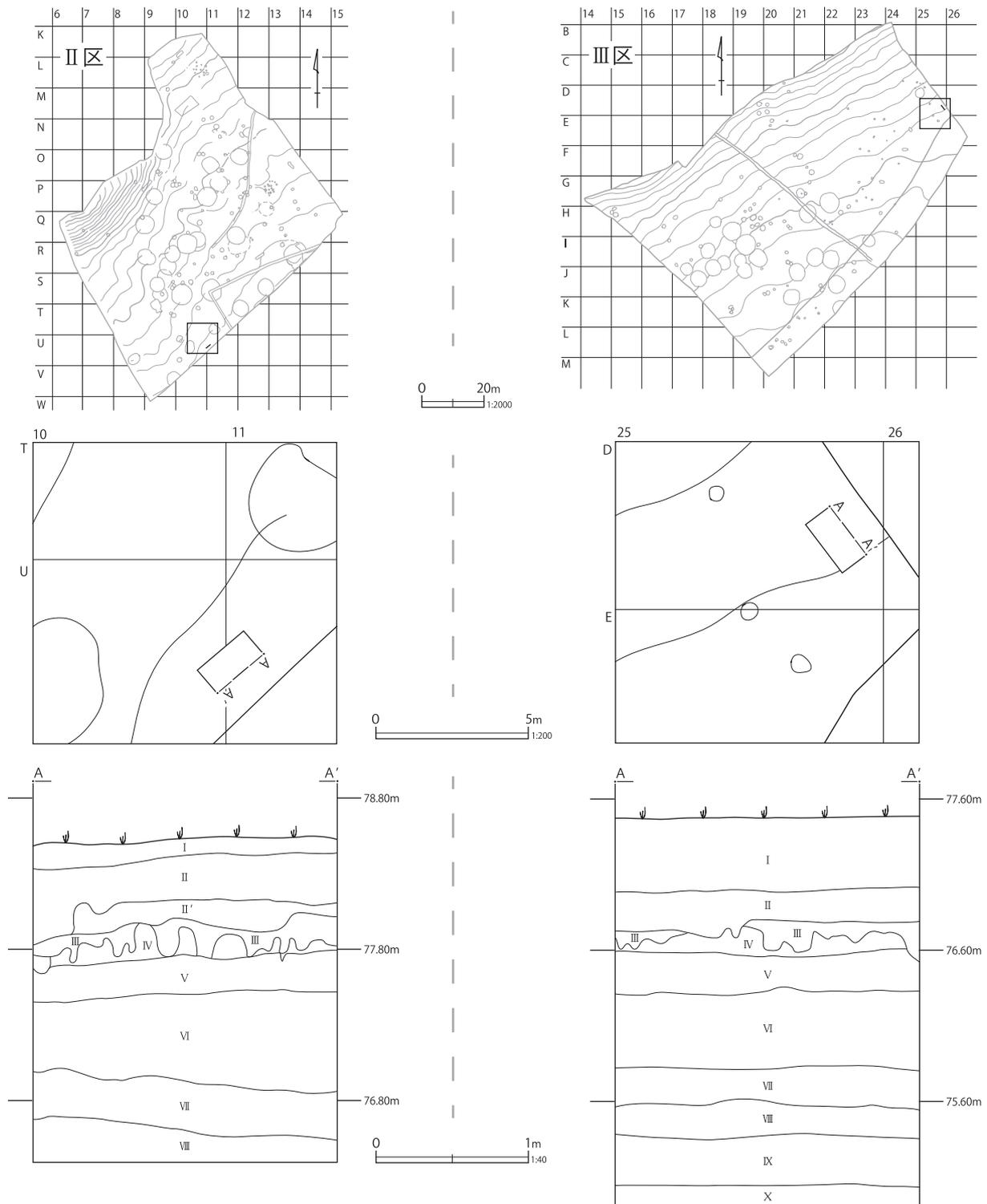
1～3はⅣ層下部の石器群、4、5はⅣ層上部もしくはⅢ層の石器群と思われる。1は尖頭器状であるが、小形であり基部が厚い造りであることから、Ⅳ層下部に位置付けられるものと判断した。



第62図 旧石器時代の出土遺物

第27表 旧石器時代出土石器観察表（第62図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
62-1	J-18	ナイフ形石器	チャート	3.2	1.3	0.8	3.0	
2	K-10	ナイフ形石器	黒曜石	3.5	1.8	1.0	4.4	
3	SJ19	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	1.4	0.7	1.8	
4	P-12	ナイフ形石器	黒曜石	3.5	1.6	0.5	1.8	
5	SJ7	尖頭器	黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.9	



基本土層

- I 表土・耕作土
- II 暗褐色土 白色微粒子少量 暗褐色粘土小ブロック微量
縄文土器の包含層 しまり悪い
- II' 暗褐色土 2層より色調暗い 暗褐色土をブロック状に含む
縄文土器の包含層
- III 暗黄褐色土 白色微粒子少量 赤色微粒子微量 しまり悪い
(立川III・ソフトローム)
- IV 明黄褐色土 白色微粒子多量 赤色微粒子中量 黒色微粒子微量
(立川IV)

- V 黄褐色土 白色微粒子多量 赤色微粒子微量 黒色微粒子を含む
(立川V・第1黒色帯)
- VI 暗黄褐色土 白色微粒子はIV・V層よりも少なく、赤色微粒子はIV・V層より多量
黒色微粒子多量 (立川VII~IX・第2黒色帯)
- VII 黄褐色土 白色微粒子微量 赤色微粒子多量 (立川X)
- VIII 黄褐色土 赤色微粒子少量 (武蔵野)
- IX 黄褐色土 VIII層より色調明るい
赤色微粒子を少量含むが、上位は粒径が大きい(径1mm)(武蔵野)
- X 黄褐色土 IX層より色調暗く、いわゆる暗色帯(武蔵野)

第63図 基本土層

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

芦荊場遺跡第2・3次調査で検出された竪穴住居跡は、第4次調査を合わせると合計80軒である。遺跡は、未調査部分が多いものの縄文時代中期中葉の勝坂式期から後半の加曾利EⅢ式期までの、径約180mの環状集落であることが明らかになってきた。住居跡の分布だけで言えば、200mの範囲に住居跡が構築されており、非常に大きな集落跡であると言えよう。

ここでは、調査区ごとに住居跡を報告していくが、調査時の遺構番号で報告するため、調査の都合で順不同になっていることを断っておきたい。

a) I区

2軒の住居跡が検出された。

第1号住居跡（第64図～第69図）

T-4・5区に位置する。南東側で第7号土壇に切られている。長径6.23m、短径5.45m、深さ0.35mの僅かに東西が長い楕円形を呈する。南側に埋甕を有することから、主軸はほぼ南北方向に求められる。

壁溝は東側半分を検出され、一部が二重に認められる。

柱穴は5基検出され、いずれも床面から40cm以上の掘り込みを有する5本主柱の住居跡である。主柱穴の深さは、P1=61cm、P2=58cm、P3=55cm、P4=60cm、P5=42cmである。

炉跡は住居跡中央やや北西寄りに位置し、南北に長い不整楕円形の掘り込みを有する。深鉢の上半部を利用した埋甕炉で、土器の周囲は被熱のため硬化が著しく、覆土の上層には多量の焼土が含まれる。

住居跡南壁際の中央部で埋甕が検出された。径45cm程の掘り込みに土器が正位に埋設されるが、東半分は重複する土壇のため欠損する。

炉体土器及び埋甕から、住居跡は加曾利EⅡ式

前半期の所産と判断される。

土器は第67図1～第68図20が出土した。

1は炉体土器である。口縁部区画に交互刺突文、胴部区画に刻みを施す沈線を施文して区画し、胴部下半部に沈線懸垂文を垂下する土器で、地文に条線文を施文する連弧文系の土器である。

2は胴部の括れが強い器形で、口縁部に突出する渦巻文を弧状に繋ぐ繫弧文土器である。胴部には2本隆帯と1本蛇行隆帯を交互に垂下するが、渦巻文と懸垂文の位置関係は規則的ではない。地文は条線文である。

3は口縁部に沈線渦巻文を弧状に繋げる連弧文を施文するもので、渦巻文下に3本沈線懸垂文を垂下する。2のモチーフを連弧文化した土器である。地文は条線文である。

4、5は胴部から底部にかけて現存するもので、4は単節RL、5は無節L縄文を施文する。

6、7は口縁部文様帯を有するが、連弧文土器の影響を受けたモチーフ構成となっている。8は口縁部区画線から直に懸垂文を施文するが、胴部を区画するものと思われる。地文は条線文である。

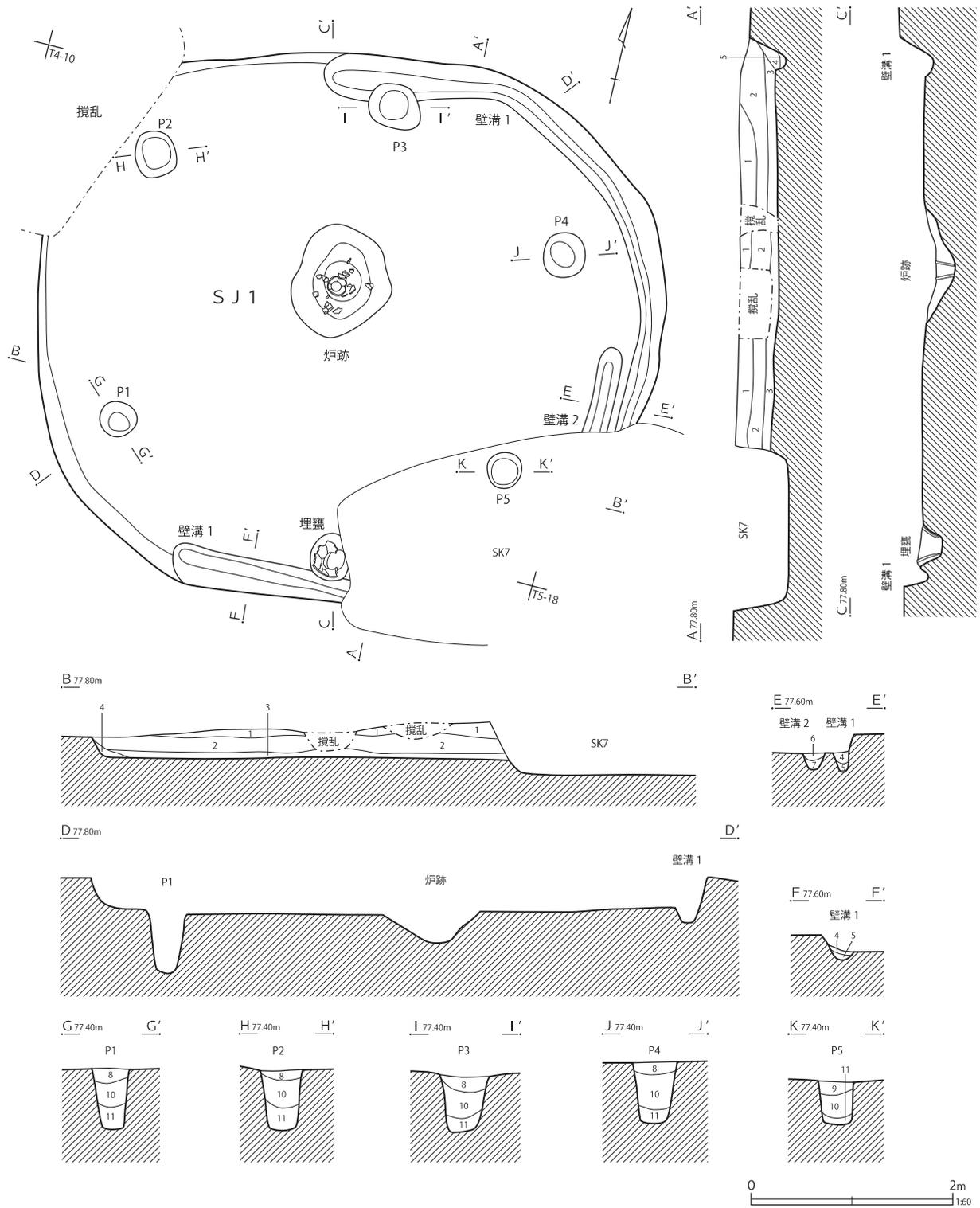
9～11は連弧文を施文していないが胴部を区画する連弧文土器の仲間である。9は撚糸文、10、11は単節RL縄文を地文とする。

12～16、18は連弧文土器で、3本沈線で整然とした連弧文を描くが、14は1本沈線で波状文を描いている。17は1と同様に胴部区画線下に懸垂文を施文する。13、17は撚糸文L地文、他は条線地文である。

19、20は無文の浅鉢で、20の内削状口唇部には1条横位の沈線を配している。

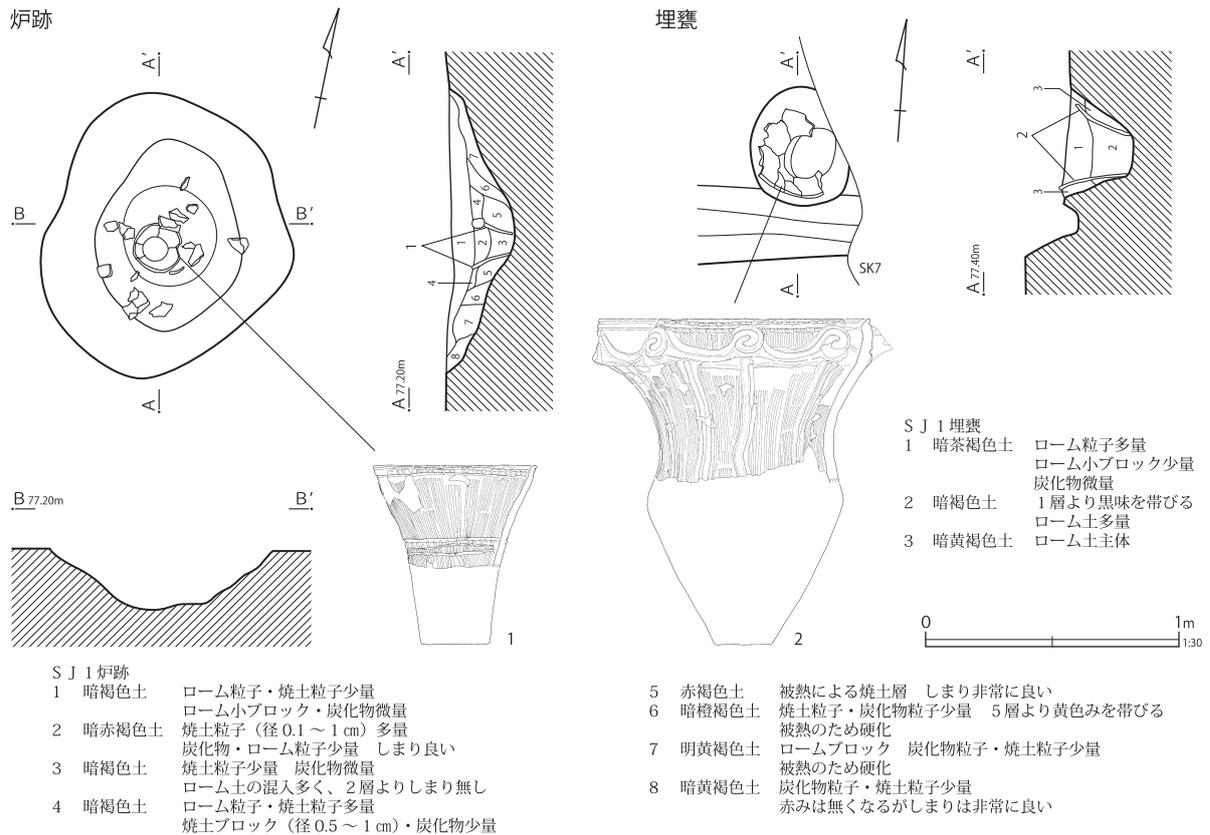
石器は第69図21～29が出土した。21は石鏃の未成品である。平面形は三角形を呈し、両側縁に剥離を施すことにより先端部を作出しようとしていることから、未成品と判断した。

22、23はともに微細剥離痕を有する剥片であ



- | | | | |
|---------|---------------------------------------|----------|---|
| S J 1 | | S J 1ピット | |
| 1 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 | 8 暗褐色土 | ローム粒子(粗)少量 ローム小ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物少量 ローム小ブロック微量 | 9 暗褐色土 | ローム粒子まばらに含む ローム小ブロック・炭化物粒子微量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック多量 炭化物少量 | 10 暗褐色土 | ローム粒子(粗)多量 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
ソフトローム微量(壁溝 1) | 11 暗褐色土 | ローム小ブロック・炭化物・ソフトローム微量
ローム粒子・ソフトローム多量 |
| 5 暗黄褐色土 | 4層をベースにローム土を多量 炭化物微量(壁溝 1) | | |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物少量 焼土粒子微量
ソフトローム土(壁溝 2) | | |
| 7 暗黄褐色土 | 6層に近似するが、ローム土の混入多い(壁溝 2) | | |

第64図 第1号住居跡(1)



第65図 第1号住居跡(2)

第28表 第1号住居跡柱穴計測表(第64図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	36.0	61.0	P 2	47.0	58.0	P 3	56.0	55.0	P 4	47.0	60.0	P 5	36.0	42.0

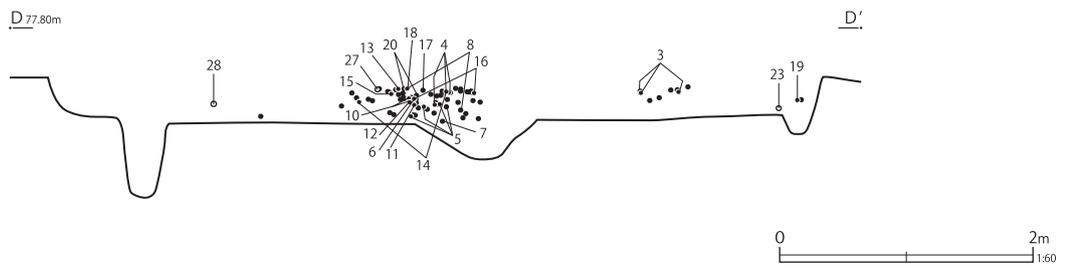
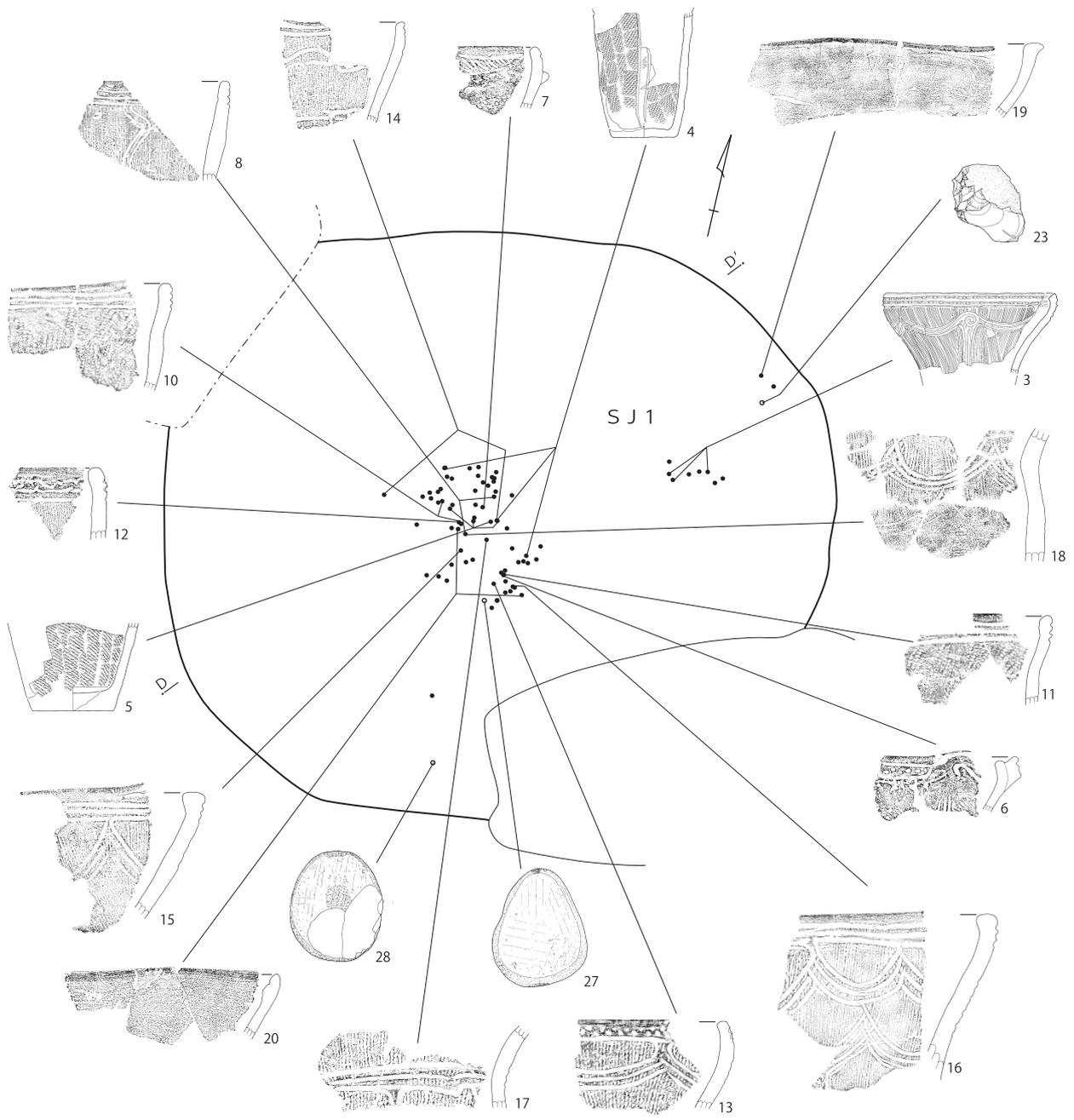
第29表 第1号住居跡出土復元土器観察表(第67図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
67-1	[13.6]	(21.4)	(21.4)	-	50%
2	[21.7]	(35.5)	[22.8]	-	45%
3	[10.0]	(20.8)	(21.4)	-	40%

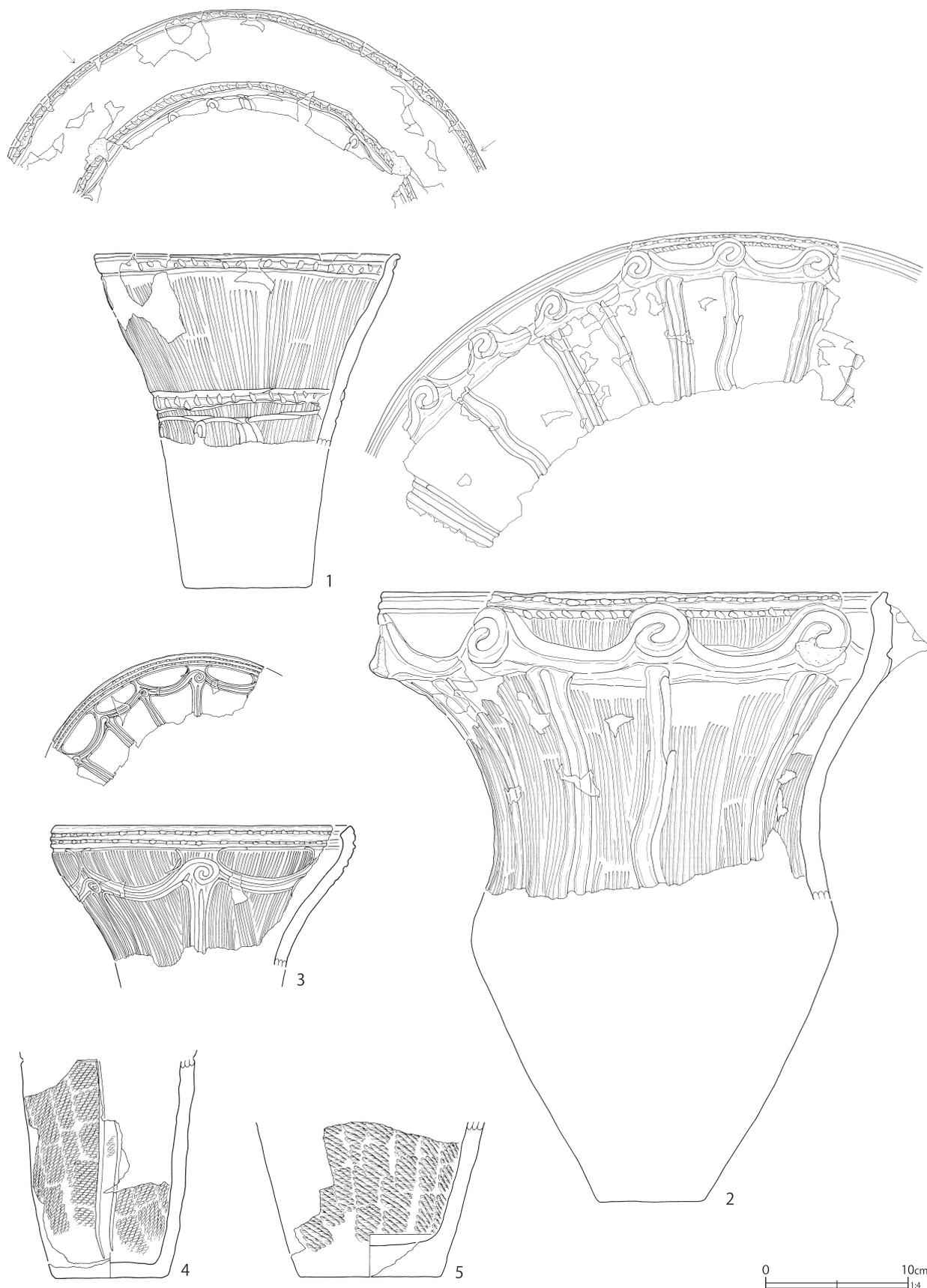
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
67-4	[15.4]	-	[12.2]	8.0	30%
5	[10.9]	-	[16.2]	-	10%

第30表 第1号住居跡出土石器観察表(第69図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
69-21	石鏃	Ⅲ①	硬質頁岩	3.0	2.6	0.5	3.5	
22	剥片	Ⅱ①	チャート	3.4	2.9	1.0	7.9	
23	剥片	Ⅱ①	チャート	3.7	3.3	1.0	9.4	
24	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[9.7]	3.8	1.5	65.8	
25	打製石斧	Ⅱ2②	頁岩	[8.5]	[3.9]	1.7	67.5	
26	砥石	Ⅲ②イ	砂岩	[4.8]	[3.5]	[1.0]	20.3	
27	磨石	Ⅳ1-3①ア	砂岩	11.1	8.8	4.7	643.2	表面一部赤色化
28	磨石	Ⅱ1-3②ア	砂岩	10.3	[8.6]	[5.1]	597.4	表裏面全部黒色化
29	石皿	Ⅳ②ア	砂岩	[17.8]	[9.9]	[9.6]	2078.7	表裏面一部赤色化



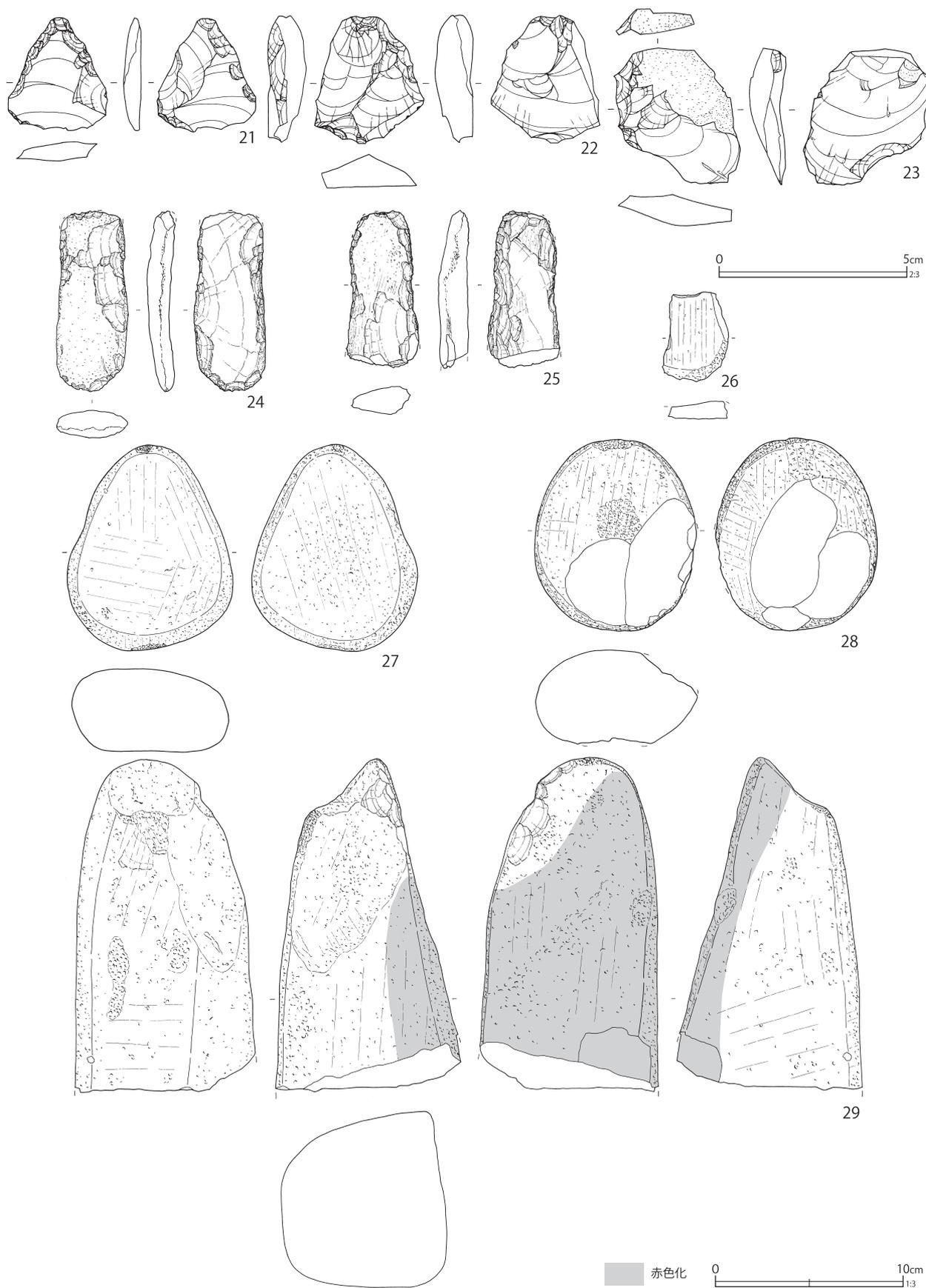
第66图 第1号住居跡遺物出土状況



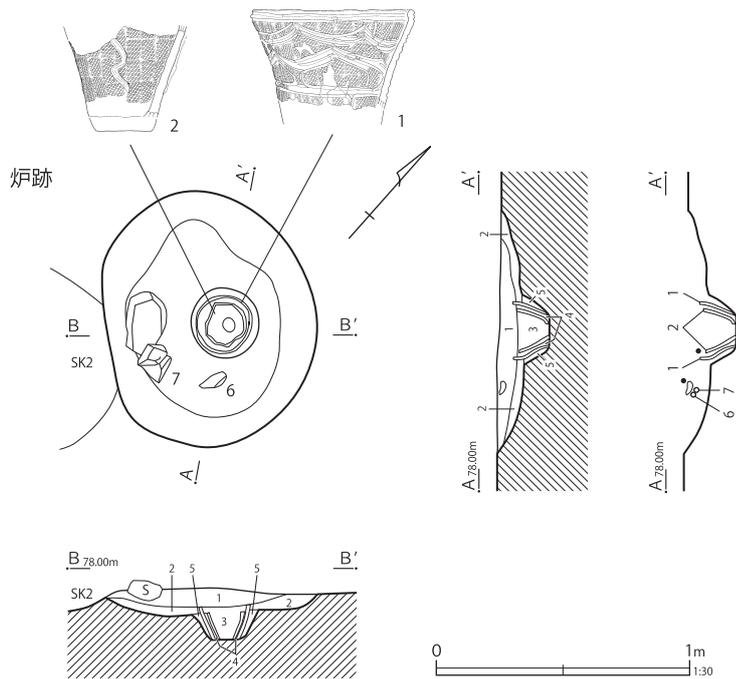
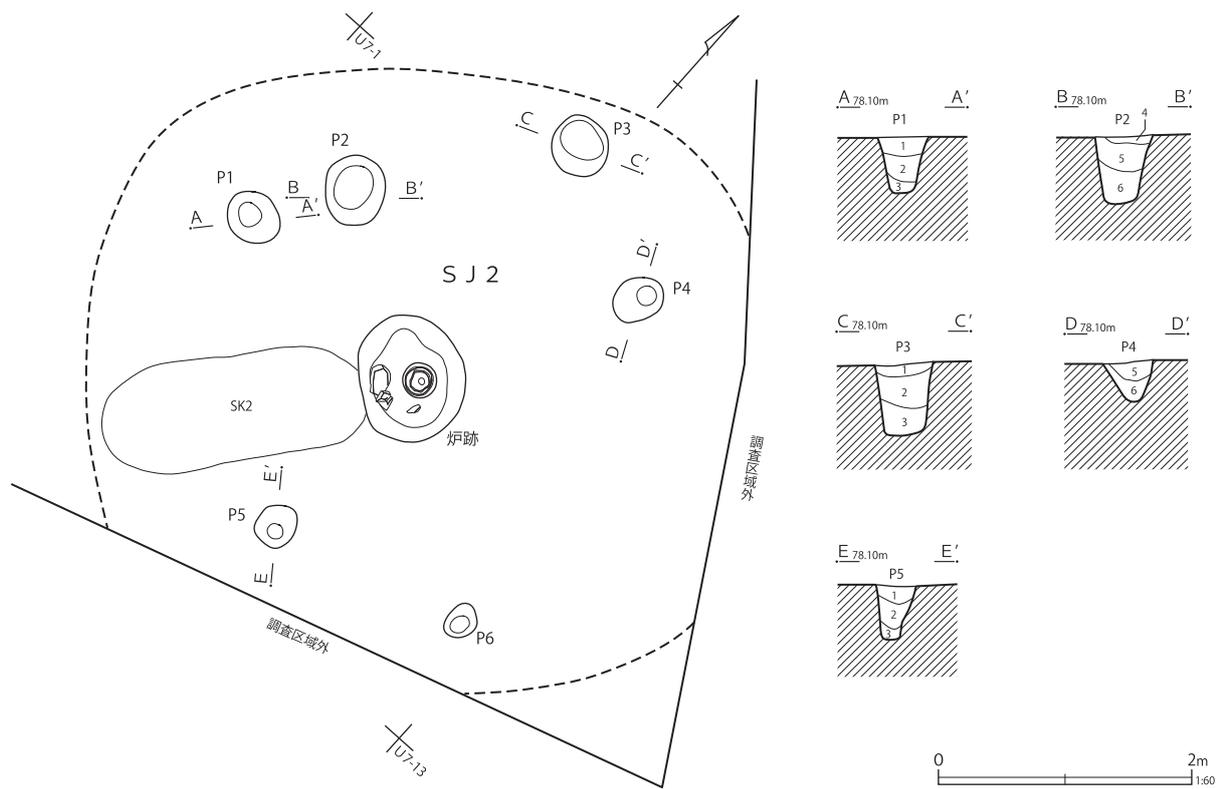
第67図 第1号住居跡出土遺物(1)



第68图 第1号住居跡出土遺物(2)



第69図 第1号住居跡出土遺物(3)



- S J 2ピット
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
ソフトローム多量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子微量 炭化物少量
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒子多量
ローム小ブロック少量
 - 4 黒褐色土 ローム粒子微量 炭化物少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子微量 ソフトローム少量
 - 6 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- S J 2炉跡
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 ローム小ブロック微量
焼土粒子・炭化物少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量
ローム小ブロック少量 焼土粒子多量
焼土ブロック（径1cm）微量
炭化物少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量
ロームブロック・焼土粒子微量
炭化物少量
 - 4 暗褐色土 焼土粒子少量
ソフトローム粒子少量
やや黒みを帯びる
 - 5 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒（径0.5～1cm）少量
焼土粒子・炭化物微量

第70図 第2号住居跡

第31表 第2号住居跡柱穴計測表（第70図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	45.0	42.0	P 2	55.0	53.0	P 3	50.0	56.0	P 4	42.0	33.0	P 5	35.0	43.0
P 6	28.0	—												



第71図 第2号住居跡出土遺物

第32表 第2号住居跡出土復元土器観察表（第71図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
71-1	[13.1]	(20.2)	21.4	-	50%
71-2	[11.8]	-	[16.0]	-	30%

第33表 第2号住居跡出土石器観察表（第71図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
71-6	敲石	Ⅲ3②ア	砂岩	12.1	4.5	3.0	166.4	
7	石皿	Ⅳ②ア	砂岩	[14.3]	[13.5]	5.4	1025.7	
8	石皿	Ⅳ②ア	絹雲母片岩	[22.3]	[17.0]	4.7	1944.0	

る。22が末端に、23が正面右側縁にそれぞれ微細剥離痕を有する。

24、25が短冊形を呈する打製石斧で、24の刃部は片刃である。

26は砥石で、砥ぎ面が不明瞭である。

27、28は磨石でともに被熱により赤色化している。27は一部を除いて正面のほぼ全面が赤みを帯び、28が全体的にやや赤色化している。

29は石皿で、両側縁の一部と裏面が被熱によって赤色化している。

第2号住居跡（第70図～第71図）

T-7、U-6・7グリッドに位置する。中央西側で、近世の第2号土壌と重複する。掘り込みが検出できなかったため住居の形状・規模は明瞭でないが、検出された柱穴の配置から、およそ径5m程の第1号住居跡と類似する形状の住居跡と思われる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は6基検出されたが、掘り込みの深さからP1～P5が主柱穴の可能性が高い。主柱穴の深さは、P1=42cm、P2=53cm、P3=56cm、P4=33cm、P5=43cmである。

炉は柱穴間のほぼ中央部にあり、1.00m×0.85mの浅い掘り込みの中央部に炉体土器が埋設されていた。また、炉体土器の周辺から大きな礫が出土しており、石囲埋甕炉の可能性もある。炉体土器は連弧文土器の胴上半部が埋設されており、さらに内側に別個体の底部が入れ子状に埋設されていた。両個体の間の土（4層）には顕著な焼土化が

見られないことから、内側の土器が設置されてから長時間の使用はなかったものと思われる。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から、加曾利EⅡ式後半期の所産と思われる。

土器は第71図1～5が出土した。

1は炉体土器で、胴上半部の単節RL地文上に、3本沈線による半山ずらした連弧文を整然と施文している。胴下半部にも連弧文を施しているものと思われるが、懸垂文の可能性もある。

2は入れ子となっていた別個体の底部である。単節RL地文上に、蛇行隆帯懸垂文を垂下する。

3～5は深鉢形土器の胴部破片で、3は燃糸文L地文上に3本沈線懸垂文を2沈線の山形文で横位連結するモチーフを施文する。4は磨消懸垂文を有するもので、地文は単節RLの充填施文である。5は粗い単節RLを施文する。

石器は第71図6～8が出土した。6は敲石である。先端部に若干敲打痕が残る。7、8はともに石皿の破片で、8は裏面に凹痕を有する。

b) II区

第3号住居跡（第72図～第85図）

S-11・12、T-11・12区に位置する。規模は長径5.28m、短径5.01m、深さ0.32mで、僅かに南北に長い楕円形を呈する。

壁溝は検出されなかった。柱穴は26基検出されたが、特に掘り込みが小さく、壁沿いに検出されたP19～27（P23は欠番）は壁柱穴に類するものと思われる。また、壁際の一番外側に巡る

ため、時期的にも最も新しい支柱穴に対応するものと推測される。

柱穴群は、近似する場所で重複する傾向にあり、P 1～3、P 6、7、10、P 12～14、P 15～17が3基を中心にしてまとまる傾向にあり、およそ3時期に分類できるようである。最も古段階と思われるのがP 3・6・13・17の一群で、配置からは4本柱と思われるが、5本支柱の可能性もある。埋土は埋め戻されたような様相を呈する。中段階と思われるのは、P 2・5・10・16の一群で、これも4本柱であろう。最も新しい段階がP 1・4・11・14・15の一群で、南側が開く5本柱の配置へと変化したものと思われる。なお、P18は覆土の様相が他の柱穴と大きく異なっており、他の遺構の可能性もある。支柱穴の深さは、P 1=77cm、P 2=73cm、P 3=29cm、P 4=76cm、P 5=66cm、P 6=70cm、P 10=65cm、P 11=74cm、P 12=54cm、P 13=73cm、P 14=74cm、P 15=85cm、P 16=76cm、P 17=76cmである。

住居跡中央から最終住居の埋甕炉が検出された。その下部に径50cm程の掘り込みが南北に隣接して3基検出され、炉体土器はその中央部に埋設されていた。したがって、炉は少なくとも3回作り替えられており、支柱穴の変遷とも符合する。なお、南北の炉跡の新旧関係は不明であり、北側の掘り込みには板状の礫が立てた状態で残されており、南側の掘り込みからは大形の礫が2点出土している。いずれも石囲炉であった可能性がある。埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から、勝坂式中段階から新段階にかけての時期の所産と思われる。

土器は第77図1～第83図103が出土した。1は炉体土器、20、21はP 1から、22、23はP 2から、24はP 4から、25はP 5から、26はP 6から、27はP 8から、28はP 11から、29はP 14から、30～32はP 15から、33はP 18から、34～37はP 25から出土した。

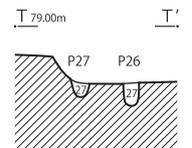
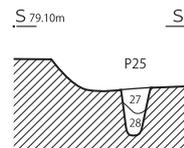
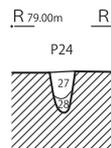
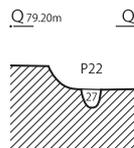
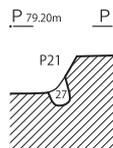
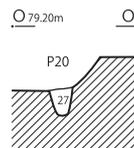
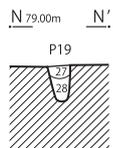
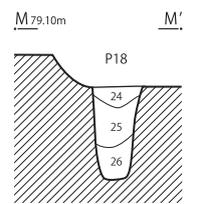
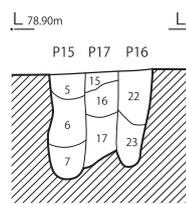
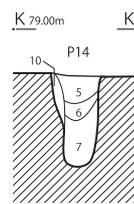
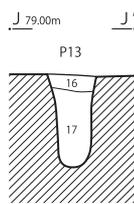
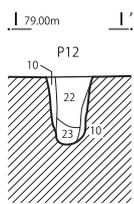
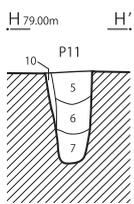
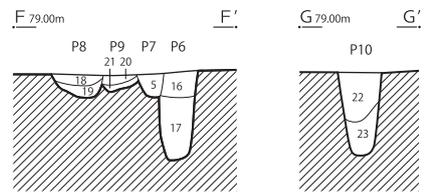
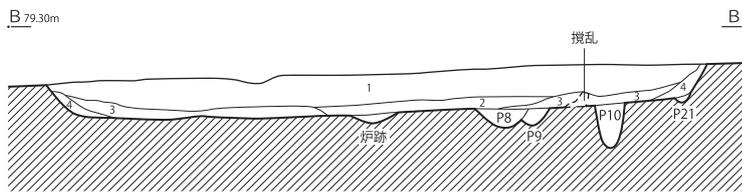
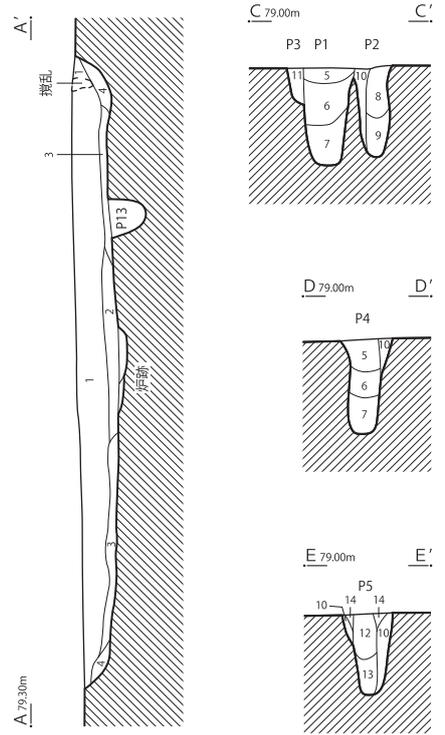
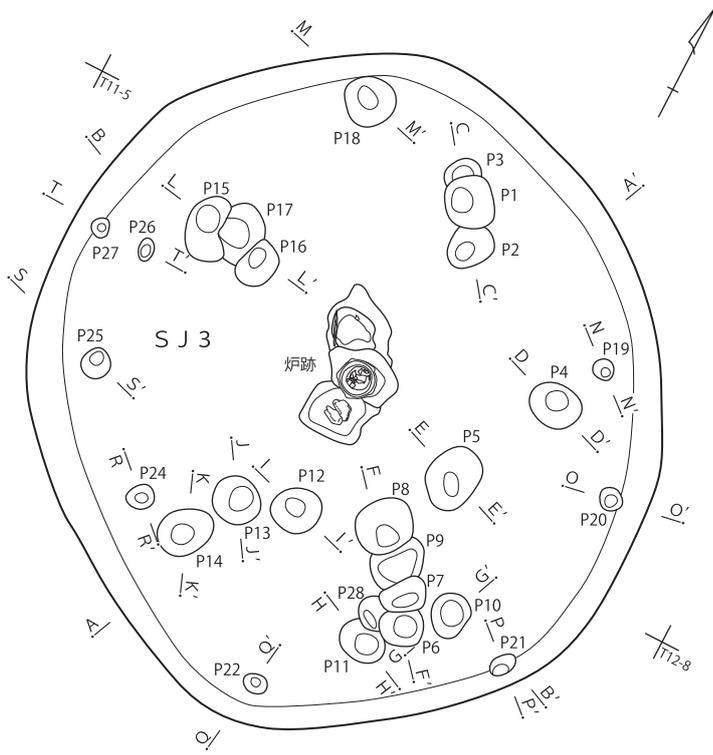
1の炉体土器は胴上半部が現存するが、口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯を構成する緩い波状口縁のキャリパー形深鉢で、頸部で括れ、胴部が円筒状となる深鉢であろう。口縁部は大きな耳状把手を中心に5単位の小把手が付き、幅広のキャタピラ状押引連続爪形文で、把手下に三角区画文、把手間に半月状区画文をそれぞれ5単位に施文する。幅広の爪形文脇には折れ線状の緩い沈線の鋸歯状文を沿わす。頸部文様帯には無加飾の低隆帯による楕円区画文を8単位に施している。

3は1とほぼ同様な器形で、波状口縁を呈し、波頂部から隆帯が垂下して渦を巻く。頸部には楕円区画文を配し、区画内に爪形文と横位の鋸歯状沈線文を施文する。

2、4、6はキャリパー形を呈し、口縁部を無文とする土器群で、把手の付くものが多い。胴部は刻みを施す隆帯で、渦巻文や区画文を施す。2は口縁部に大きな耳状把手が付く。6は短い無文の口縁部文様帯を有し、頸部に幅広の楕円区画文、胴部の幅広の文様帯に渦巻文やパネル文状の縦位矩形区画文を施している。隆帯上に刻みはなく、隆帯脇に幅広押引爪形文や小波状沈線文を施文し、部分的には半截竹管状工具を突き刺した蓮華文を施文している。

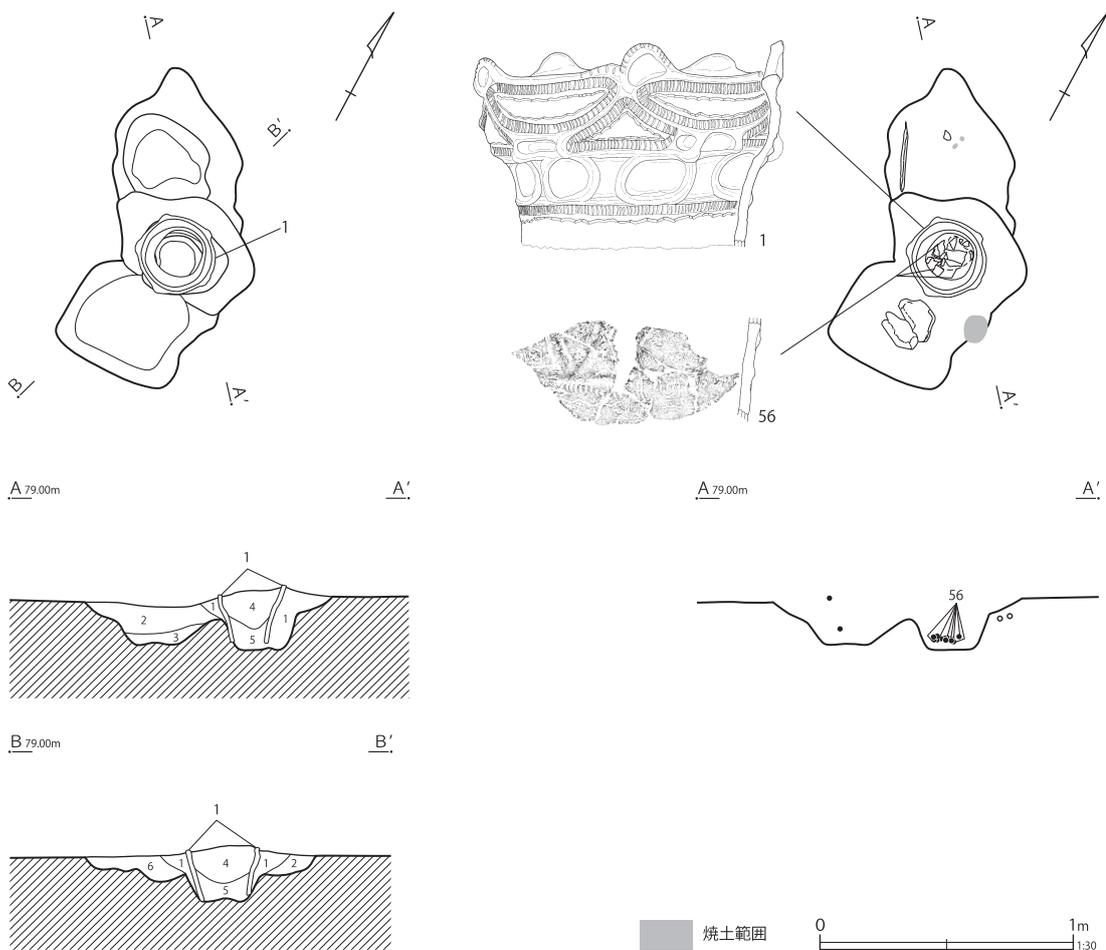
5、7、8はキャリパー形土器の胴部から底部である。5は胴下半部が膨らむ器形で、縄文地上に鋭利な沈線で三叉文や玉抱き三叉文を施文する。7は頸部に楕円区画文、胴部に幅広の渦巻文を施文し、8、9は底部文様帯に楕円区画文を施文する。7の渦巻文は押引爪形文で施文するが、楕円区画文は8、9と同様に隆帯脇に沈線を施文する構成である。区画内は集合の縦位沈線を充填施文する。

10～16は胴部に縄文を施文する土器群である。10は口縁部が大きく開くバケツ形の深鉢で、短い無文の口縁部を有し、頸部に刻み隆帯の楕円区画文と渦巻文を組み合わせたモチーフを描く。胴部



第72图 第3号住居跡(1)

炉跡



S J 3

- 1 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土・炭化物粒子・ソフトローム土少量
- 2 暗茶褐色土 炭化物・ローム粒子多量 焼土粒子少量 しまり非常に良い
- 3 暗茶褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子・焼土・炭化物粒子少量
ソフトローム多量
- 4 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 炭化物・焼土粒子微量 しまり非常に良い

S J 3 ビット

- 5 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 6 暗茶褐色土 ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量
- 7 暗茶褐色土 5・6層よりローム土多量 炭化物粒子少量
- 8 暗茶褐色土 ソフトロームの混入多量 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 9 暗茶褐色土 8層より黄色みを帯びる 炭化物粒子微量
- 10 暗茶褐色土 ロームブロック(径0.5~5cm)含む
ソフトローム多量
- 11 暗黄褐色土 ローム土主体で暗茶褐色土混じり ローム小ブロック多量
- 12 暗褐色土 ローム小ブロック少量 炭化物・焼土粒子微量
- 13 暗茶褐色土 12層に近似するが、黄色みを帯びる
- 14 暗茶褐色土 ソフトローム粒子多量 ローム粒子含む しまり良い
- 15 暗茶褐色土 ソフトローム粒子少量 炭化物粒子微量
- 16 暗黄褐色土 ローム主体で暗茶褐色土混じり 炭化物粒子微量
しまり非常に良い
- 17 暗茶褐色土 ソフトローム粒子多量 黄色みを帯びる 炭化物粒子微量

- 18 暗茶褐色土 ローム土・炭化物粒子少量
- 19 暗茶褐色土 18層よりローム粒子多量 黄色み強い、炭化物粒子少量
- 20 暗茶褐色土 ローム粒子少量 炭化物・焼土粒子微量
- 21 暗黄褐色土 ローム主体で20層土混じる
- 22 暗茶褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子多量
- 23 暗黄褐色土 ローム土主体で22層土混じる ローム粒子少量
- 24 鈍暗茶褐色土 ソフトローム土・粒子混じる 炭化物粒子少量
- 25 暗茶褐色土 24層をベースにロームブロックを混入
- 26 暗黄褐色土 ローム土主体で24層土混じる しまり良い
- 27 鈍暗黄褐色土 ソフトローム土混じる 炭化物粒子少量 しまり良い
- 28 暗黄褐色土 27層よりローム土多量 黄色みを帯びる

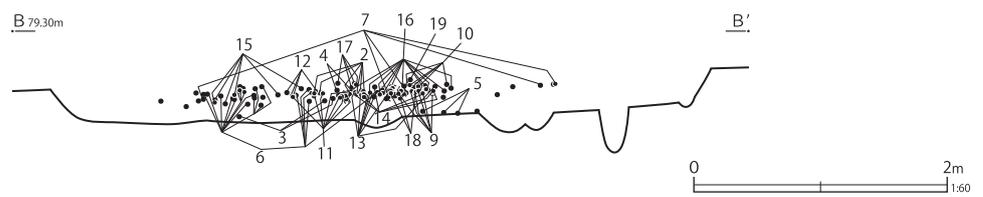
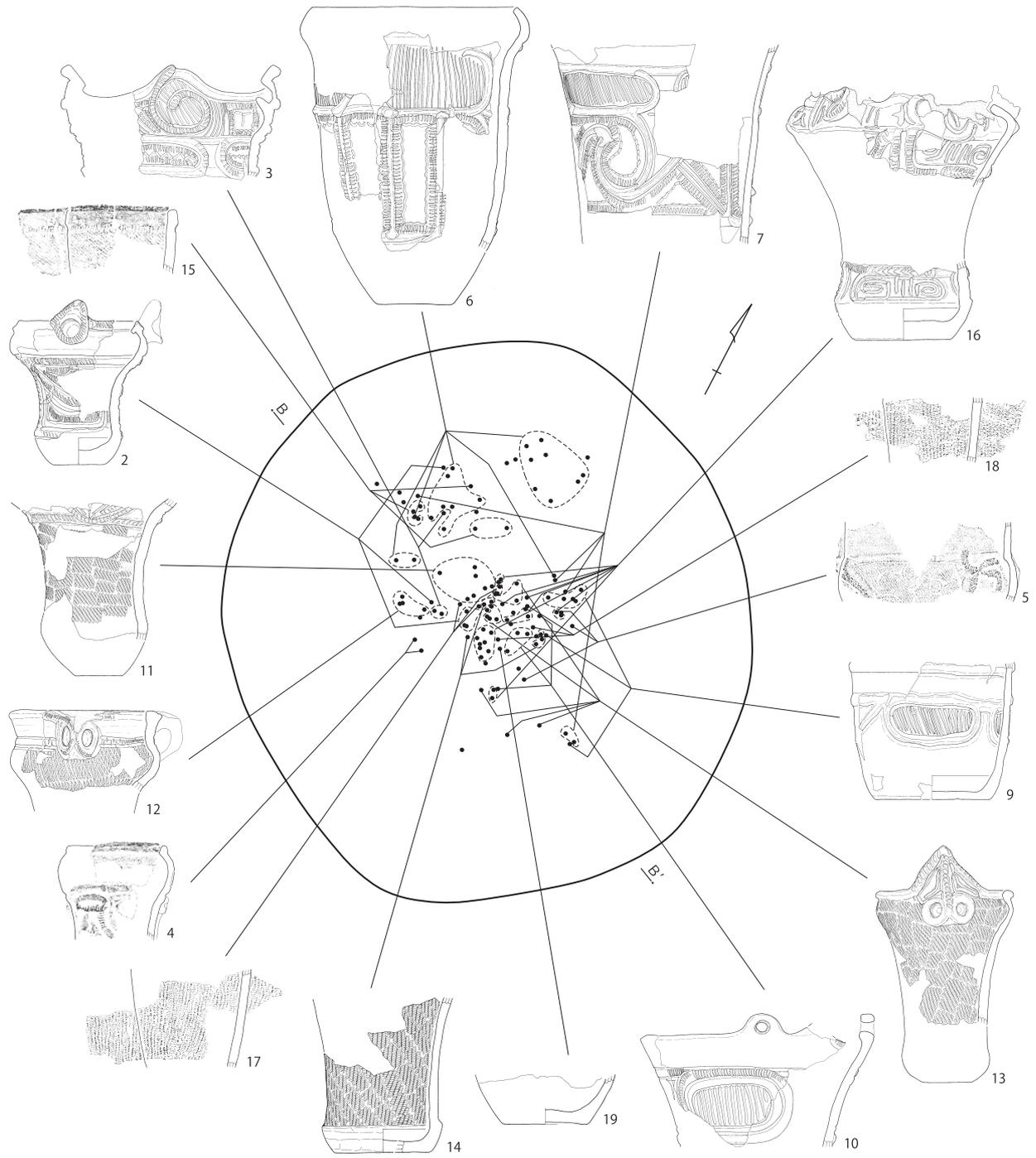
S J 3 炉跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗茶褐色土 1層より黄色みを帯びる ローム土少量 炭化物粒子微量
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック・炭化物粒子少量 焼土粒子微量
- 4 暗褐色土 3層より黒みを帯びる ローム小ブロック少量
炭化物・焼土粒子少量
- 5 暗褐色土 4層に近似するがロームブロックの混入少ない
炭化物・焼土粒子微量
- 6 暗茶褐色土 ソフトローム粒子含む ローム粒子・炭化物粒子少量
しまり良い

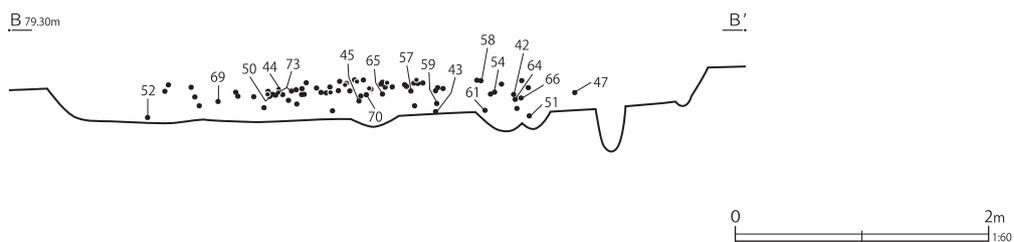
第73図 第3号住居跡(2)

第34表 第3号住居跡柱穴計測表(第72図)

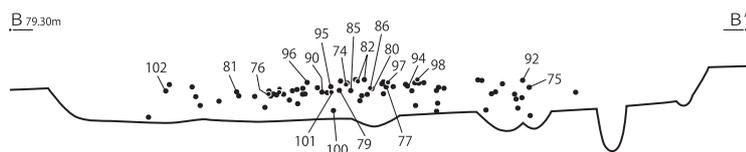
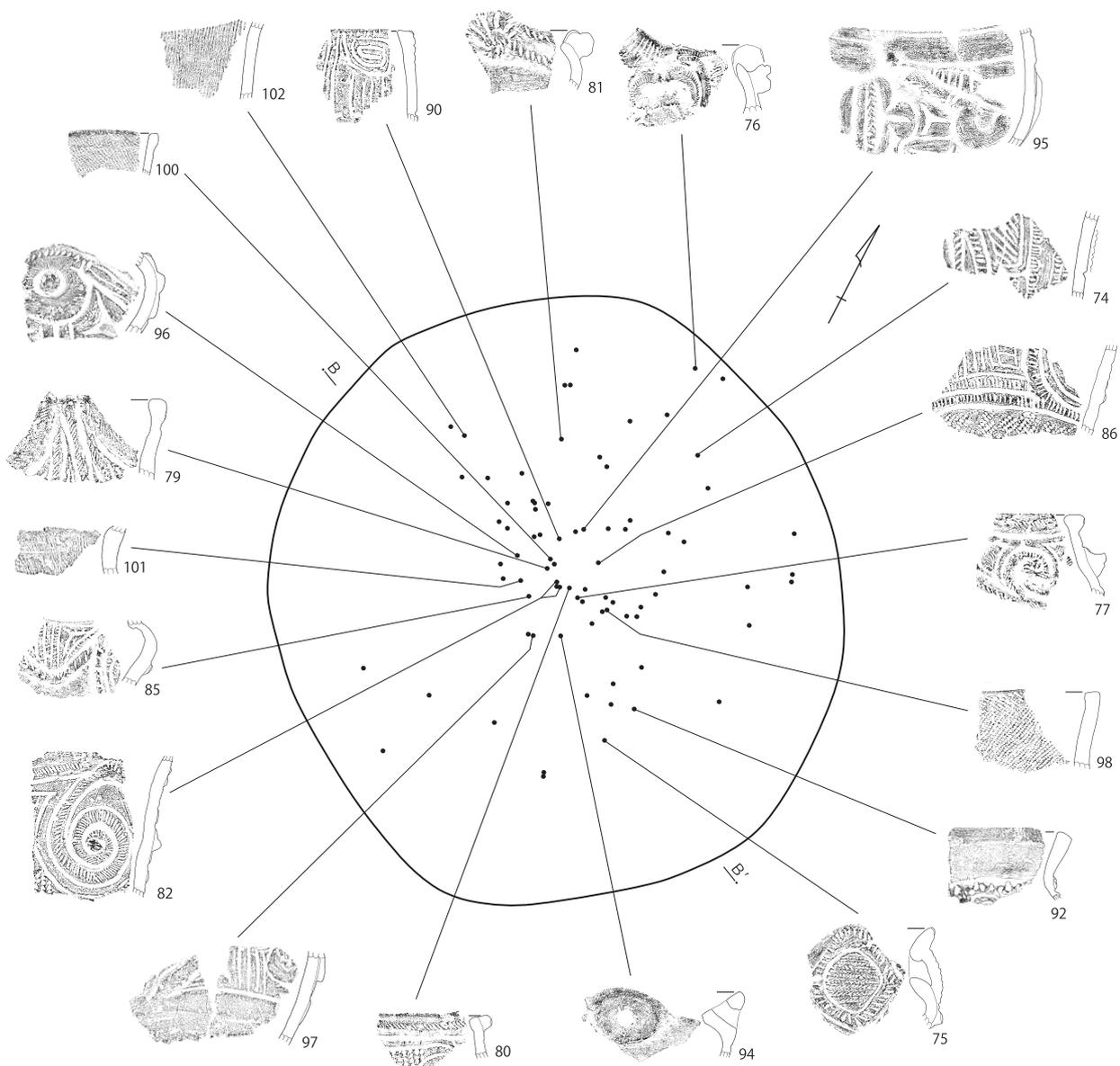
ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	40.0	77.0	P 2	39.0	73.0	P 3	31.0	29.0	P 4	43.0	76.0	P 5	53.0	66.0
P 6	36.0	70.0	P 7	37.0	19.0	P 8	48.0	18.0	P 9	46.0	14.0	P 10	32.0	65.0
P 11	39.0	74.0	P 12	41.0	54.0	P 13	39.0	73.0	P 14	47.0	74.0	P 15	53.0	85.0
P 16	38.0	76.0	P 17	49.0	76.0	P 18	41.0	74.0	P 19	18.0	29.0	P 20	20.0	22.0
P 21	23.0	23.0	P 22	19.0	14.0	P 23	欠番		P 24	22.0	33.0	P 25	24.0	37.0
P 26	19.0	18.0	P 27	17.0	14.0									



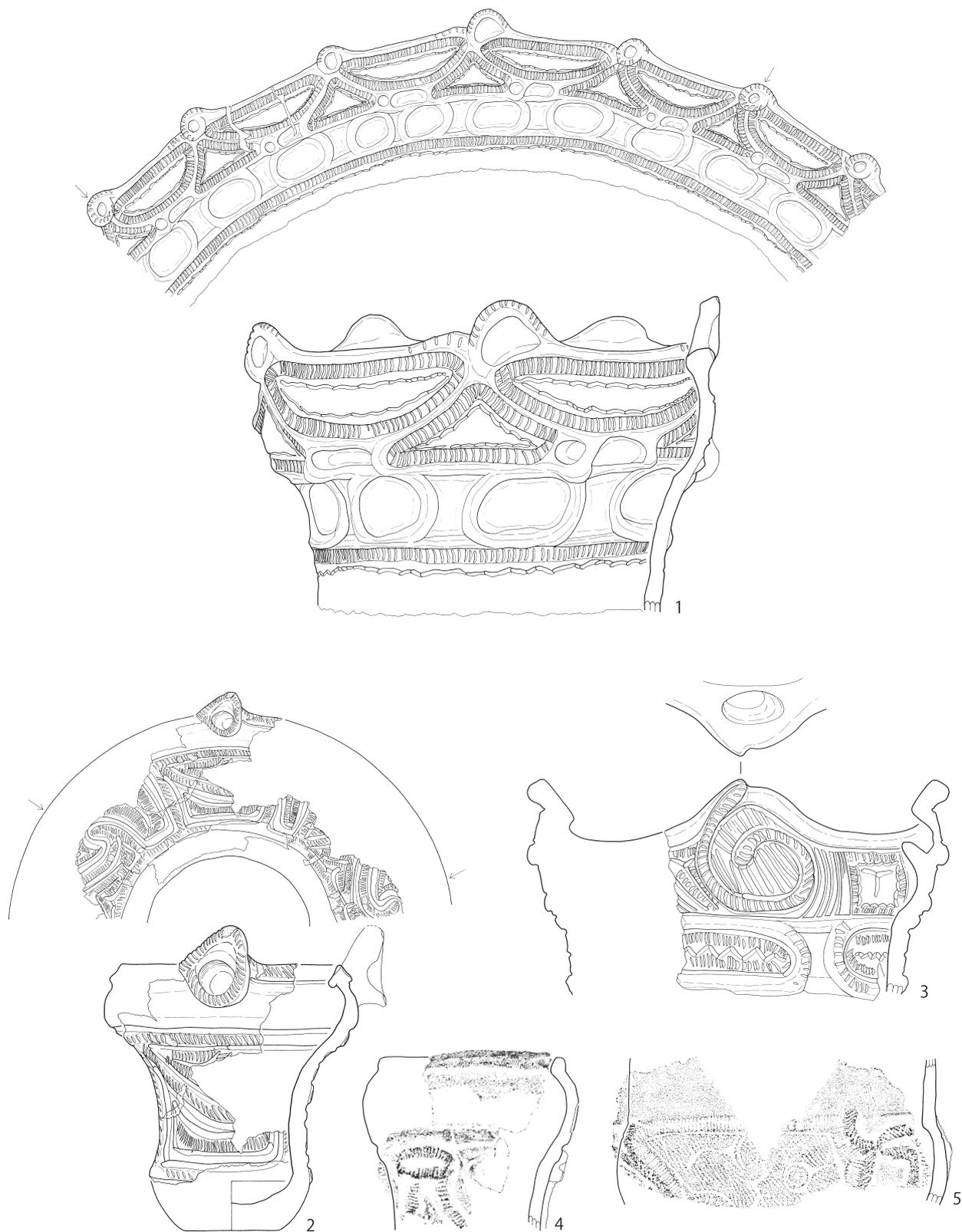
第74図 第3号住居跡遺物出土状況(1)



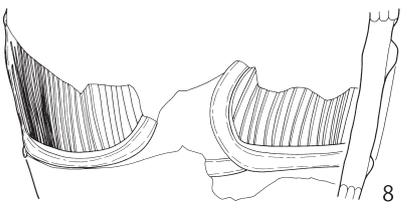
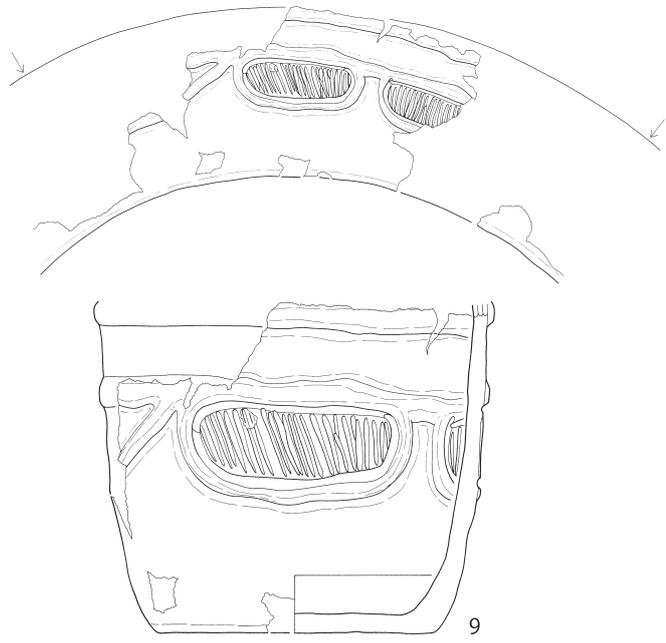
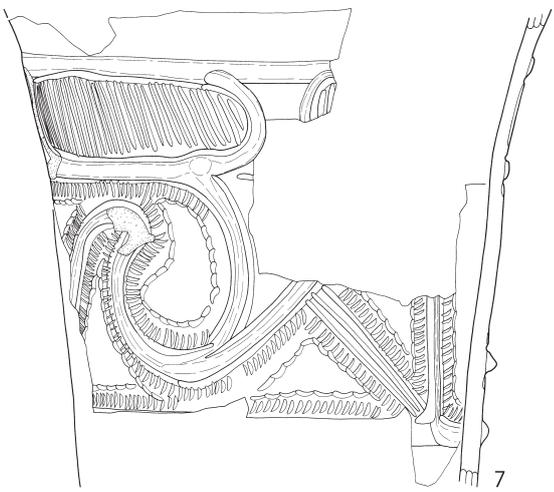
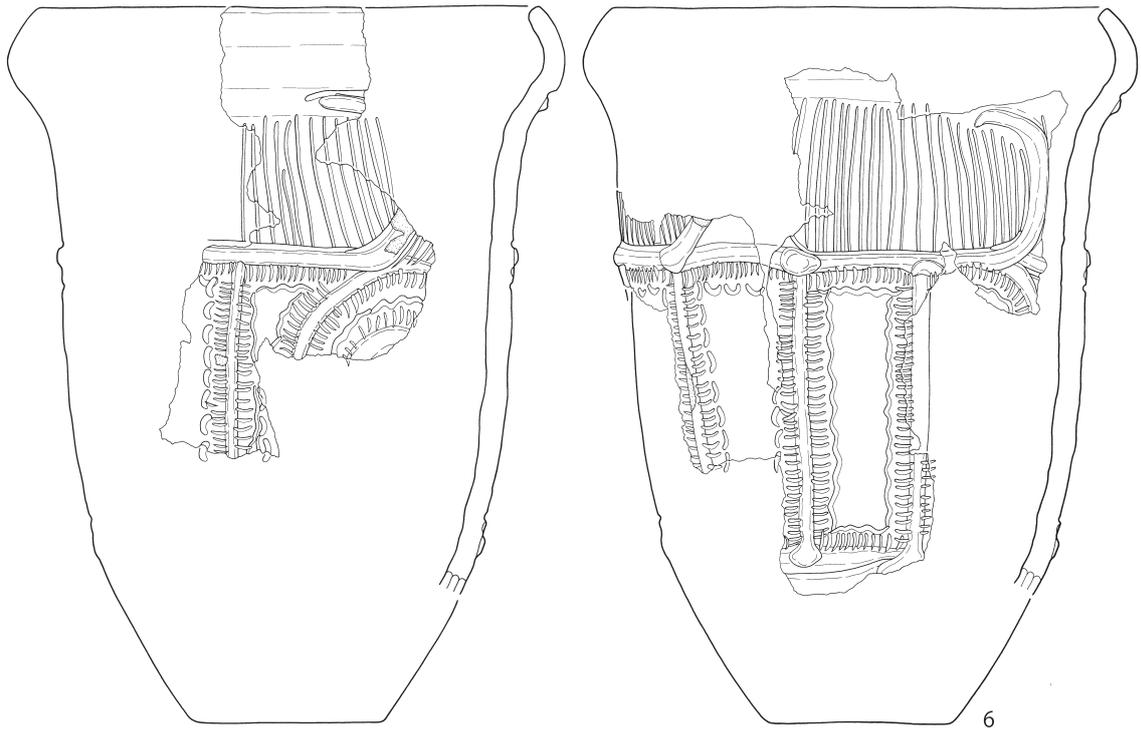
第75図 第3号住居跡遺物出土状況(2)



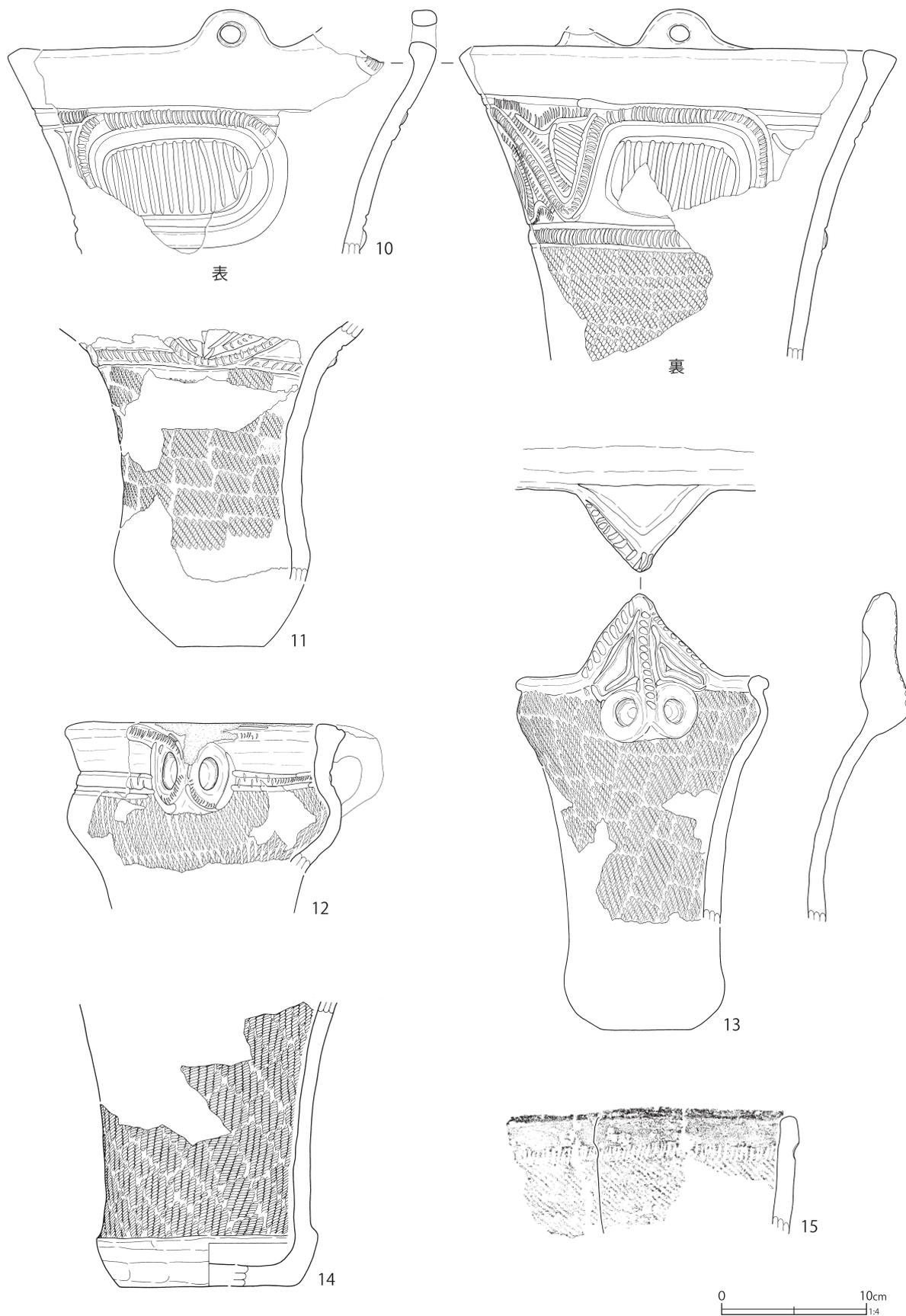
第76图 第3号住居跡遺物出土状況(3)



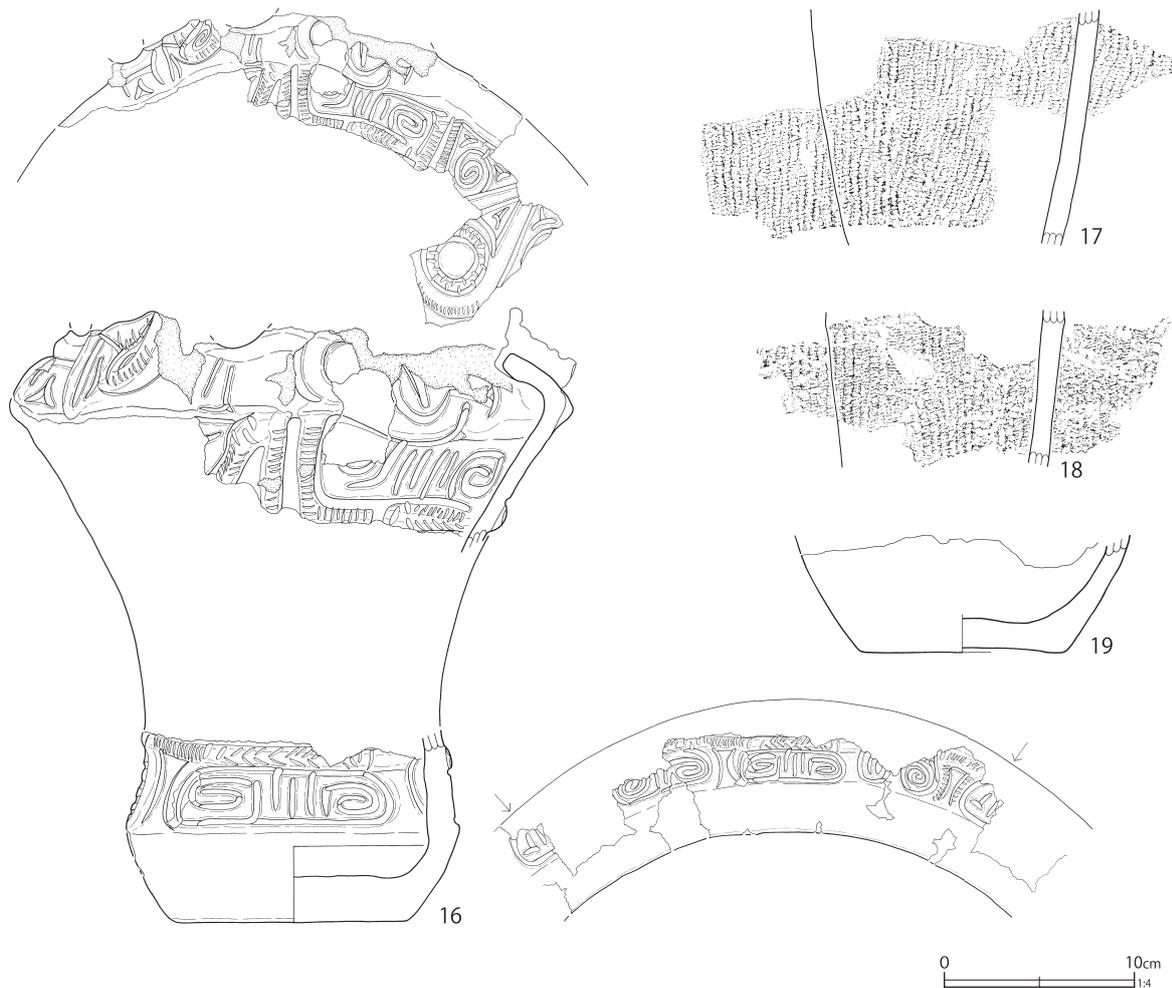
第77図 第3号住居跡出土遺物(1)



第78图 第3号住居跡出土遺物(2)



第79図 第3号住居跡出土遺物(3)



第80図 第3号住居跡出土遺物（4）

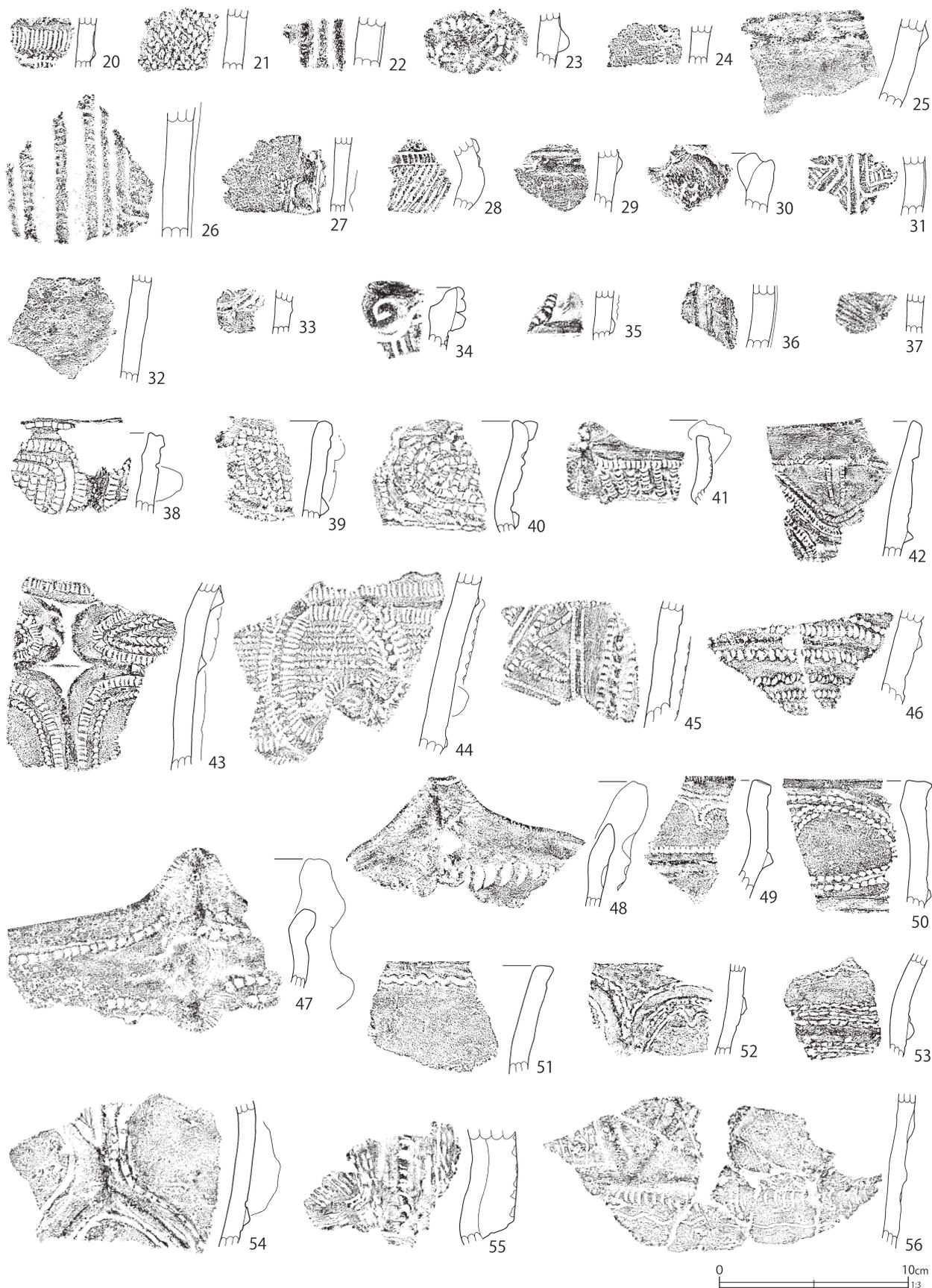
第35表 第3号住居跡出土復元土器観察表（第77～80図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
77-1	[21.6]	31.0	31.6	-	50%	79-11	[17.5]	-	[21.0]	-	50%
2	[21.5]	(15.4)	-	6.8	60%	12	[10.3]	(16.4)	(19.0)	-	30%
3	[14.9]	(23.6)	-	-	20%	13	[22.8]	(16.2)	18.2	-	70%
4	[12.0]	(12.4)	-	-	30%	14	[19.7]	-	-	12.1	30%
5	[10.1]	-	(22.5)	-	30%	15	[8.2]	13.7	-	-	30%
78-6	[31.2]	(25.4)	(26.4)	-	40%	80-16	(32.4)	(23.0)	(29.4)	12.0	50%
7	[25.2]	-	(28.8)	-	40%	17	[12.5]	-	(15.1)	-	30%
8	[10.1]	-	(20.8)	-	30%	18	[8.2]	-	(12.4)	-	30%
9	[17.4]	-	(20.2)	(14.6)	30%	19	[5.2]	-	-	10.6	20%
79-10	[16.9]	(30.0)	-	-	30%						

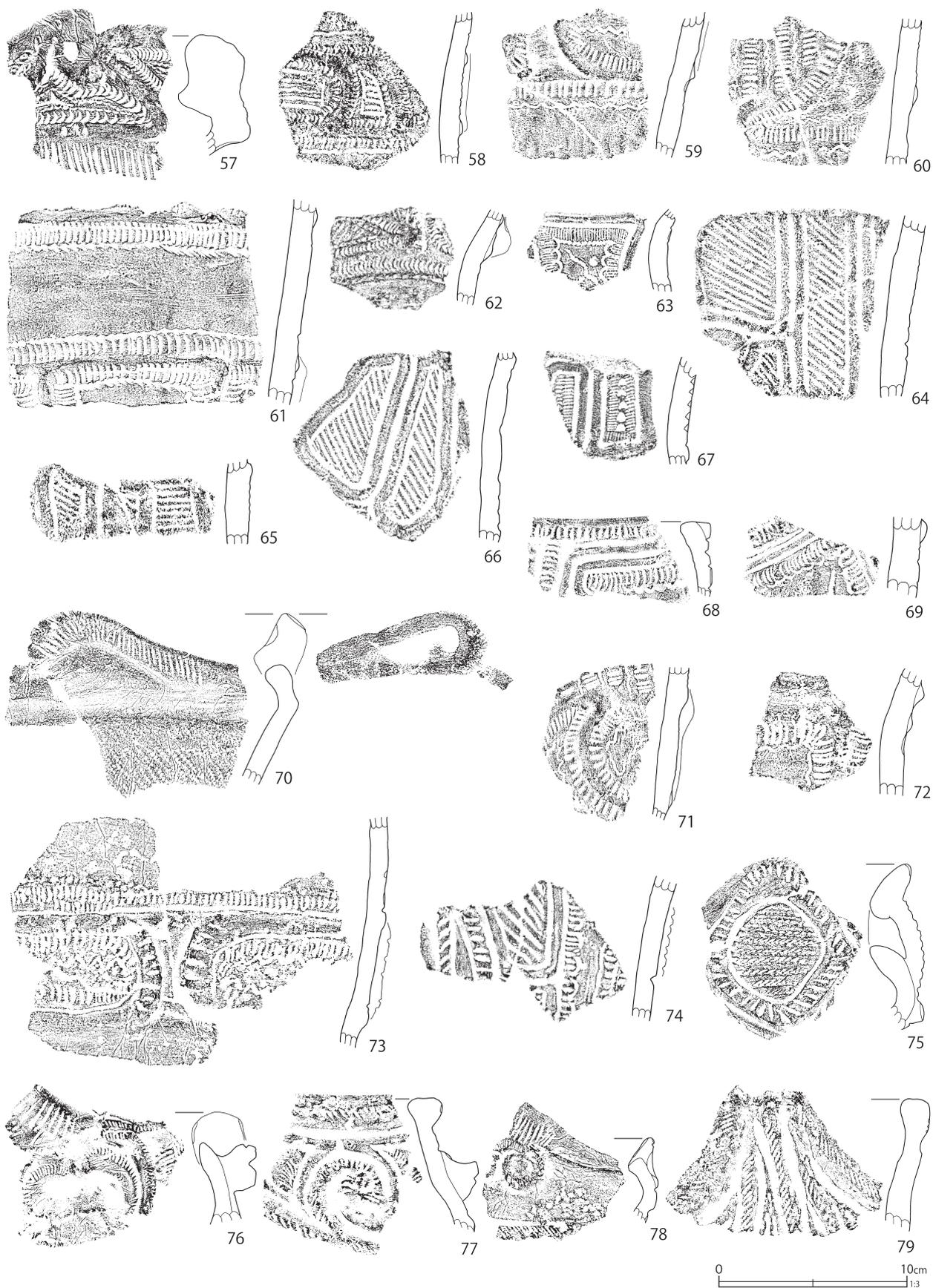
は単節RLを横位施文する。11はキャリパー形深鉢の胴部で、口縁部は刻み隆帯のモチーフを描いている。胴部は単節RLの横位施文である。

12、13は口縁部が強く膨らみ、底部が張り出す器形の深鉢である。12は無文の短い口縁部が立ち、眼鏡状把手が付く。頸部の区画平行沈線に

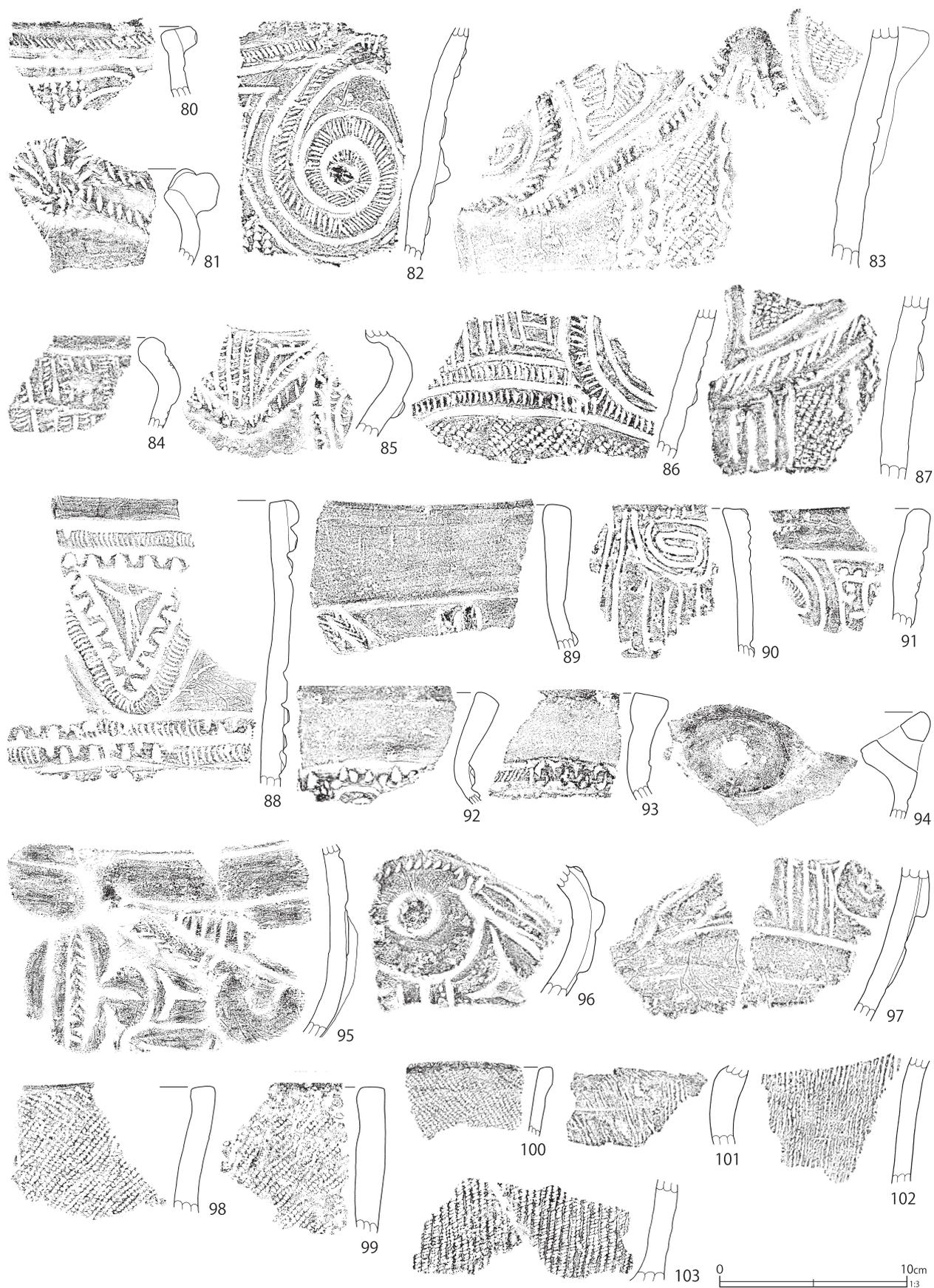
は交互刺突を施す。地文は0段3本撚りの撚糸文Lを密に施文する。13は口縁部に1単位の大きな山形把手が付く、山形頂部から口縁部の眼鏡状把手に向けて刻み隆帯を垂下し、両脇に三叉文を施文する。胴部は0段多条RL縄文を縦走縄文風に施文する。



第81図 第3号住居跡出土遺物(5)



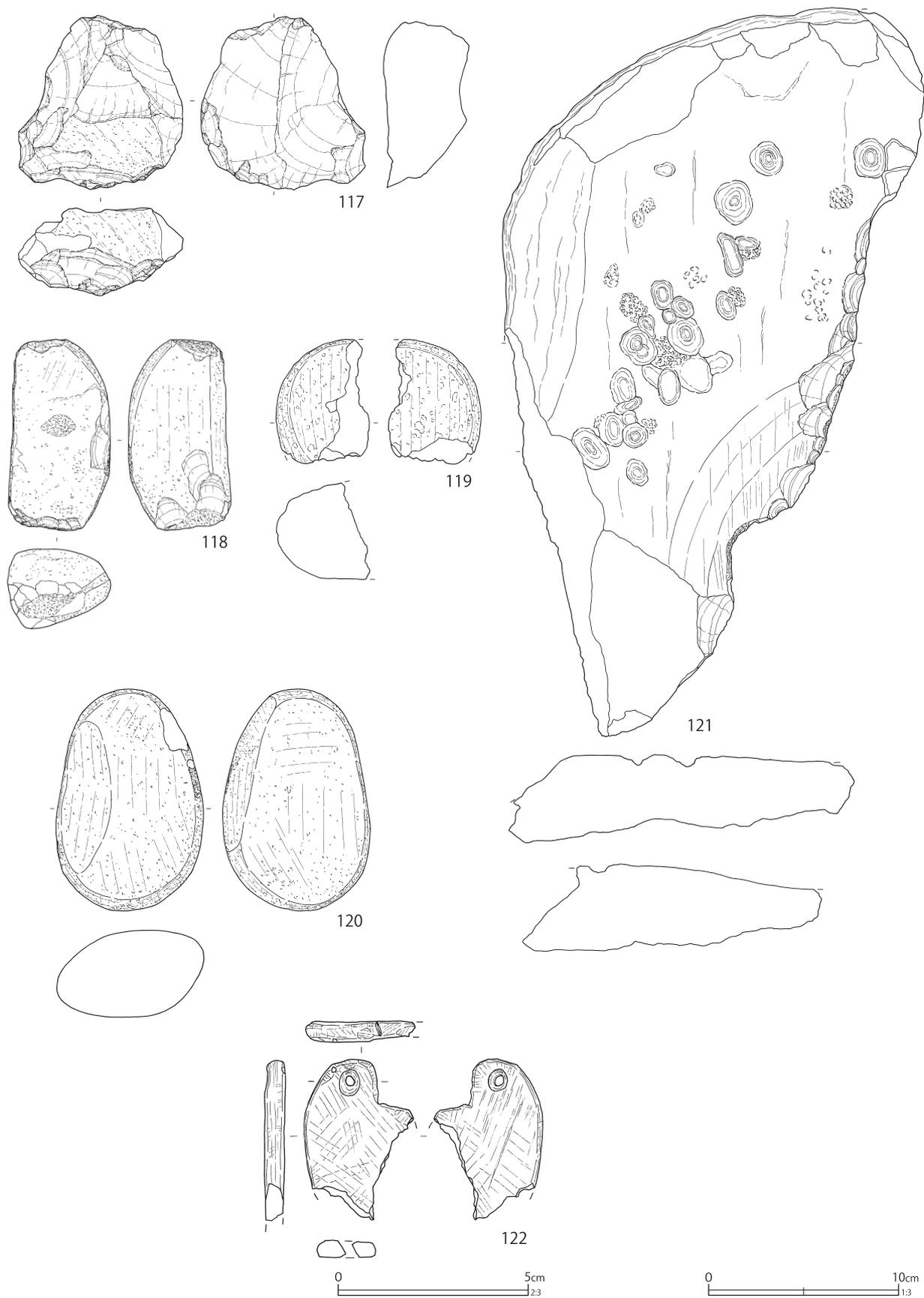
第82图 第3号住居跡出土遺物(6)



第83図 第3号住居跡出土遺物(7)



第84图 第3号住居跡出土遺物(8)



第85図 第3号住居跡出土遺物(9)

第36表 第3号住居跡出土石器観察表 (第84・85図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
84 - 104	石鏃	I 2②	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.4	
105	石鏃	III①	チャート	2.4	1.7	0.6	2.1	
106	スクレイパー	II①ア	ホルンフェルス	5.2	9.6	1.6	58.0	
107	磨製石斧	I ①イ	砂岩	8.3	[1.9]	1.1	21.0	
108	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[5.9]	[4.9]	[3.6]	142.5	敲石として再利用
109	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[7.0]	[4.4]	[2.2]	65.7	
110	磨製石斧	I ②ア	緑色岩	[5.0]	[3.1]	[2.1]	44.7	敲石として再利用
111	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	11.9	41.0	2.3	137.4	
112	打製石斧	II 2②イ	砂岩	[12.4]	4.1	2.9	148.2	
113	打製石斧	II 2①イ	砂岩	[11.4]	[3.6]	1.9	107.3	
114	打製石斧	III 2②ア	砂岩	9.6	6.5	2.3	121.3	
115	打製石斧	III 2②イ	砂岩	[9.7]	[5.7]	1.4	83.6	
116	打製石斧	I ②ア	頁岩	12.0	5.8	3.0	207.1	
85 - 117	礫器	①イ	ホルンフェルス	9.2	8.6	4.6	331.7	
118	敲石	II 1①ア	砂岩	10.1	5.4	4.2	306.6	
119	磨石	I 1②ア	多孔質安山岩	[6.6]	[4.9]	[5.1]	186.6	
120	磨石	II 1①イ	閃緑岩	11.7	7.7	4.6	601.9	
121	石皿	II 2②イ	緑泥片岩	[38.9]	[22.1]	[5.0]	4406.4	
122	垂飾	②イ	滑石	[4.2]	[2.9]	0.5	6.9	

14は底部が短く張り出し、胴部に0段多条RL縄文の縦走縄文を施文する。

15は円筒状の深鉢で、短い無文の口縁部を横位の押引爪形文で区画し、胴部に単節RLを横位施文する。

16は内折する口縁部が大きく開き、胴部で括れ、底部が張り出す器形の深鉢で、現存する部分では口縁部に把手を絡めた渦巻文状のモチーフを、頸部に区画文帯を有し、幅広の胴部文様帯に渦巻文等を絡めたモチーフを描き、底部に渦巻文を有する楕円区画文を配置する文様構成である。区画は刻み隆帯で行い、部分的に「ハ」字状の刻みを施している。覆土内で最も新しい段階の土器と思われる。

17、18は深鉢の胴部で、0段多条RLの縦走縄文を施文する。19は無文の張り出す底部である。

38～46は角押文や三角押文でモチーフを描く土器群で、勝坂式古段階の猪沢式や新道式段階の土器群である。区分が難しいが、38～41の角押文のみ施文する土器群は猪沢式、42～46は三角押文も併施文する新道式に比定されよう。

47～56は阿玉台式系の土器群で、大半は雲母を含み、2列の角押文や押引文、爪形文を施文するもので、阿玉台I b式からII式に比定されよう。

57、58、61、62はキャタピラ文状の幅広押引文を施文するもので、三角押文の鋸歯状文を沿わせる。59、60、71、72は幅広押引文に沿って沈線の鋸歯状文を沿わせている。若干の時間差があるものと思われるが、およそ新道式の新しい段階から藤内式にかけての土器群と思われる。

63～69、74はいわゆるパネル文土器で、63、68、69は蓮華文を施文する。藤内式段階である。

70～87は刻み隆帯で渦巻文などのモチーフを描き、隆帯脇に沈線を沿わす土器群で、およそ井戸尻式並行の勝坂式新段階の土器群である。73は幅広の押引爪形文を施文するが、隆帯脇に沈線が沿うことから新しいものと判断した。勝坂式の新段階にも三角押文や角押文、キャタピラ状押引文等の要素が残存するため、文様要素のみでは時期判断が難しい。

88～97は勝坂式終末段階の土器群で、沈線文のみでモチーフを描くもの、隆帯状に交互刺突を

施すもの、扁平隆帯の縁に刻みを施すもの等がある。

98～103は地文に縄文や撚糸文を施文する土器である。98、99は単節R Lの縦位施文で、98は口縁部に1段横位施文する。100は単節R Lの横位施文、103は0段多条R Lの縦走縄文である。101、102は撚糸文Lである。

石器は第84図104～第85図122が出土した。

104は石鏃で、正面左脚部が欠損している。105は石鏃の未成品である。平面形状は崩れた五角形状を呈し、先端部と脚部の作り出しが認められることから未成品と判断した。

106はスクレイパーで、横長剥片を素材として利用している。刃部は両面交互剥離によって作出されている。

107、108は乳棒状を呈する磨製石斧の刃部片で、刃こぼれが認められる。109は磨製石斧の未成品である。刃部の作り出しが認められることから、未成品と判断した。110は欠損した磨製石斧の基部を作業面として敲石に再利用されている。

111～116は打製石斧である。111～113は短冊形を呈する。刃部は111が片刃、112が両刃である。113は刃部を欠いている。114、116は撥形を呈する。114が基部を、116が刃部を欠いている。114の刃部は両刃である。115は打製石斧の下半部で、刃部が両刃である。また、素材に横長剥片を利用している。

117は礫器である。

118は敲石で、上下端部を作業面にしている。

119、120が磨石で、120は周縁を整形している。

121は石皿で、裏面は欠損している。中央の皿部は使用に伴い、著しく摩滅している。皿部の左側から上部にかけて凹痕が十数箇所認められる。

122は垂飾である。上部の孔は両面から穿孔されている。正面が丁寧に研磨されているのに対し、裏面は整形が粗く、研磨の際に生じたと思われる深い擦痕が残っている。

第4 a・b号住居跡（第86図～第97図）

S-10・11区に位置する。遺構中央部を近世の第1号溝跡によって大きく壊されている。また、住居跡南側で重複している第36号土壇は、調査途上で土器（第91図11）を逆位に埋設した第36号土壇（第617図3）であることが判明した。

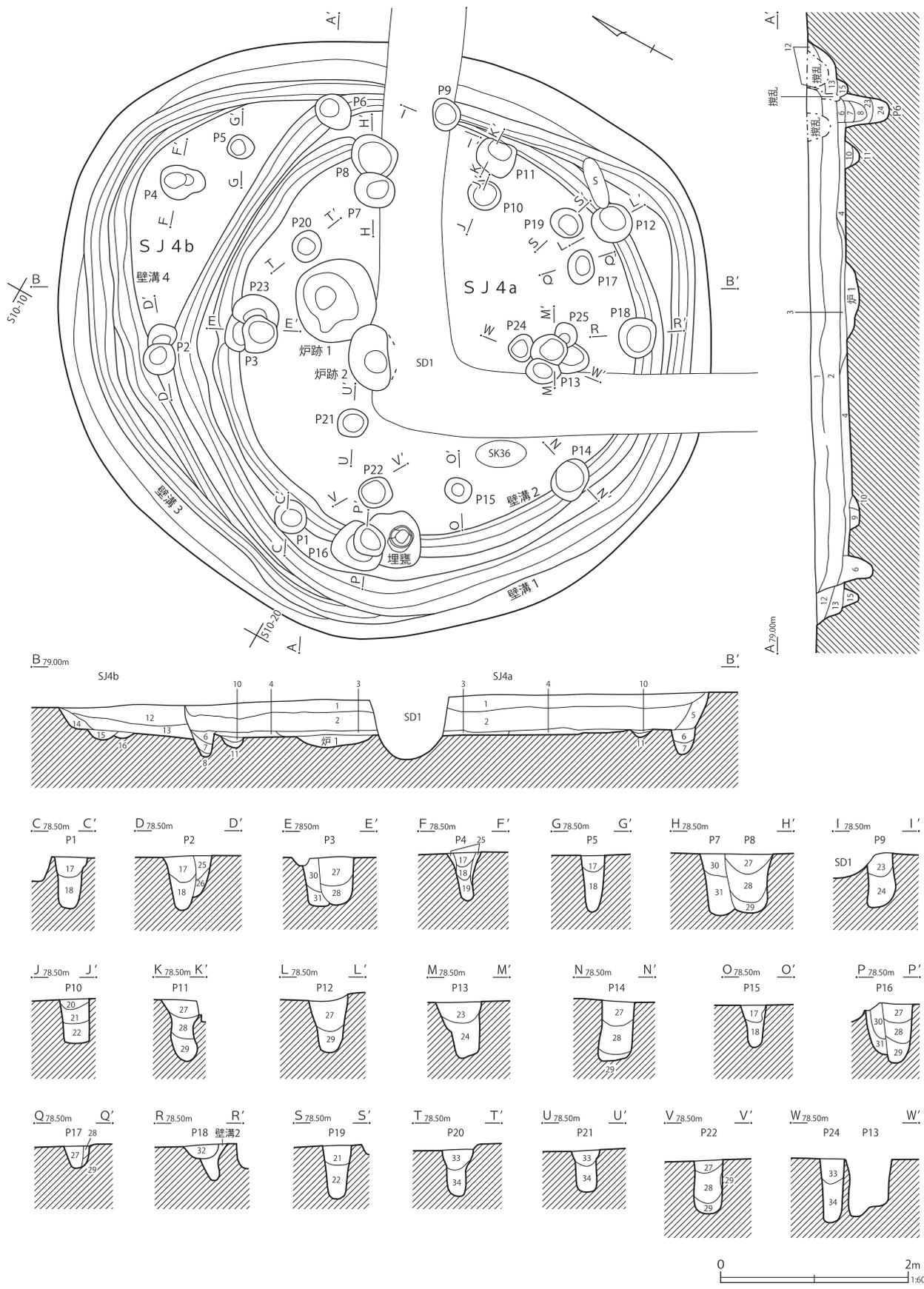
最終的には長径6.4m、短径6.9m、深さ0.4mとなり、大きく南北2軒の住居跡の重複であることが判明した。南側で新しい住居跡を第4 a号住居跡（S J 4 a）、北側で古い住居跡を第4 b号住居跡（S J 4 b）として報告する。

第4 a号、第4 b号住居跡とも2本の壁溝を有し、計4本の壁溝が検出された。第4 a号住居跡の外側の壁溝1が新しく、第4 a号住居跡の最終的な形状である五角形を示している。同じく第4 b号住居跡では外側の新しい壁溝3が、不整形のプランを示している。

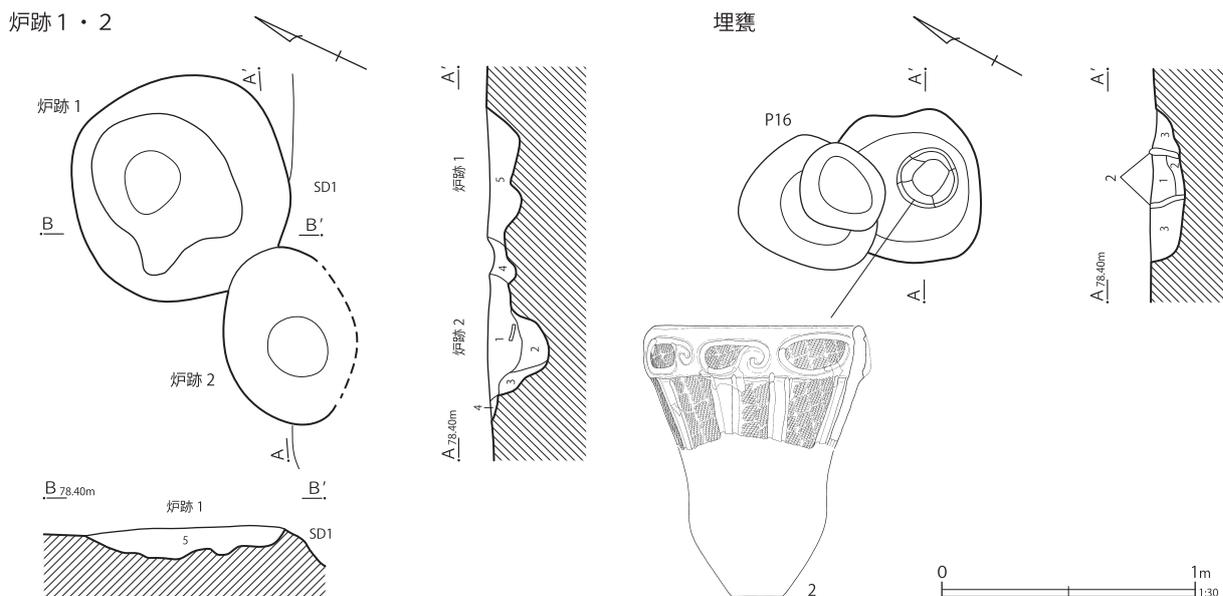
最終的に25本の柱穴が検出された。第4 a号住居跡はP 3、8、12、14、16が最も新しい壁溝1に対応する主柱穴と思われ、それぞれ五角形の頂点に位置している。また、P 11やP 23及びP 16北側の柱穴はいずれも壁溝2を切って造られていることから、合わせて壁溝1に伴う第4 a号住居新段階の柱穴と推定される。したがって、第4 a号住居跡壁溝1に伴う住居跡はP 7も合わせて、少なくとも1回以上の建て替えが推定される。また、内側の壁溝2に伴う第4 a号住居跡の古い住居跡の柱穴は明瞭でないが、P 10、19～21等が相当しよう。

第4 b号住居跡では明瞭にし得なかったが、P 1、2、4、5、15などが外側の壁溝3に伴うものと思われる。最も古い内側の壁溝4に伴う柱穴群は更に明瞭でないが、P 2東側、6、9、13などがその可能性がある。

主柱穴の深さは、P 1=55cm、P 2=56cm、P 3=50cm、P 4=50cm、P 5=61cm、P 7=65cm、P 8=63cm、P 11=65cm、P 12=55cm、



第86图 第4号住居迹 (1)



S J 4

- 1 暗褐色土 ソフトローム土・ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 1層より黒みを帯びる ローム粒子少量
炭化物・焼土粒子1層より多い
- 3 暗褐色土 2層をベースにローム粒子多量 しまり良い
- 4 暗茶褐色土 2層をベースにローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量
- 5 暗茶褐色土 ソフトローム土均質に含む ローム粒子多量 炭化物粒子微量
- 6 暗褐色土 ソフトローム土・ローム土混じる ローム粒子多量
炭化物粒子微量 (壁溝 1)
- 7 暗褐色土 6層をベースにローム土を多量に混入 (壁溝 1)
- 8 暗茶褐色土 ローム土の混入多く、7層より黄色みを帯びる (壁溝 1)
- 9 暗褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子少量 しまり良い (壁溝 2)
- 10 暗黄褐色土 暗茶褐色土との混土层 ロームブロック少量 (壁溝 2)
- 11 暗黄褐色土 ローム土主体 ロームブロック (大) 多量
しまり非常に良い (壁溝 2)
- 12 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子少量
炭化物・焼土粒子微量
- 13 暗茶褐色土 ソフトローム土斑状に含む ローム粒子少量
炭化物・焼土粒子微量
- 14 暗茶褐色土 ソフトローム土多量に含む黄色みを帯びる ローム粒子少量
- 15 暗茶褐色土 ソフトローム土多量 ローム粒子少量 (壁溝 3)
- 16 暗茶褐色土 15層よりソフトローム土多量 ローム粒子少量 (壁溝 4)

S J 4 ビット

- 17 暗褐色土 ソフトローム土・ローム粒子多量 炭化物粒子微量
- 18 暗茶褐色土 ソフトローム土 17層より多い ローム小ブロック少量
炭化物粒子微量
- 19 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 炭化物粒子微量
- 20 暗褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 21 暗黄褐色土 ソフトローム土多量
ロームブロック (径 5cm 以下) 少量
- 22 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 炭化物粒子微量
- 23 暗褐色土 ローム微粒子多量 ローム小ブロック・炭化物粒子少量

- 24 暗褐色土 23層に近似するが、ロームブロック (径 5~7cm) を混じる
- 25 暗黄褐色土 ソフトローム土主体に暗茶褐色土混じる
- 26 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 ローム粒子少量
- 27 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子微量
ローム小ブロック少量
- 28 暗褐色土 主体は 27層と同じ ローム土が若干混じる
それ以外は 27層と同じ
- 29 暗茶褐色土 ローム土多量 ロームブロック少量
炭化物・焼土粒子微量
- 30 暗茶褐色土 ローム土・ローム粒子少量
- 31 暗黄褐色土 ローム土多量 ローム小ブロック少量
- 32 暗褐色土 ソフトローム土斑状に少量 炭化物・焼土粒子微量
ローム小ブロック少量
- 33 暗褐色土 ソフトローム土・ローム粒子多量 炭化物粒子微量
- 34 暗茶褐色土 33層に近似するが、ソフトローム土多量
ローム小ブロック少量

S J 4 炉跡

- 1 暗褐色土 27層に近似するが、炭化物・焼土粒子の混入多い
しまり非常に良い
- 2 暗茶褐色土 1層に近似するが、ローム粒子の混入多い
- 3 暗黄褐色土 ローム土主体 ロームブロック多量
しまり良くややネチネチ
- 4 暗褐色土 27層に近似するが、ソフトロームを土斑状に混じる
- 5 暗褐色土 被熱したロームブロック混入
炭化物・焼土粒子・焼土ブロック多量 しまり非常に良い

S J 4 埋甕

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む均質
- 2 暗褐色土 ソフトローム土混じる
- 3 暗褐色土 ソフトローム土・ローム粒子多量

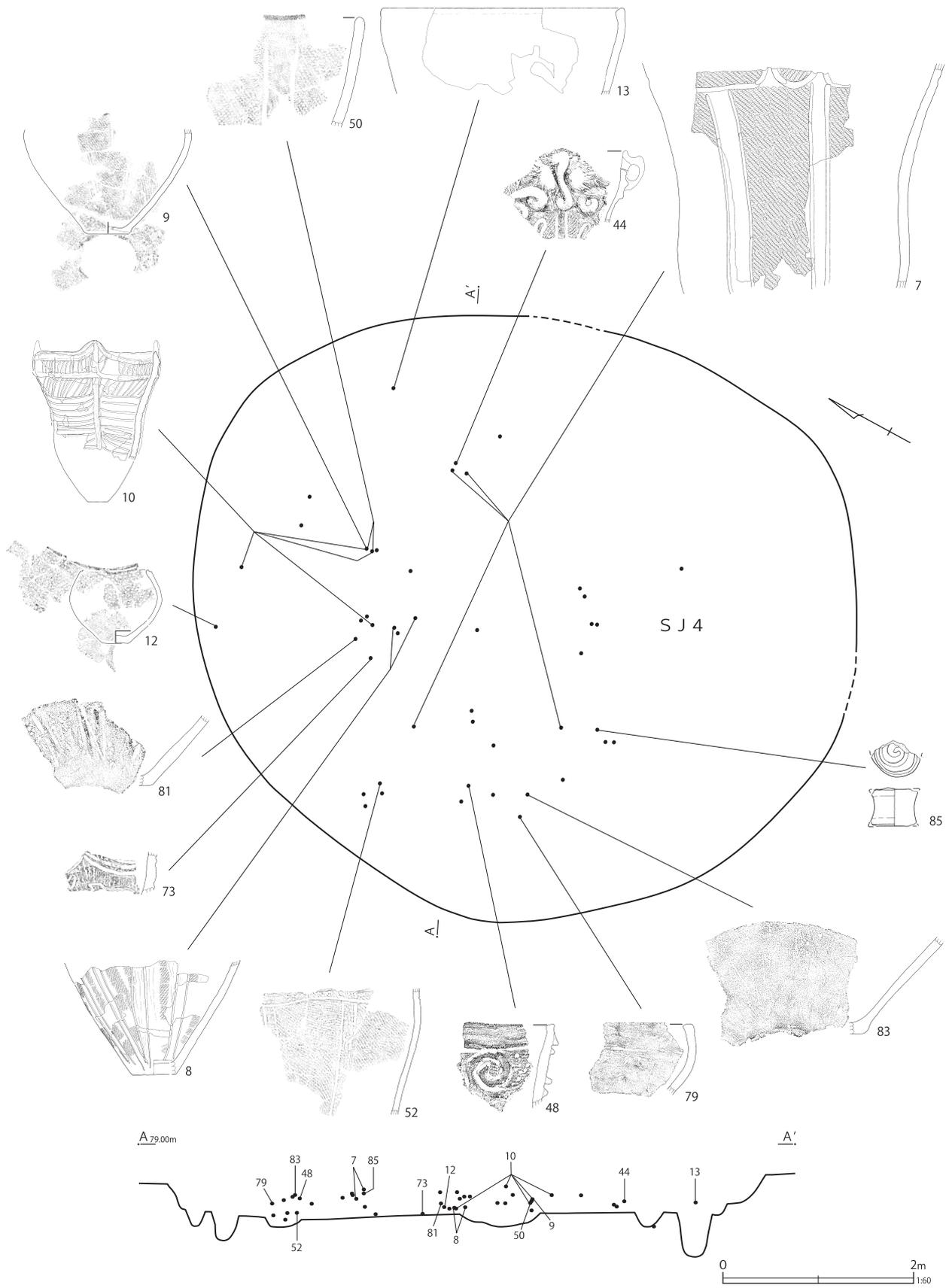
第87図 第4号住居跡 (2)

第37表 第4号住居跡柱穴計測表 (第86図)

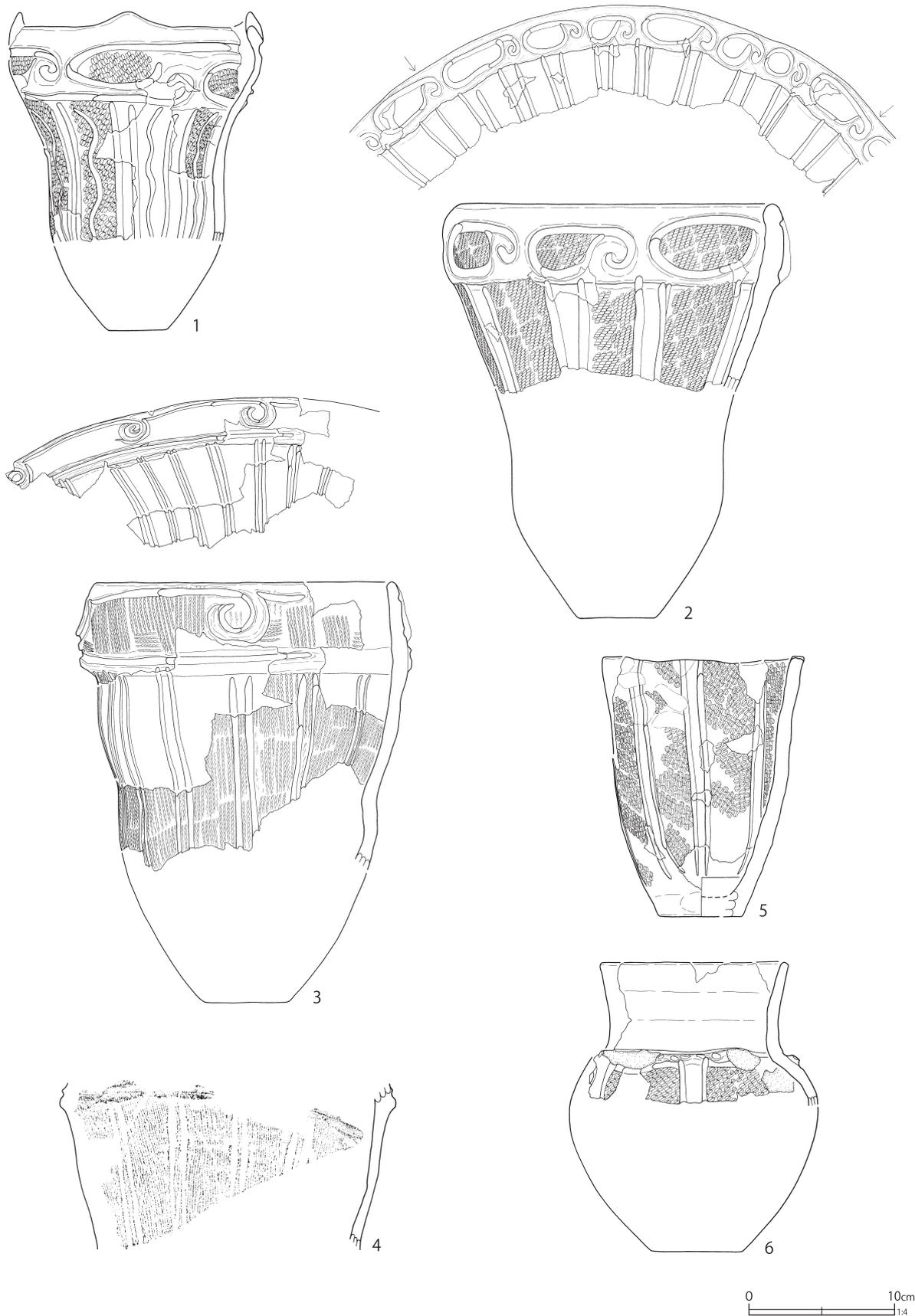
ビットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	36.0	55.0	P 2	54.0	56.0	P 3	56.0	50.0	P 4	47.0	50.0	P 5	28.0	61.0
P 6	43.0	53.0	P 7	42.0	65.0	P 8	50.0	63.0	P 9	(35.0)	52.0	P 10	35.0	47.0
P 11	45.0	65.0	P 12	43.0	55.0	P 13	60.0	59.0	P 14	(45.0)	63.0	P 15	29.0	44.0
P 16	(56.0)	63.0	P 17	36.0	24.0	P 18	47.0	15.0	P 19	36.0	57.0	P 20	34.0	50.0
P 21	33.0	44.0	P 22	34.0	56.0	P 23	50.0	—	P 24	29.0	68.0	P 25	26.0	—

P 14=63cm、P 15=44cm、P 16=63cmである。
住居跡の中央部北寄りに南北に接して 2 基の

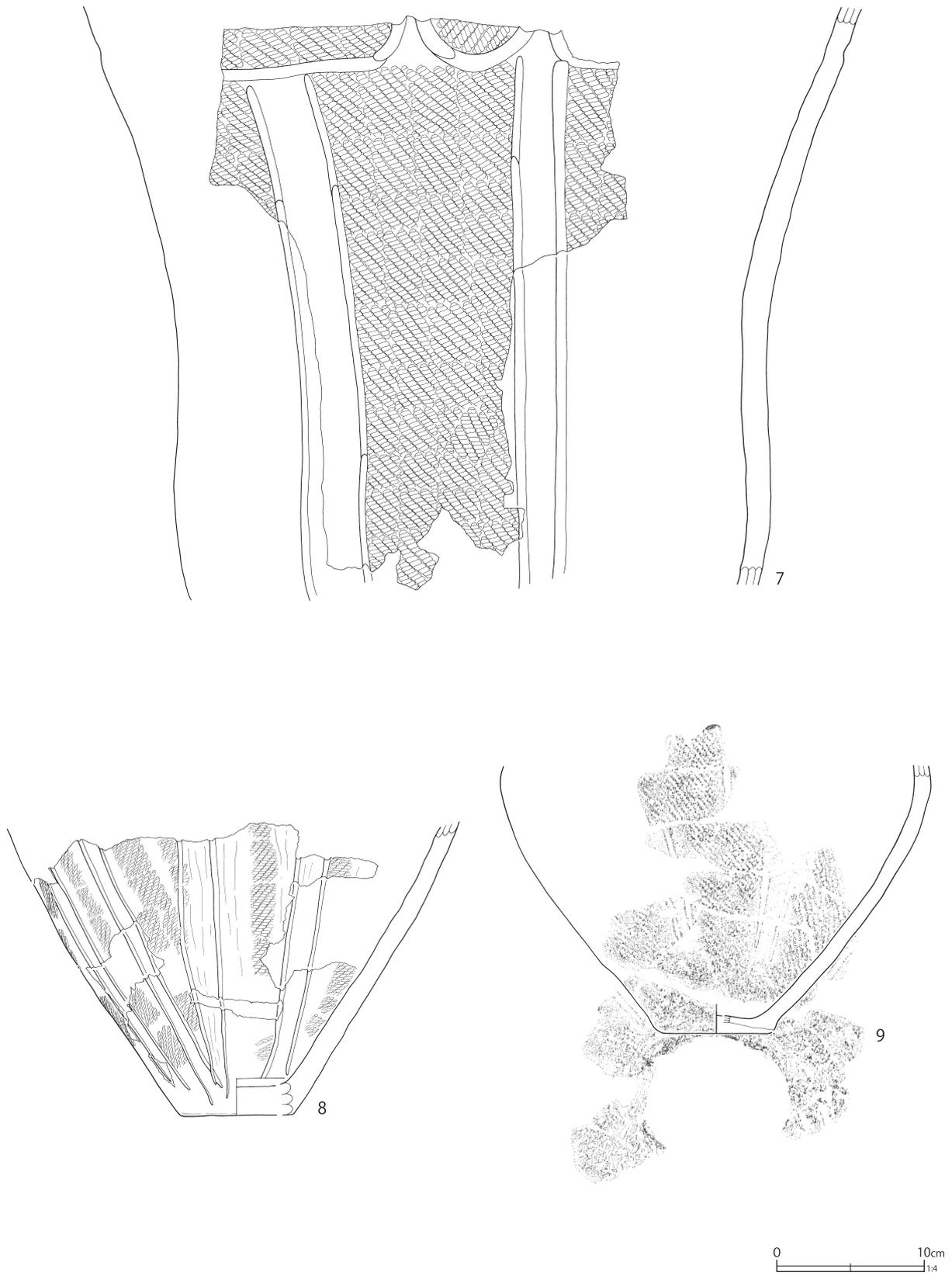
炉跡が検出され、南側の炉跡 2 が新しく、第 4 a
号住居跡の炉と思われる。北側の炉 1 は直上を張



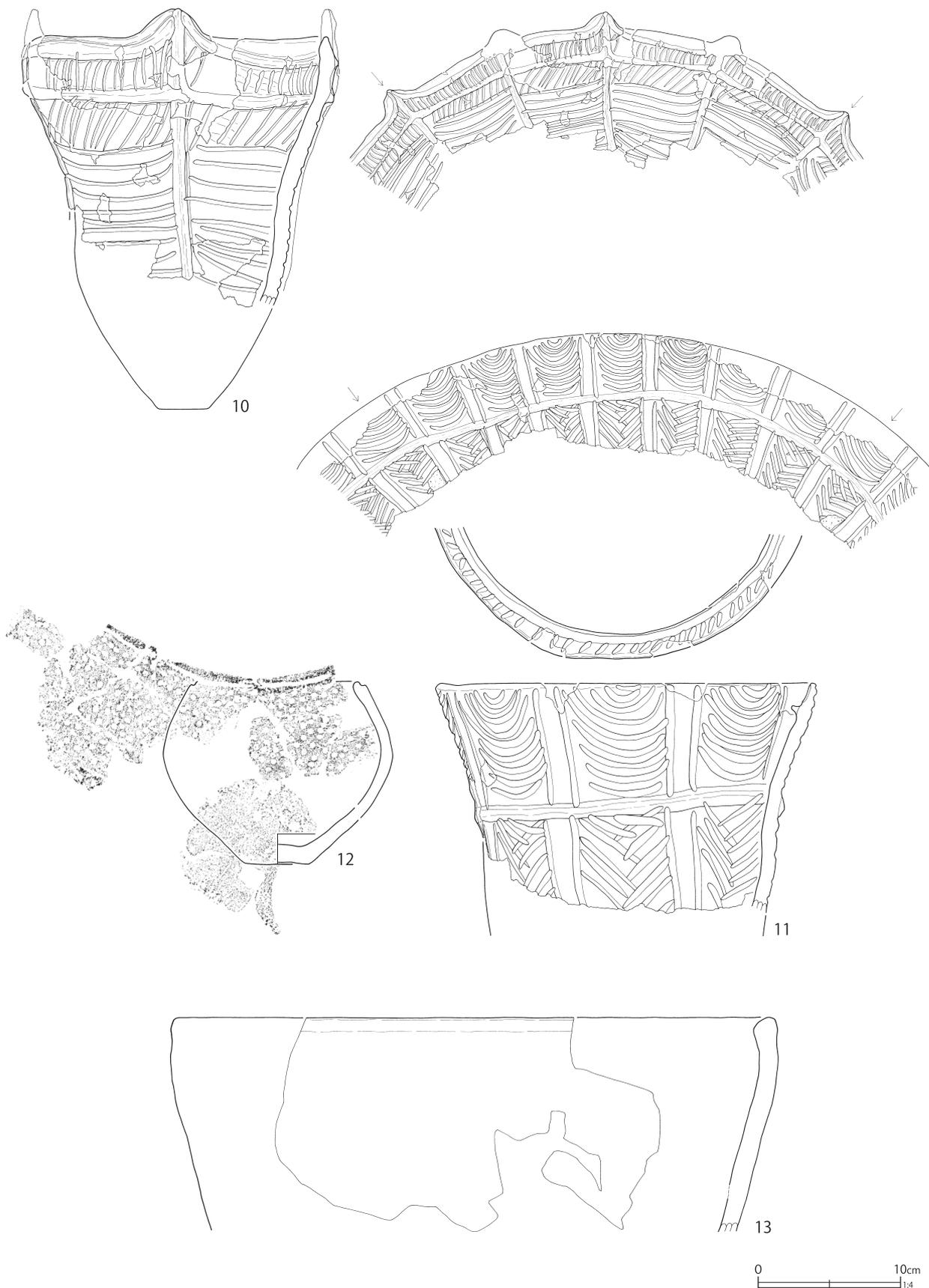
第88図 第4号住居跡遺物出土状況



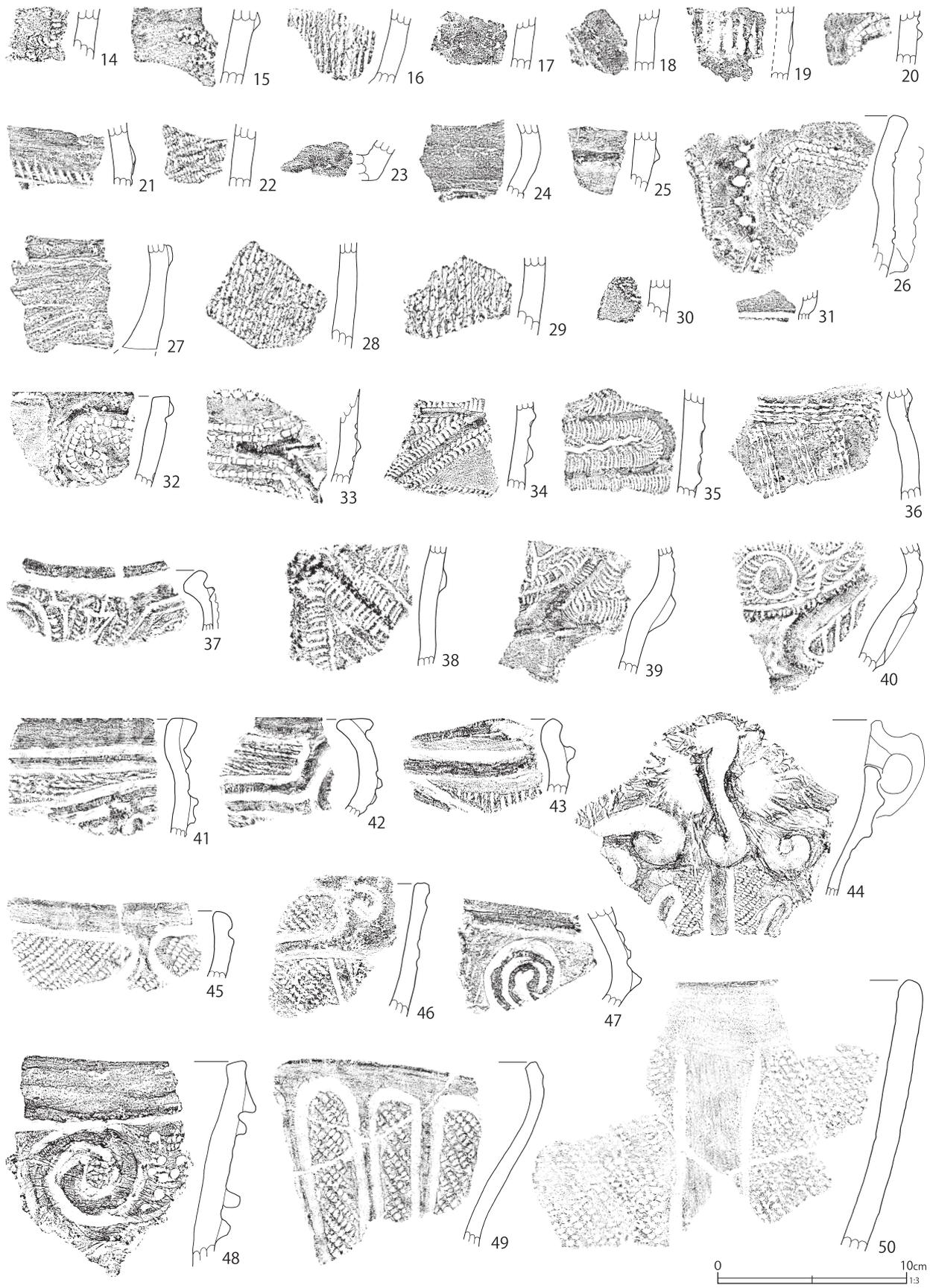
第89図 第4号住居跡出土遺物(1)



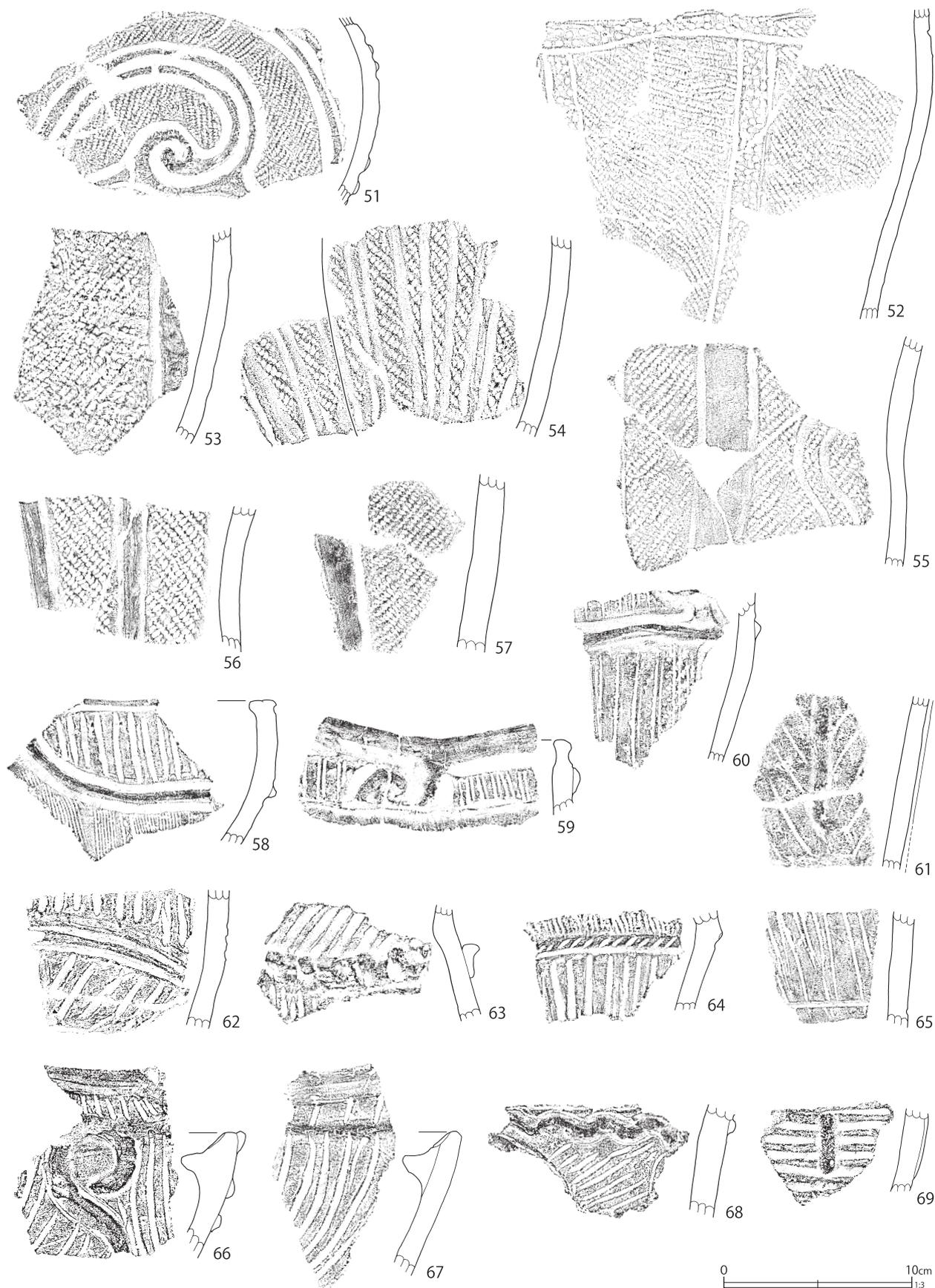
第90図 第4号住居跡出土遺物(2)



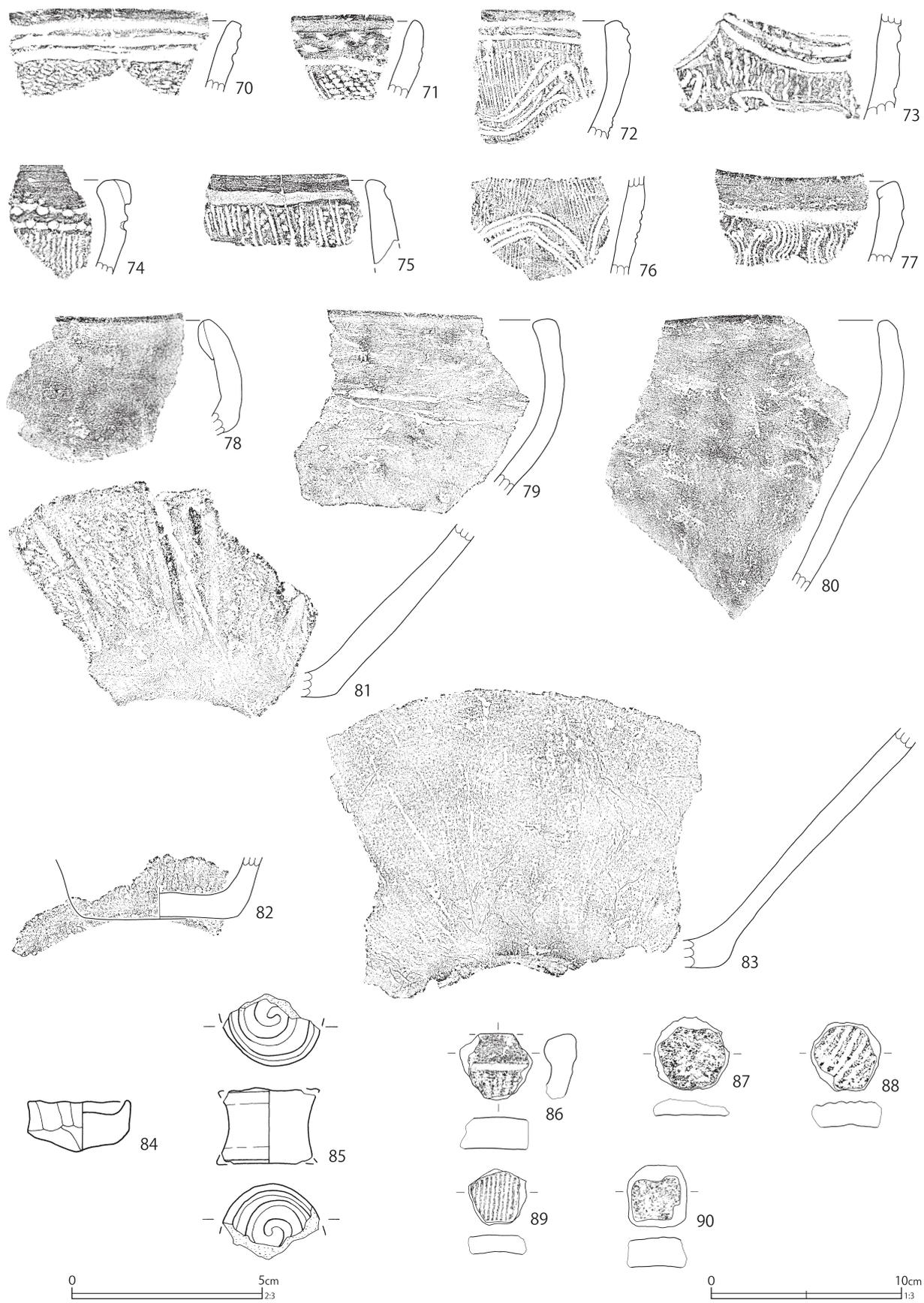
第91図 第4号住居跡出土遺物(3)



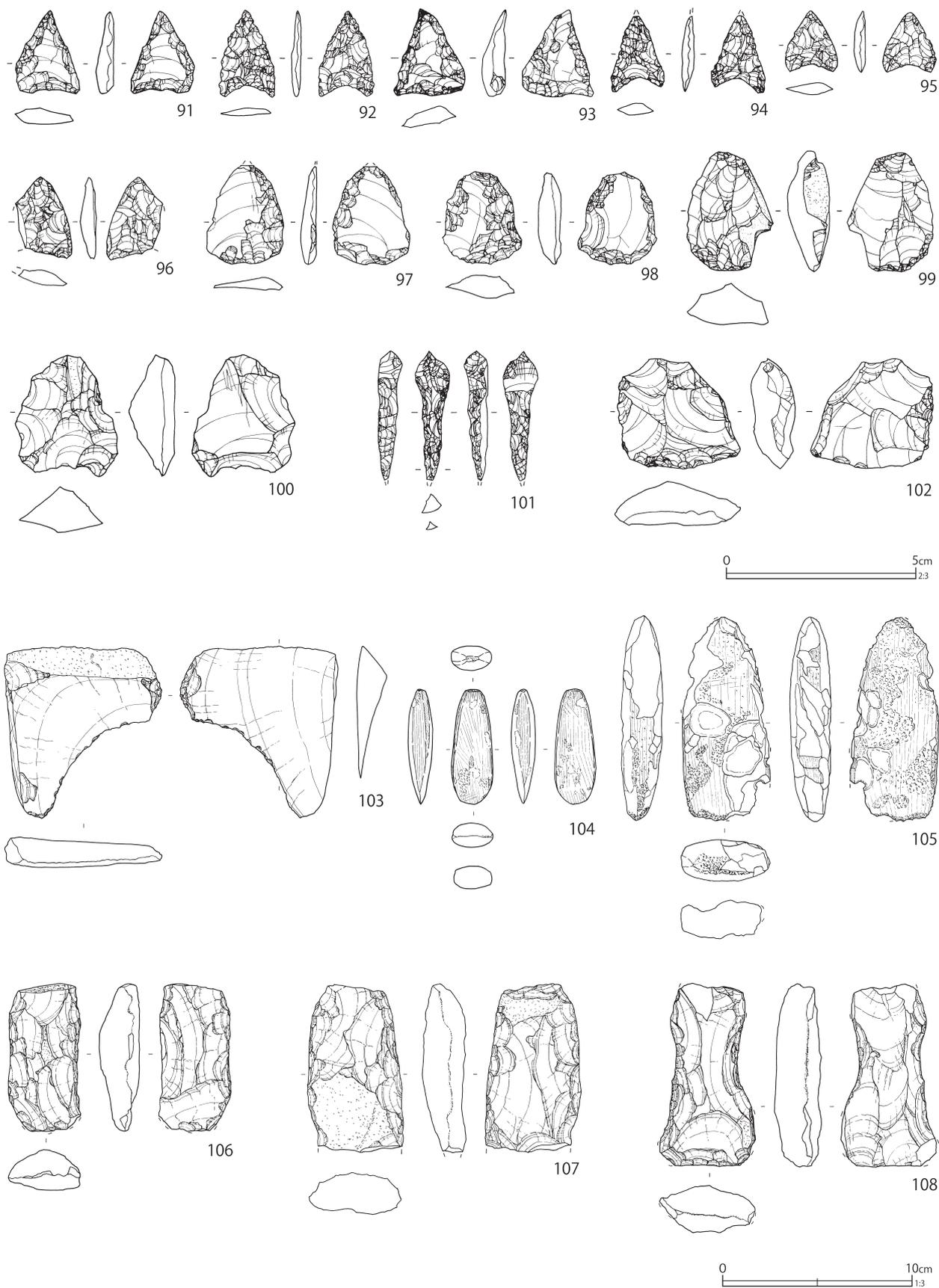
第92图 第4号住居跡出土遺物(4)



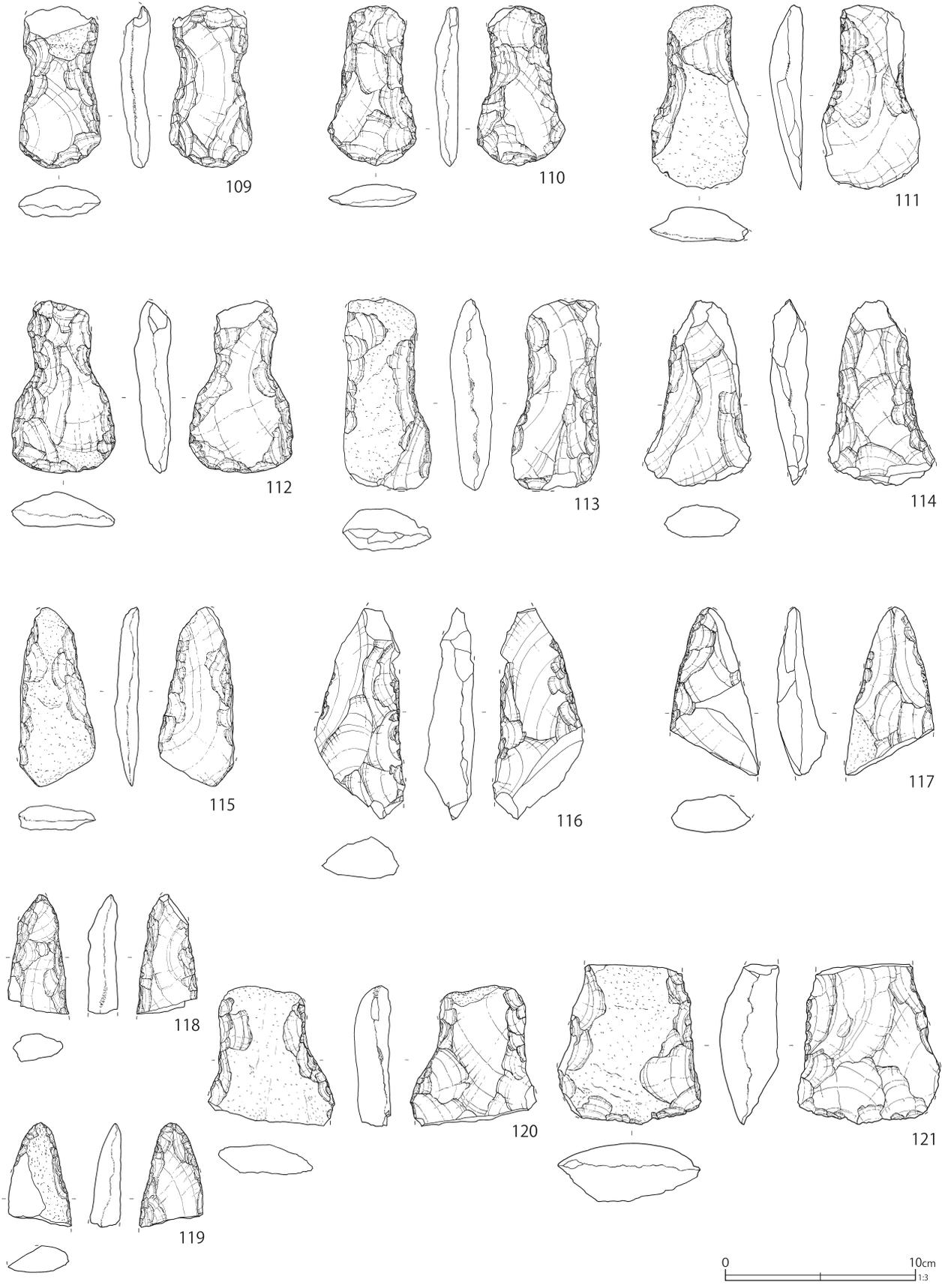
第93図 第4号住居跡出土遺物(5)



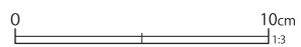
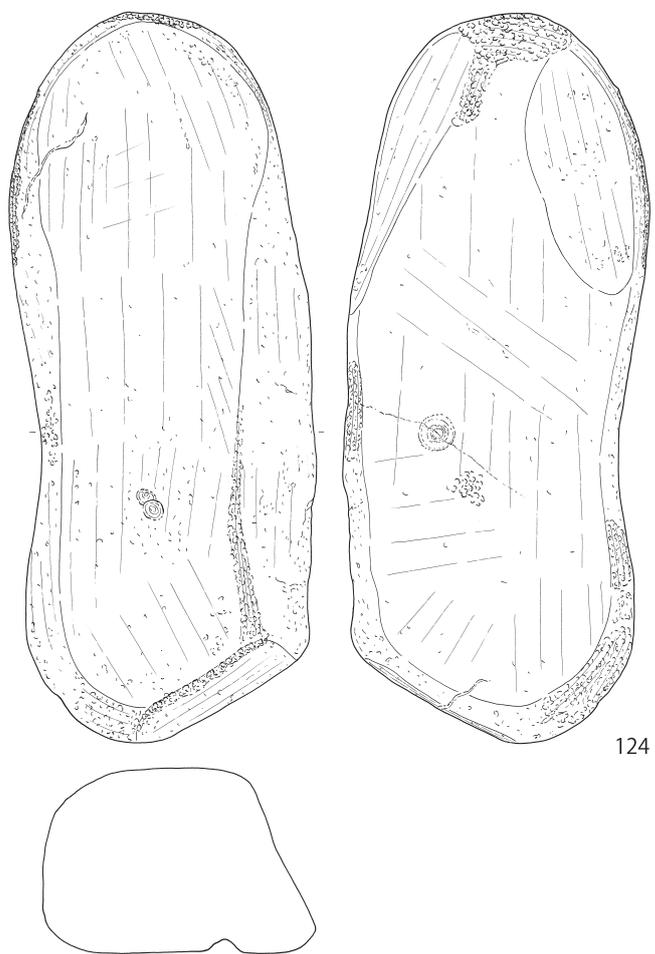
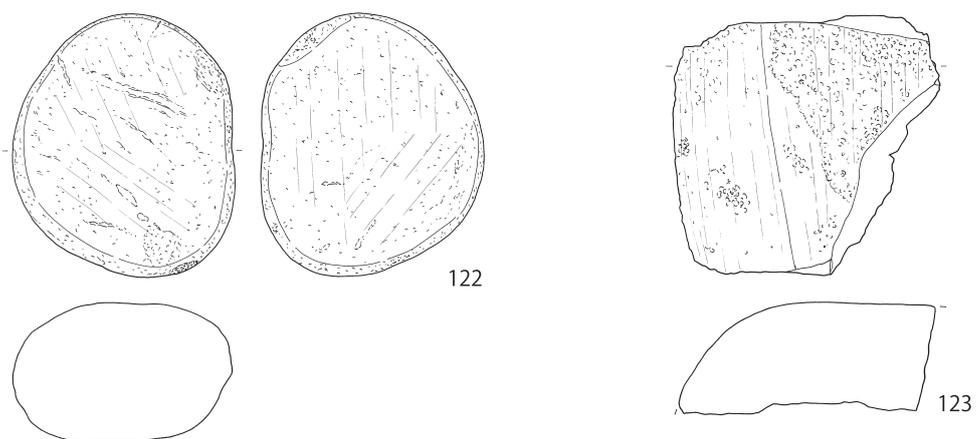
第94図 第4号住居跡出土遺物(6)



第95図 第4号住居跡出土遺物(7)



第96图 第4号住居跡出土遺物(8)



第97図 第4号住居跡出土遺物(9)

り床状の土層が覆っていることから、第4 b号住居跡の炉跡である可能性が高い。炉1を第4 a号住居跡の炉に想定すると、位置関係から問題が多い。炉2は近世の溝跡に半分以上壊されており、掘り込みの形状から埋甕炉であった可能性がある。炉1は炉床が被熱のため赤色硬化しており、地床炉と考えられる。

第4 a号住居跡の南西隅で、内側の壁溝2を切って埋甕が設置されていた。径60cm、深さ18cm程の浅く大きなピットの南寄りに、深鉢の上半部が正位に設置されていた。最も新しい住居跡に伴う埋甕である。

また、第4 a号住居跡南東側の床面上からP12に接するように50cm×20cm程の大形の礫が出土している。さらに、それよりは小振りであるが、P17の西側に接するように大形の礫が出土している。用途は不明だが、いずれも床に接するように置かれており、出土状況から住居使用時での設置、あるいは廃絶直後の意図的な廃棄のいずれかであろうと思われる。

埋甕から、第4 a号住居跡は加曾利EⅢ式段階の所産と思われる。第4 b号住居跡については、それ以前としか分からない。

遺物は土器、石器、ミニチュア土器、耳飾り、土製円盤が出土した(第89図～第97図)。

出土土器は第89図1～第94図83である。14はP1、15、16はP3、17、18はP5、19はP6、20～22はP8、23はP9、24はP11、25、26はP13、27、28はP14、29はP16、30はP21、31はP22からの出土である。

第89図1は炉周辺からの出土で、胴部に磨消懸垂文を施文する加曾利EⅢ式土器である。緩い4単位の波状口縁を呈し、口縁部文様帯には渦巻文と組み合う楕円区画文4単位が入り組むように施文されるものと思われる。胴部には2本沈線間を無文とする磨消懸垂文と蛇行沈線文を垂下する。地文は複節RLRである。

2は埋甕として埋設された土器で、胴下半部を欠く。口縁部には渦巻文と組み合った区画文が単位文化し、7単位に施文される。一箇所円形区画文化する。胴部は幅広の磨消懸垂文を垂下する。地文は口縁部から単節RLを縦位施文する。

3、4は口縁部がやや内折気味に立つキャリパー形の深鉢で、胴部が頸部と胴部で括れる2段括れ状を呈する。口縁部には口縁部から垂れ下がる隆帯渦巻文を4単位に配するものと思われ、胴部には2本対の沈線懸垂文を垂下している。地文は燃糸文Lで、口縁部では充填施文する部分がある。4は胴部の燃糸文L地文上に2本沈線懸垂文を垂下するもので、3と同一個体の可能性がある。

5は口唇部直下から磨消懸垂文を垂下する。地文は複節RLRである。

6は幅広の無文の口縁部が立つ壺形土器で、頸部を押圧隆帯で区画し、胴部に磨消懸垂文を垂下する。地文は複節RLRである。

7は大形のキャリパー形土器で、胴部に幅広の磨消懸垂文を垂下する。地文は単節LRの充填縄文である。8は深鉢の底部で、底部付近まで磨消懸垂文を垂下する。地文は単節RLの充填施文である。

9は両耳壺の胴部と思われ、胴部に磨消懸垂文を垂下する。地文は単節LRである。

10は4単位の山形把手を配する小波状口縁土器で、把手下に隆帯を胴部まで垂下して縦位区画を行う。口縁部には縦位の沈線文を、頸部には斜位の沈線文を充填し、胴部には垂下隆帯を横位に繋ぐ多段の弧線文を施文する。加曾利E式、曾利式、連弧文式土器の要素が折衷した土器である。

12は胴部が湾曲する小形の壺で、口唇上に沈線を巡らし、胴部全面に円形状の刺突文を施文する。

13は無文の深鉢形土器と思われるが、鉢になる可能性もある。

32～36は複列の角押文や三角押文、幅広の押し爪形文、複列の押し刺突文を施文する勝坂式古段階の猪沢式、新道式段階の土器群である。35

は幅広爪形文の楕円区画内に波状沈線を施文することから、若干新しい可能性もある。

38、39は区画隆帯脇に押引連続爪形文と、折れ線状の波状沈線を施文する、勝坂式中段階の藤内式段階の土器である。

37、40は刻み隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に沈線を沿わせる勝坂式新段階の井戸尻式段階の土器群である。

41～43は加曽利EⅠ式キャリパー形土器の口縁部破片で、地文は撚糸文Lである。

44～57は加曽利EⅢ式の土器群である。44は波状口縁部に橋状把手を付け、胴部に磨消懸垂文を施文する。キャリパー形の土器は口縁部の屈曲が弱まり、直線的に開く器形が多くなる。また、口縁部文様帯がなく、磨消懸垂文や逆「U」字状の区画文を有するものも成立する。胴部には幅広の磨消懸垂文や多条の沈線懸垂文を垂下するものもある。52は胴部区画及び磨消懸垂文となる部分に、刺突文を充填施文する珍しい土器である。

51は胴部で括れる器形で、上半部に2本隆帯の渦巻文を横位連結するモチーフを描く土器で、地文に単節LRを充填施文する。加曽利EⅢ式に比定されようか。

58～69は曾利式系の土器群で、いずれも地文や区画文内に沈線文を充填施文する。58～62、64はキャリパー形の土器で、61は地文沈線が綾杉状になる可能性もある。63、66、67は頸部が括れる重弧文系土器で、66、67の口縁部裏面に突出した口縁部に沈線を施文している。

70～74、76は連弧文系土器である。70、71、74は連弧文を施文しないが、括れる胴部を区画する土器と思われる。70は単節RL、71は単節LR、74は撚糸文Lを施文する。72、76は地文に条線文を、73は撚糸文Lを施文し、やや弛緩した連弧文を描いている。75は深鉢の口縁部の可能性がある。

77～80は浅鉢の口縁部破片で、77は沈線で口縁部を区画し、地文に蛇行条線文を施文する。78

～80は無文の浅鉢で、78は口縁部が内湾するもので、79、80は口縁部が開くやや背高の浅鉢である。82は深鉢の底部、83は浅鉢の底部と思われる。

土製品では、84は小形手捏ねのミニチュア土器で、若干器壁が立つ。

85は鼓形の耳飾りで、上下端に沈線の渦巻文を施文する。

86～90は土器片を利用した土製円盤である。

石器類は第95図91～第97図124が出土した。

91～96は石鏃で、94が先端を僅かに、96が正面左側を欠いている。91は裏面に、93が正面にそれぞれ主要剥離面を残す。97～100は石鏃の未成品と思われる。97は平面形状がしずく形を呈し、正面右側縁に加工を施すことで先端部を作出しようとしていることから未成品と判断した。98は平面形状が楕円形を呈し、周縁に両面交互剥離を施していることから未成品と判断した。99、100はともに石鏃よりも一回り大きく、両面交互剥離によって中央の厚みを減じようとしている。

101は石錐で、摘み部を有する。錐部の先端が僅かに欠損している。

102、103はスクレイパーである。102は裏面からの剥離により急斜度の刃部を作り出している。103は素材剥片の末端を刃部として利用しており、微細剥離痕を有する。

104は定角式の小形磨製石斧である。105は定角式の磨製石斧が欠損した後、敲石及び凹石として再利用している。

106～121は打製石斧である。106～114は撥形を呈する。刃部は106が片刃、107、108が両刃である。109は刃部片で、片刃である。110は基部片である。111は刃部と基部の一部を欠いている。112、114は両刃の打製石斧で、基部が欠損している。113は刃部と基部が僅かに欠けている。115、116は短冊形を呈する。115は刃部が欠損している。116は両刃で、刃部が僅かに欠けている。

第38表 第4号住居跡出土復元土器観察表 (第89～91図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
89-1	[15.9]	(16.0)	(17.6)	-	40%
2	[12.9]	21.4	23.0	-	50%
3	[20.0]	(19.8)	(21.8)	-	40%
4	[11.5]	-	(23.0)	-	20%
5	[17.7]	(13.8)	-	5.7	40%
6	[9.8]	(12.4)	(16.8)	-	30%
90-7	[38.9]	-	(53.0)	-	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
90-8	-	-	[30.4]	(7.6)	30%
9	[18.1]	-	(28.8)	(7.8)	40%
91-10	[20.9]	(20.2)	(22.0)	-	60%
11	[16.2]	26.0	26.4	-	50%
12	12.9	(11.2)	-	4.4	40%
13	[15.1]	(41.7)	-	-	30%

第39表 第4号住居跡出土石器観察表 (第95～97図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
95 - 91	石鏃	I 2①	チャート	2.2	1.7	0.5	1.6	
92	石鏃	I 2①	黒曜石	2.3	1.5	0.3	0.7	
93	石鏃	I 1①	黒曜石	2.3	1.9	0.6	1.9	
94	石鏃	I 2①	チャート	2.0	1.4	0.3	0.7	
95	石鏃	I 2①	チャート	1.6	1.4	0.3	0.6	
96	石鏃	I 2②	チャート	2.2	1.5	0.4	1.0	
97	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.6	2.0	0.4	2.4	
98	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.5	2.1	0.6	3.0	
99	石鏃	Ⅲ①	チャート	3.2	2.3	1.1	7.4	
100	石鏃	Ⅲ①	チャート	3.2	2.7	1.2	7.7	
101	石錘	Ⅱ①	黒曜石	3.4	0.9	0.7	1.1	
102	スクレイパー	Ⅱ2①	チャート	2.9	3.3	1.2	10.1	
103	スクレイパー	Ⅱ2①	頁岩	9.1	8.3	1.6	86.0	
104	磨製石斧	Ⅱ①イ	緑色岩	6.1	2.2	1.3	27.4	小形
105	磨製石斧	Ⅱ②イ	緑色岩	10.8	[4.7]	2.2	165.4	
106	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[7.8]	3.8	2.2	75.1	
107	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[8.9]	5.1	2.3	134.6	
108	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.7]	[5.1]	2.5	132.9	
96 - 109	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[8.5]	4.3	1.6	59.9	
110	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	8.5	4.6	1.2	48.9	
111	打製石斧	Ⅲ1②イ	砂岩	9.7	[5.2]	1.8	82.9	
112	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.1]	5.4	1.9	88.8	
113	打製石斧	Ⅲ1②イ	黒色頁岩	[10.1]	4.6	2.2	121.3	
114	打製石斧	Ⅲ2②イ	結晶片岩	[9.8]	5.6	2.0	113.5	
115	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	9.4	[4.1]	1.3	49.1	
116	打製石斧	I 2②ア	頁岩	[11.1]	[4.8]	2.6	104.3	
117	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[8.9]	[4.7]	[2.5]	74.2	
118	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[6.3]	[3.2]	1.6	34.1	
119	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[5.5]	3.3	[1.6]	27.6	
120	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[7.4]	[6.7]	2.0	109.1	
121	打製石斧	Ⅲ1②ア	ホルンフェルス	[8.5]	7.5	3.1	208.0	
97 - 122	磨石	I 1-3①イ	チャート	10.5	8.8	5.5	740.3	
123	石皿	Ⅳ②イ	砂岩	[10.4]	[10.5]	[4.9]	695.5	
124	石皿	Ⅲ2①ア	砂岩	29.1	12.2	7.9	4306.2	表裏面一部赤色化

117～121は撥形を呈する打製石斧の基部片である。

122は磨石で、周縁に敲打痕は認められない。

123は石皿の破片である。124は石皿で、正面の一部と裏面のほぼ全面が被熱により赤色化している。また、正面及び裏面の一部に凹痕を有する。

第5号住居跡（第98図～第109図）

Ⅱ区南東隅のS-12・13グリッドに位置する。東側の一部で第15号土壇と重複する。規模は長径5.43m、短径5.0m、深さ0.45mで、平面形は僅かに南北が長い楕円形を呈する。

床面から直線的に立ち上がる壁の直下に、幅約20cm、深さ20～30cmの壁溝が一周する。柱穴は20基検出されたが、覆土、重複状況、深さ及び配置から、少なくとも3段階の変遷が看取でき、2回以上の建て替えが行われたと推察される。

本住居跡の最終段階のものはP10、14、1、4、5の一群で五角形を呈する。その前段階と思われるのがP11、2、16の一群で、P5、10を加えることで、同じく小形の五角形を呈する。最も古いと思われるのがP9、13、3、17、6の一群で、更に小形の五角形を呈する。また、P8、9、12、13の覆土には多量のロームブロックが含まれ、埋め戻された様相を呈している。なお、P15、18は覆土の様相が大きく異なっており、本遺構に伴わないものである可能性が高い。支柱穴の深さは、P1=70cm、P2=75cm、P3=48cm、P4=70cm、P5=65cm、P6=55cm、P9=52cm、P10=62cm、P11=52cm、P13=53cm、P14=60cm、P16=65cm、P17=58cmである。

炉は石囲埋甕炉で、住居跡中央やや北寄りに検出された。径30cm程の掘り込みに土器が据えられ、その南側を囲むように3個の細長い礫が配置されていた。なお、覆土中の炭化物・焼土粒子は少なく、土器外側の地山も焼土化していなかったことから、最終的な炉としては、使用期間が短かったものと判断される。

埋甕は検出されなかった。

住居跡の時期は、炉体土器から勝坂式終末期の所産と考えられる。

遺物は第102図1～第109図100で、覆土中層から土器類、ミニチュア土器、土製円盤、石器類が吹上パターン状にまとまって出土した。

土器類は1～71である。1は炉体土器で、無文の口縁部が開く深鉢形土器で、口縁部から胴部までが埋設されていた。胴部は刻みを施した隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描き、モチーフ間に三叉文を施文する。頸部の区画隆帯には、交互刺突文を施している。

2、3は頸部で括れ、口縁部が内湾する深鉢形土器である。2は頸部から口唇部上に蛇尾状の巻き上がる隆帯を施文し、胴部に1と類似する渦巻文を連結するモチーフを施文する。モチーフ間には三叉文と集合押引沈線を施文する。3は口縁部に緩く大きな山形状の把手が付く。

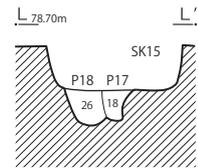
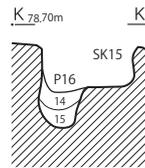
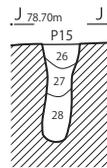
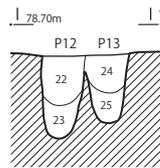
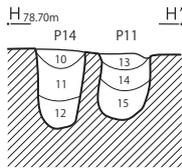
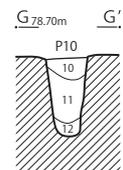
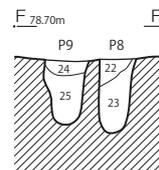
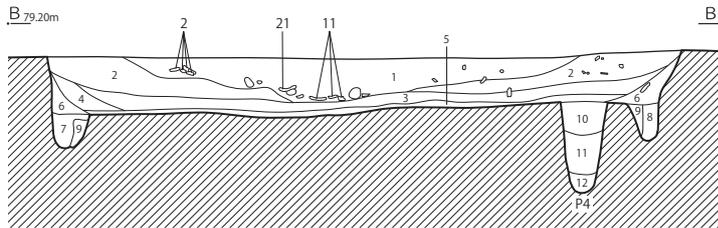
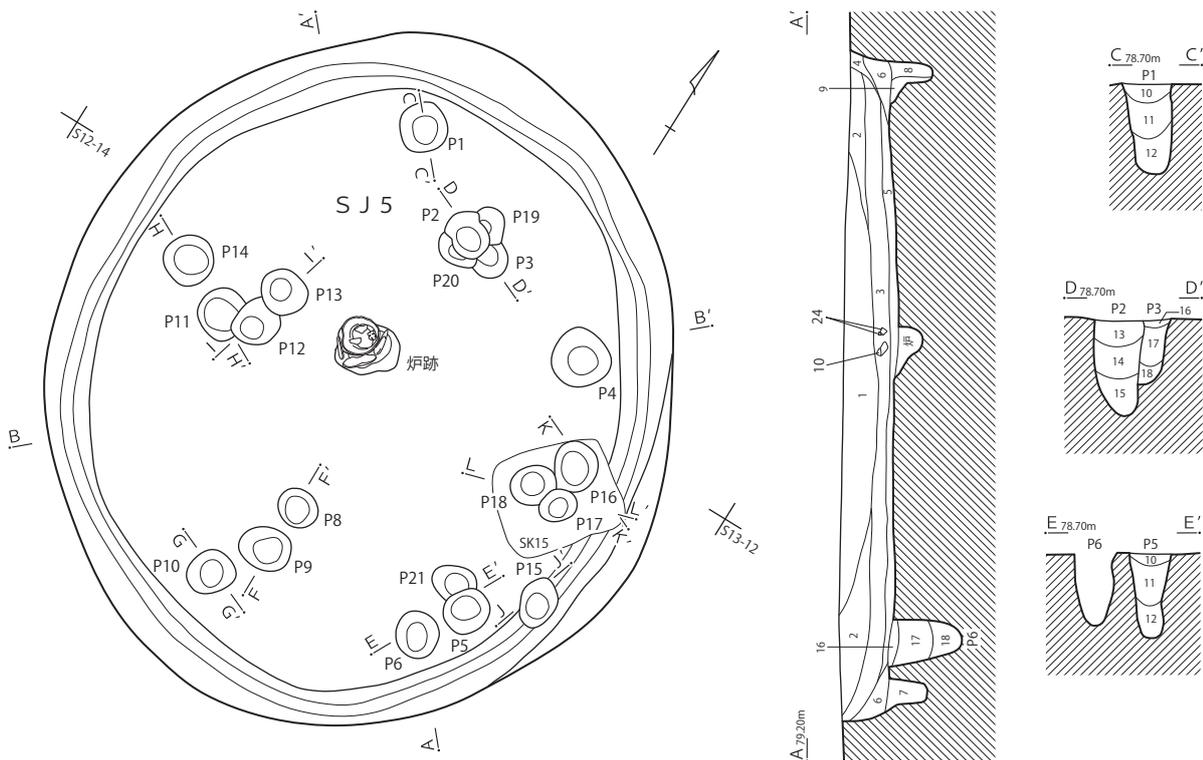
4は括れた胴部から張り出す底部で、刻み隆帯の楕円文状区画文を施文する。

5は口縁部がキャリパー状に開く器形で、口縁部に背割隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描く。モチーフの余白には沈線の渦巻文や三叉文を施文する。区画を施す背割隆帯の上側1本のみに刻みを施している。胴部の地文は撚糸文Lである。

6、7は頸部で括れ、口縁部が直線的に開く深鉢形土器である。7は口唇部上から蛇の頭状のモチーフを垂下する。頸部の区画隆帯には交互刺突文を施し、胴部地文に撚糸文Lを施文する。

8、9は口縁部が内湾して開き、胴部で括れ、底部が張り出す深鉢である。8は口縁部が強く内湾して開き、口唇部上から胴部にかけて蛇体モチーフを展開する。口縁部に垂下する隆帯は2本であることから、2匹の蛇が絡まるモチーフか。地文は0段多条RLの縦走縄文である。9は口縁部が強く内折し、屈曲部に蛙口状の区画文を施す。頸部に幅狭の無文帯を設け、胴部の地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

10～12は円筒形の深鉢で、10、11は胴上半部に隆帯や半隆帯でモチーフを描く。いずれも地文は撚糸文Lである。12は若干開く無文の口縁部を沈線で区画し、胴部に0段多条RLの縦走縄文を施文する。



S J 5

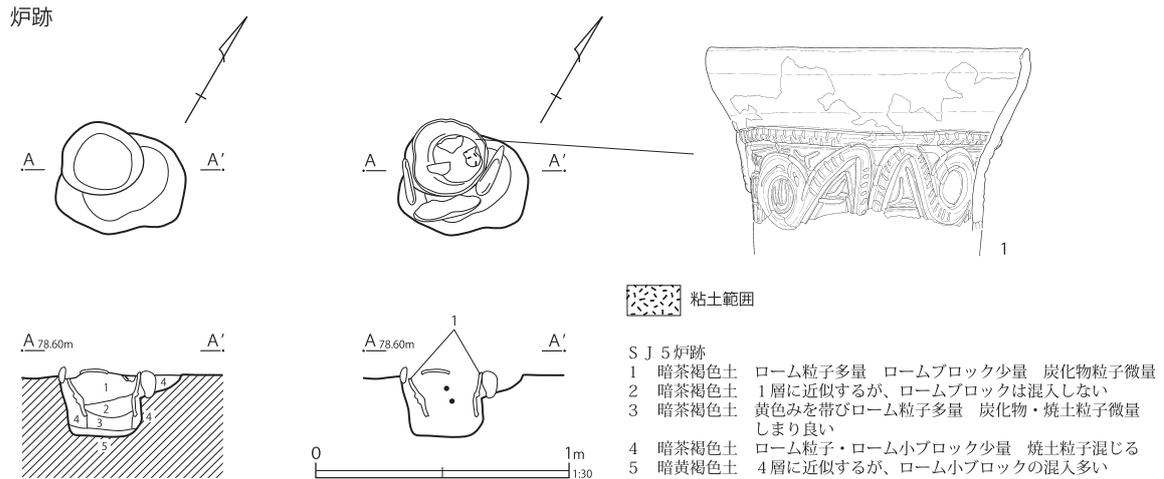
- 1 暗褐色土 黒味強め ローム粒子少量 炭化物粒子多量 焼土粒子微量
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子・小ブロック多量 炭化物粒子やや多くしまり良い
- 3 暗茶褐色土 2層に近似するが、ローム粒子は少なくローム小ブロックが多い
- 4 暗茶褐色土 ソフトローム土・ローム粒子・小ブロック多量 炭化物粒子少量 焼土粒子微量 しまり非常に良い
- 5 暗茶褐色土 3層に近似するが、しまり良く粘性強い
- 6 暗茶褐色土 4層に近似するが、黄色みを帯び炭化物粒子微量
- 7 暗黄褐色土 ソフトローム土主体 ローム小ブロック多量 (壁溝)
- 8 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子多量
- 9 暗茶褐色土 ローム小ブロック少量 (壁溝)
- 10 暗茶褐色土 ソフトローム土主体に8層土混じり 炭化物粒子微量 (壁溝)

S J 5ピット

- 10 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量
- 11 暗茶褐色土 1層をベースにローム小ブロックを混入 炭化物粒子少量
- 12 暗茶褐色土 ローム小ブロック混入 ローム粒子多量

- 13 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子微量 しまり非常に良い
- 14 暗茶褐色土 4層に近似しローム小ブロックを混入 炭化物・焼土粒子微量
- 15 暗黄褐色土 ソフトローム土主体に13・14層を混入
- 16 暗茶褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック少量 炭化物・焼土粒子微量
- 17 暗茶褐色土 16層に近似するが、ローム小ブロックやや多い
- 18 暗茶褐色土 16・17層より黄色みを帯びる ソフトローム土混じる
- 19 暗黄褐色土 ソフトローム土主体で、ローム小ブロック多量
- 20 暗茶褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子・ローム小ブロック少量
- 21 暗茶褐色土 20層をベースにソフトローム土が混じる
- 22 暗茶褐色土 ローム小ブロックが多く混入し 黄味が増す
- 23 暗黄褐色土 ローム大ブロック多量に混入
- 24 暗茶褐色土 ローム粒子少量 ローム小ブロックやや多い 炭化物粒子少量
- 25 暗黄褐色土 ソフトローム土主体にローム小ブロック多量混入
- 26 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子多量 ローム小ブロック少量
- 27 暗茶褐色土 24層をベースに、ローム小ブロックを混入
- 28 暗黄褐色土 ローム土主体に24・25層を混入

第98図 第5号住居跡(1)



第99図 第5号住居跡(2)

第40表 第5号住居跡柱穴計測表(第98図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	40.0	70.0	P 2	38.0	75.0	P 3	30.0	48.0	P 4	46.0	70.0	P 5	38.0	65.0
P 6	38.0	55.0	欠番		P 8	33.0	60.0	P 9	42.0	52.0	P 10	39.0	62.0	
P 11	40.0	52.0	P 12	[37.0]	65.0	P 13	40.0	53.0	P 14	40.0	60.0	P 15	41.0	75.0
P 16	42.0	[30.0]	P 17	30.0	[25.0]	P 18	36.0	[28.0]	P 19	33.0	[17.0]	P 20	36.0	[12.0]
P 21	36.0	—												

第41表 第5号住居跡出土復元土器観察表(第102～105図)

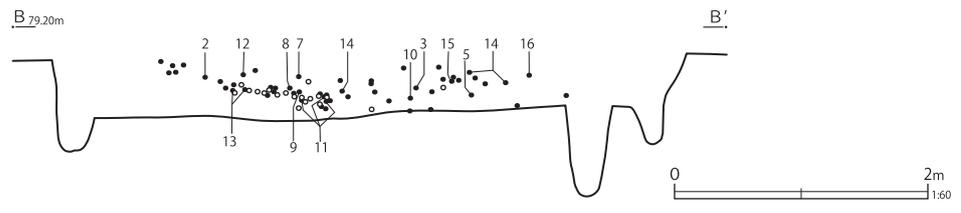
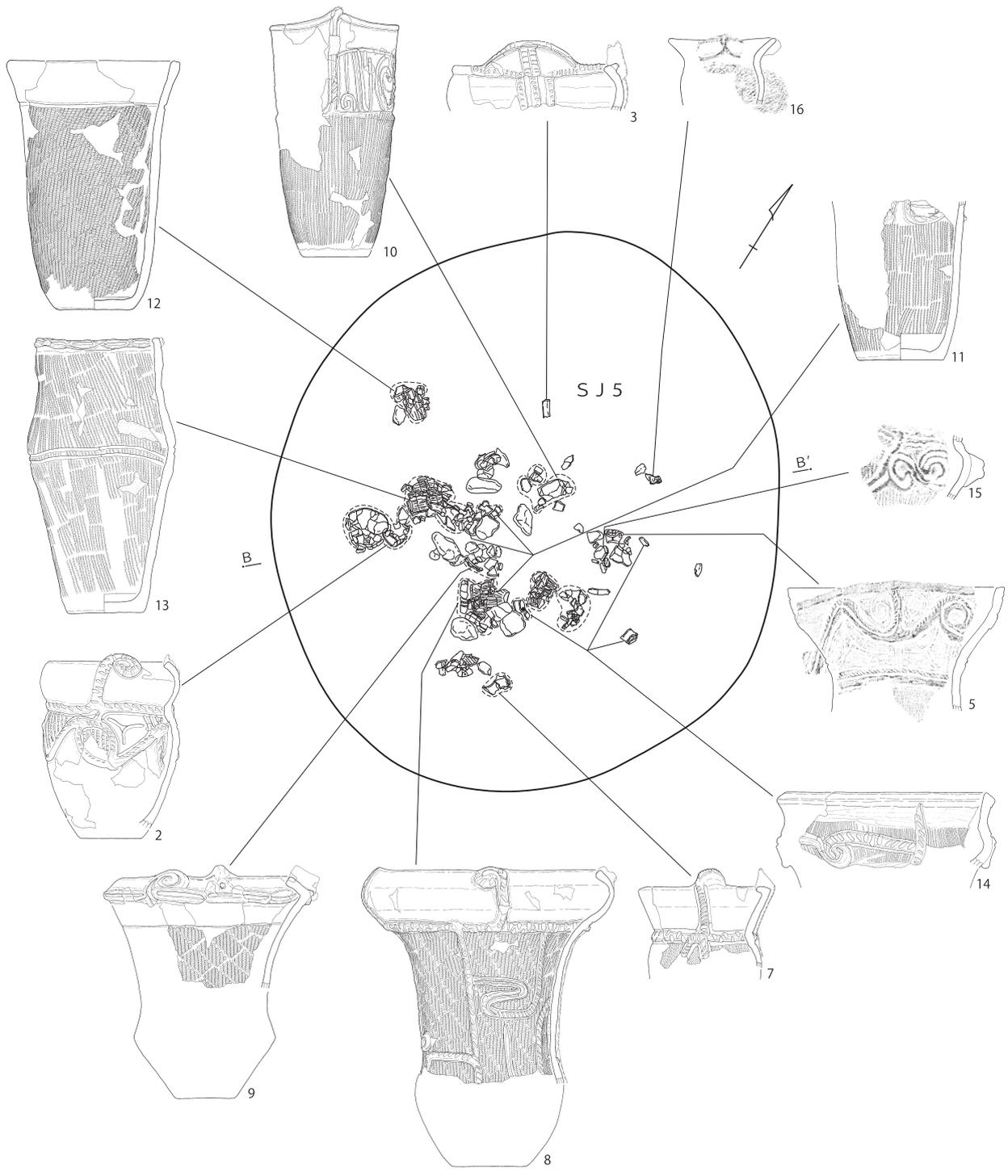
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
102-1	[19.0]	(33.0)	(34.2)	—	40%	104-14	[9.8]	(26.4)	(27.8)	—	30%
2	[22.7]	(15.2)	(18.0)	—	70%	15	—	—	—	—	10%
3	—	(20.8)	(23.0)	—	10%	16	[8.5]	(14.0)	—	—	40%
4	[14.2]	—	(20.0)	—	20%	17	[15.7]	—	15.5	(7.2)	40%
103-5	[16.1]	(27.9)	—	—	20%	18	[23.5]	—	(23.2)	—	40%
6	[7.3]	(17.6)	—	—	20%	105-19	[16.8]	(17.0)	(18.2)	—	50%
7	[13.0]	(14.6)	(17.4)	—	40%	20	[12.1]	(28.0)	—	—	20%
8	[28.2]	(29.2)	(32.6)	—	70%	21	[15.5]	(36.0)	(39.0)	—	60%
9	[16.0]	(22.0)	[26.4]	—	30%	22	—	—	—	—	10%
104-10	[32.2]	(17.2)	(23.2)	—	40%	23	—	—	—	—	20%
11	[20.8]	—	—	11.0	60%	24	—	—	—	—	30%
12	32.3	(20.8)	(22.4)	—	60%	25	[17.4]	(37.4)	(38.0)	—	80%
13	36.0	(15.6)	19.3	—	80%						

13は胴部が膨れる円筒形土器で、胴部を2本沈線で区画し、口縁部に幅狭の蛙口状区画文を施文する。地文は撚糸文Lである。

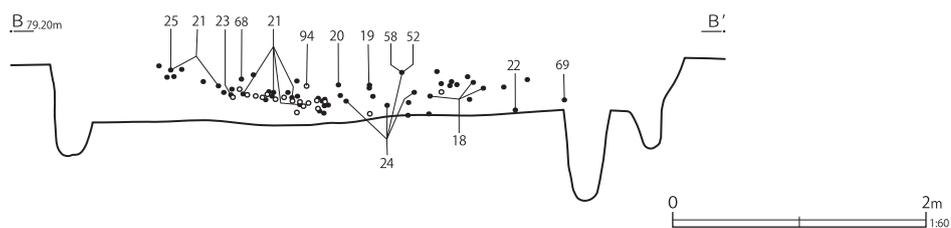
14、15、18～20は口縁部文様帯と胴部文様帯で構成されるキャリパー形深鉢形土器である。14、15は張り出す口縁部に隆帯の渦巻文を施文する。14は無文の口唇部が外傾気味に立つ。地文は撚糸文Lである。18は胴部で大木式系のクラック状に渦巻文を繋げて垂下する2本沈線で多段

の横帯区画を施し、地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。19は口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁部文様帯に隆帯の楕円文を5単位に配置する。地文は撚糸文Lである。20は口唇部が強く外傾し、球形状の口縁部文様帯に2本隆帯の大きな横「S」字状渦巻文を横位連結するモチーフを描いている。地文に撚糸文Rを施文する。加曽利E I式土器である。

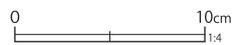
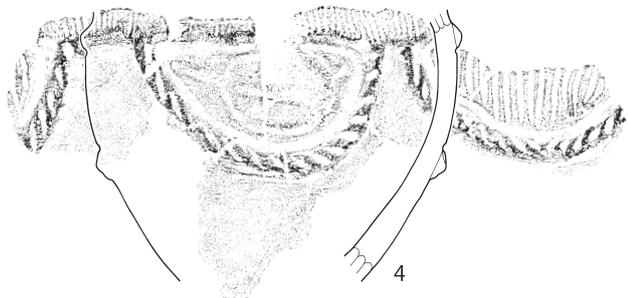
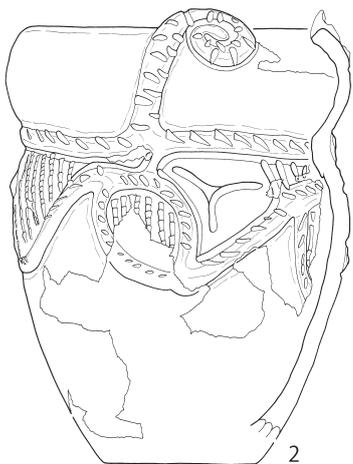
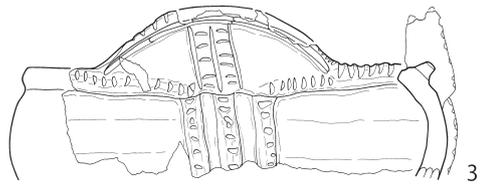
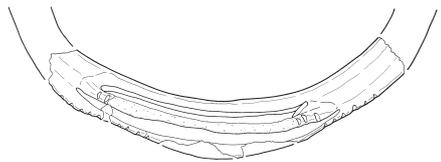
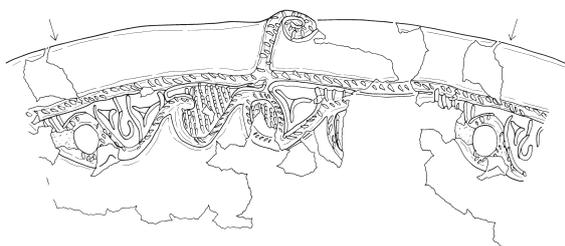
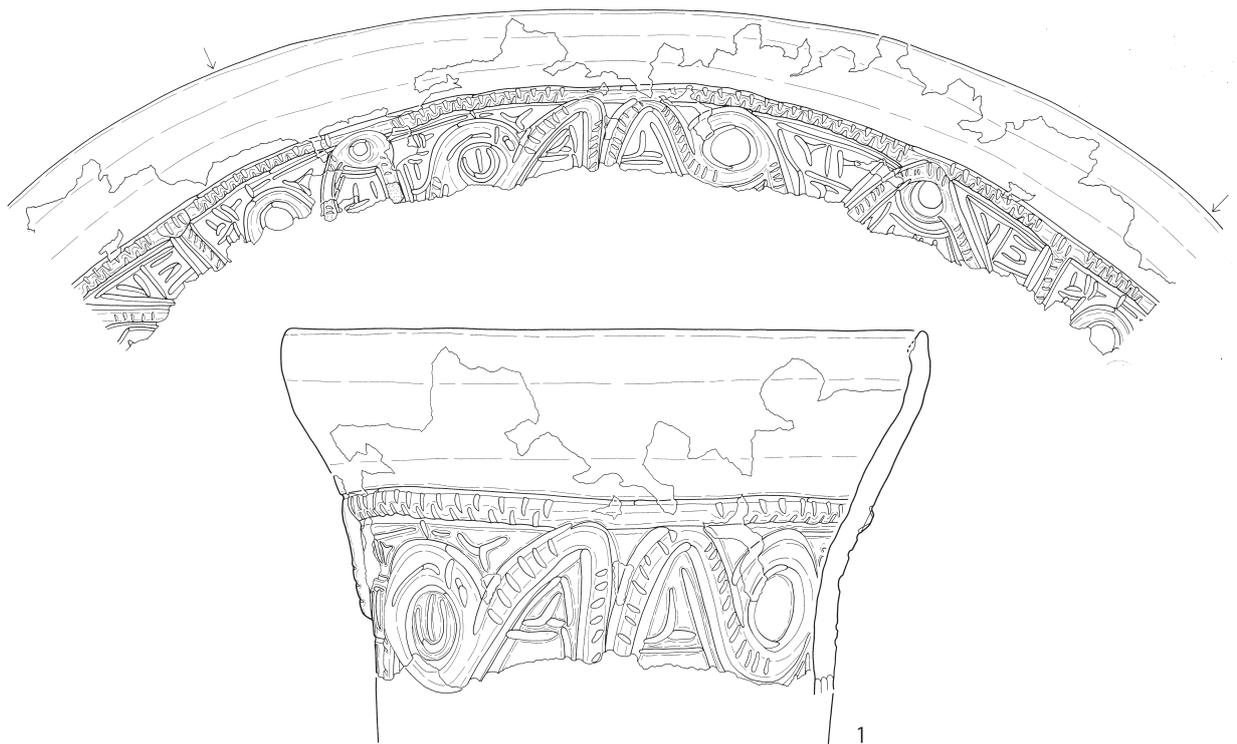
16は口縁部が大きく開き、頸部で括れる小形の



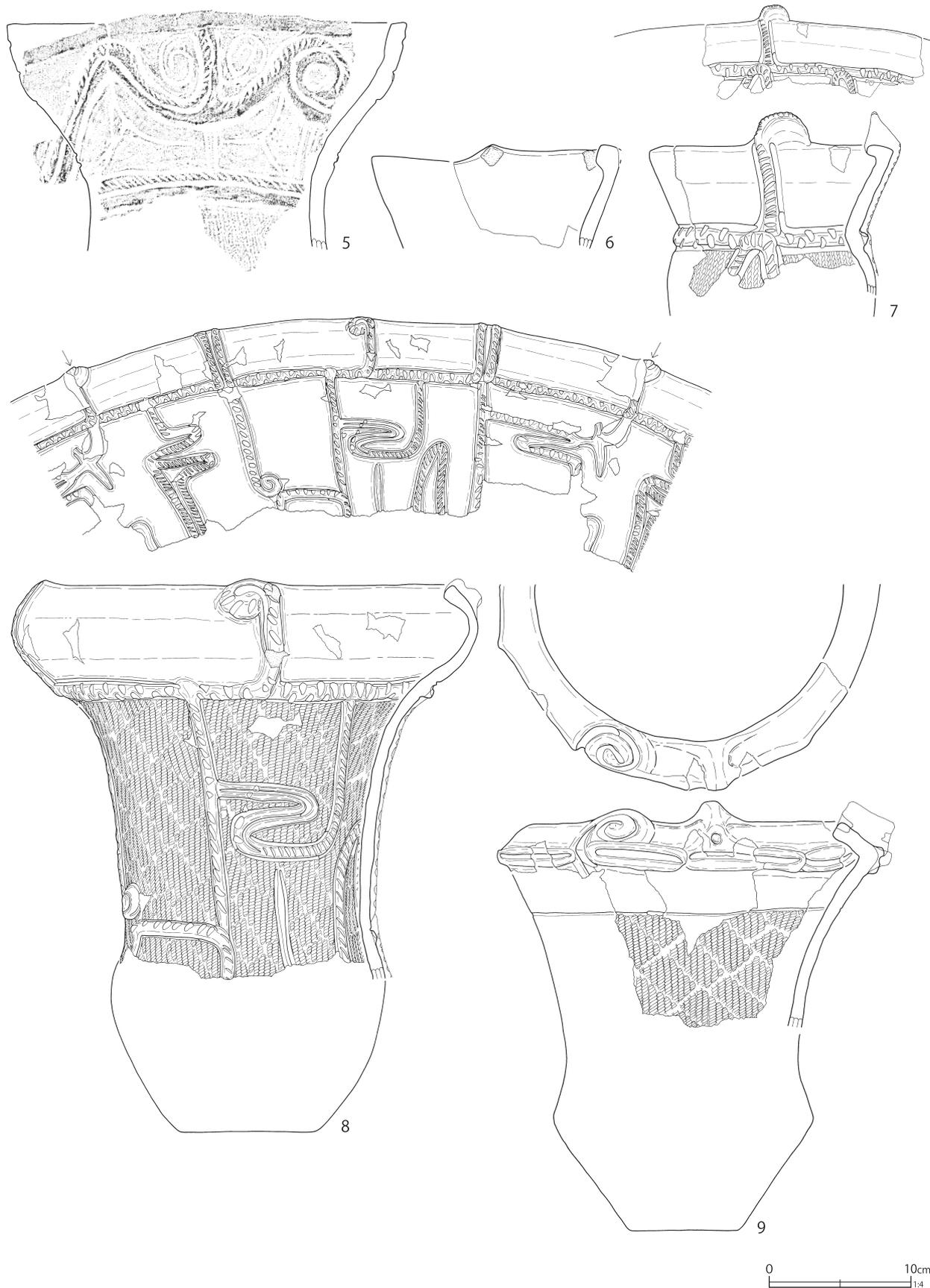
第100图 第5号住居跡遺物出土状況(1)



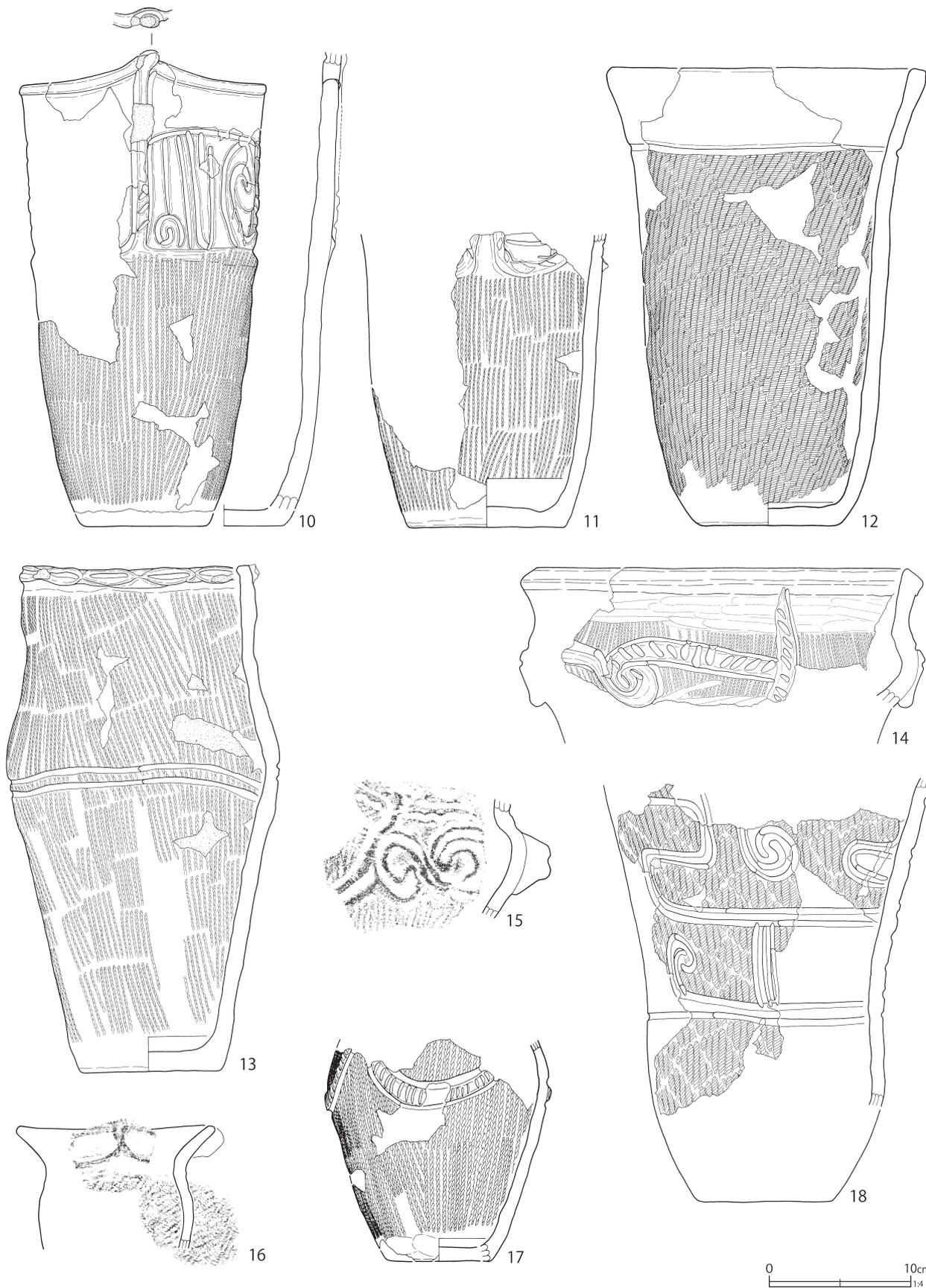
第101図 第5号住居跡遺物出土状況(2)



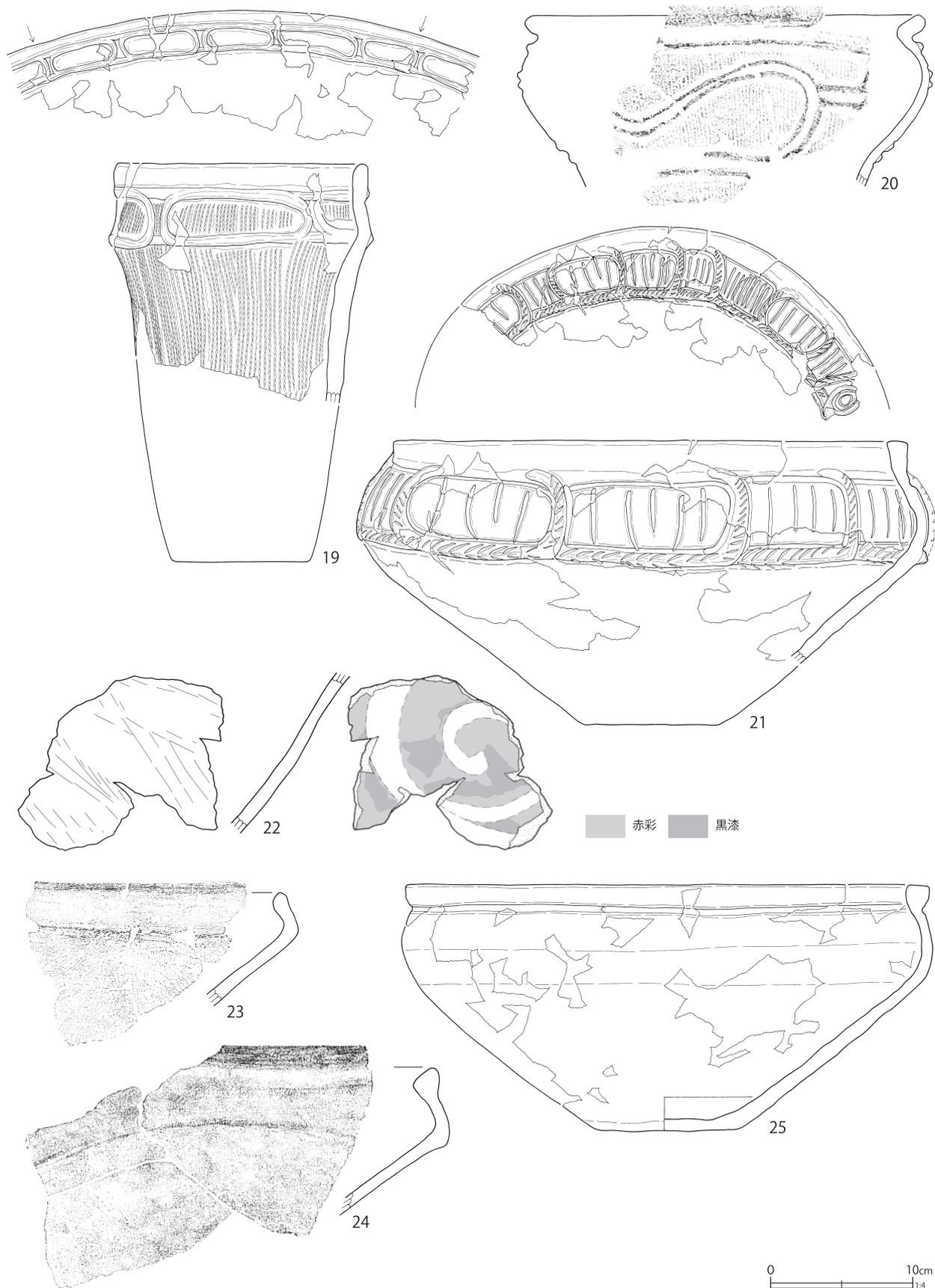
第102图 第5号住居跡出土遺物(1)



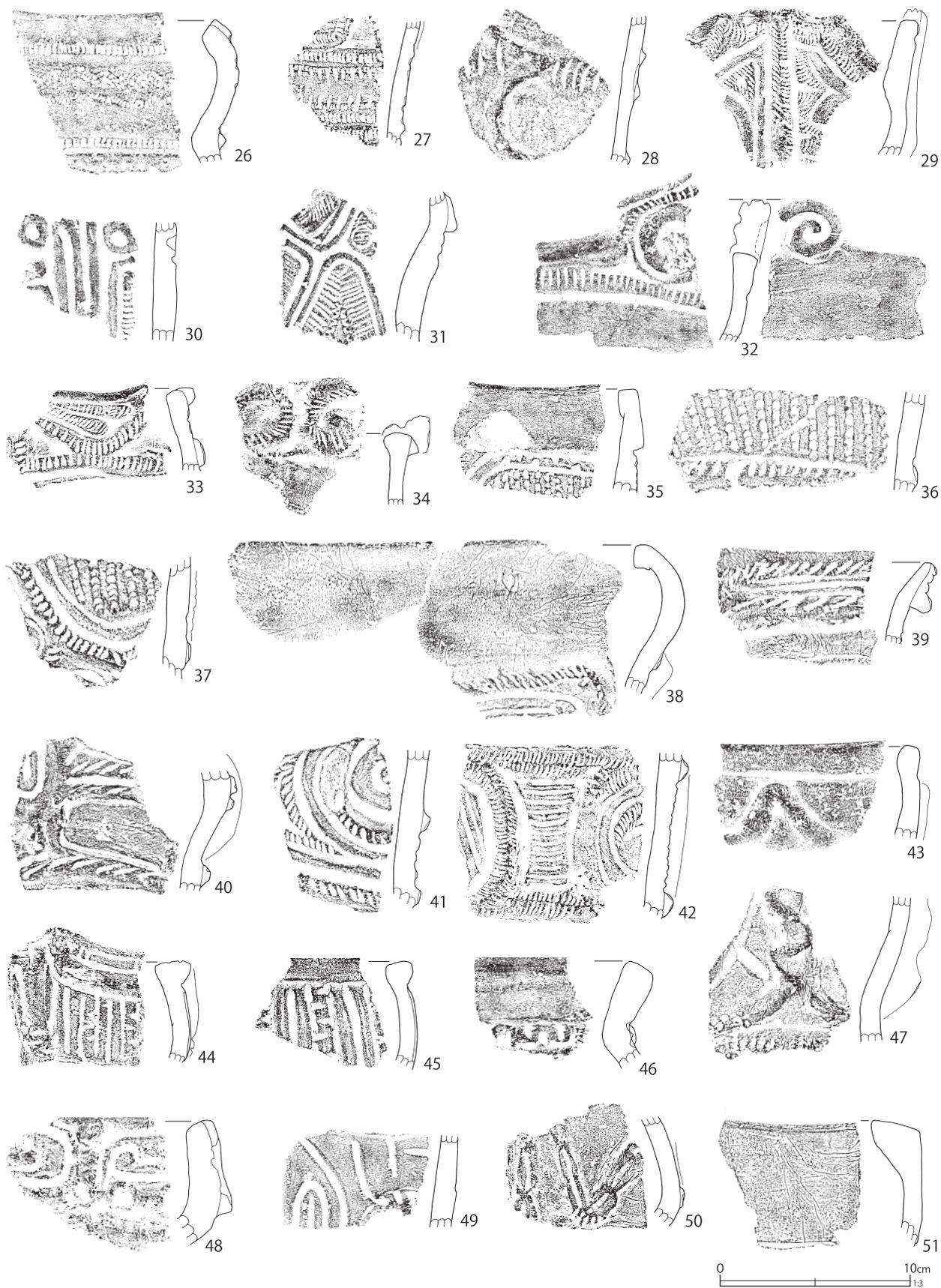
第103図 第5号住居跡出土遺物(2)



第104図 第5号住居跡出土遺物(3)



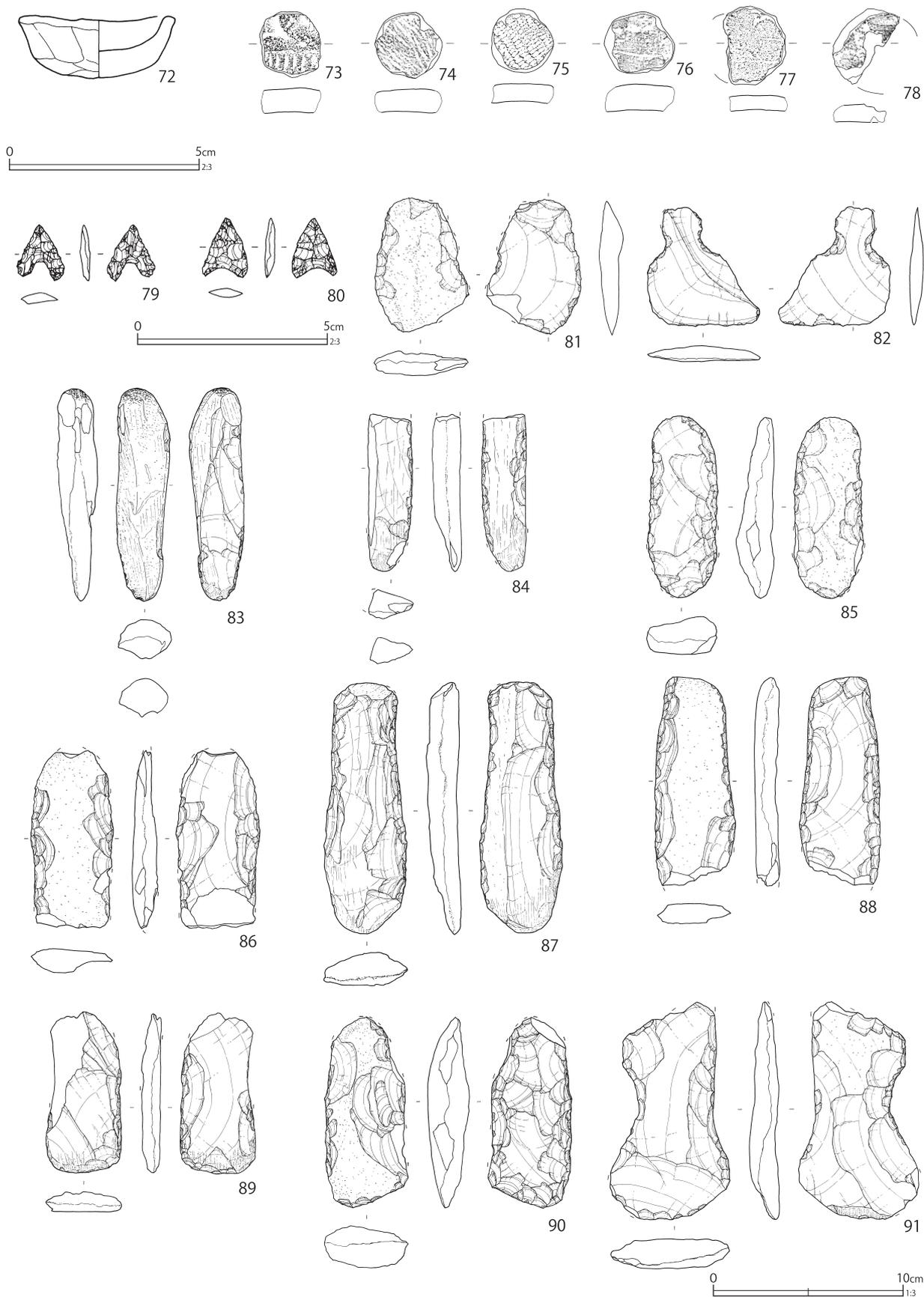
第105図 第5号住居跡出土遺物(4)



第106图 第5号住居跡出土遺物(5)



第107図 第5号住居跡出土遺物(6)



第108图 第5号住居跡出土遺物(7)



第109図 第5号住居跡出土遺物(8)

第42表 第5号住居跡出土石器観察表 (第108・109図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
108 - 79	石鏃	I 2①	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.3	
80	石鏃	I 2①	チャート	1.6	1.2	0.3	0.4	
81	大形粗製石匙	I 1①イ	ホルンフェルス	6.3	5.9	0.9	23.2	
82	スクレイパー	II 2②ア	頁岩	7.1	[4.9]	1.3	43.0	
83	磨製石斧	III ①ア	緑色岩	11.3	2.8	2.1	71.4	
84	磨製石斧	III ②イ	緑泥片岩	[8.3]	[2.3]	[1.5]	36.2	
85	打製石斧	II 2②ア	ホルンフェルス	9.6	[3.7]	2.0	77.4	
86	打製石斧	II 2②イ	砂岩	[9.4]	4.4	1.3	66.2	
87	打製石斧	II 2①ア	緑色岩	13.3	4.4	1.8	123.7	
88	打製石斧	II 2②ア	砂岩	[11.1]	4.2	1.3	83.8	
89	打製石斧	II 2②イ	緑色岩	[8.5]	4.0	1.1	48.6	
90	打製石斧	III 2②イ	頁岩	10.1	4.4	2.2	104.5	
91	打製石斧	III 1②イ	砂岩	[11.5]	6.3	1.6	98.2	
109 - 92	打製石斧	IV ②イ	ホルンフェルス	9.2	4.9	2.0	90.9	
93	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[10.4]	[6.5]	3.0	222.0	
94	打製石斧	III 1②イ	ホルンフェルス	[9.5]	7.3	1.9	125.8	
95	打製石斧	III 2②イ	安山岩	[8.6]	5.3	3.5	171.7	
96	打製石斧	V 1②イ	ホルンフェルス	[7.9]	5.3	1.4	79.6	
97	礫器	①イ	頁岩	11.3	7.2	3.8	413.0	
98	敲石	IV 1-3②イ	砂岩	[9.6]	3.4	2.3	103.0	
99	砥石	I ②イ	砂岩	11.2	[7.3]	2.0	226.9	
100	磨石	IV 1-3①ア	砂岩	8.9	7.2	2.7	171.7	磨製石斧からの再利用

深鉢で、胴部に単節RLを施文する。17も頸部が括れる深鉢で、胴部の撚糸文L地文上に刻み隆帯で弧線状に連結するモチーフを描く。

21～25は浅鉢である。21は胴部が「コ」字状に屈曲する浅鉢で、肩部の区画内に上下交互に差し切り状の沈線文を施文する。22は内面に渦巻文を漆で描いている。23、24は「く」字状に屈曲する浅鉢で、25は21と器形が類似する。

破片では26、27が角押文等を施文する勝坂式古段階の土器で、26、27は貉沢式から新道式、28は阿玉台Ⅱ式に比定されよう。29～31は勝坂式中段階の藤内式段階の土器である。31はパネル文土器、30は半肉彫状沈線のパネル文を施文するもので、新しくなる可能性もある。32～42は刻み隆帯等でモチーフを描く勝坂式新段階の井戸尻式段階の土器群である。43～57、60は沈線文や交互刺突文を施文する勝坂式終末段階の土器群である。52、53は同一個体で、地文に撚糸文Rを施文する。

58は18と同様なモチーフを描くが、地文は撚糸文Rである。加曾利EⅠ式である。59も加曾利EⅠ式と思われ、63は加曾利EⅠ式、61、64、66は加曾利EⅢ式であろう。

62、65は撚糸文Lのみ施文する勝坂式の破片で、69、71は撚糸文L、70は0段多条RLの縦走縄文を施文する底部破片である。

67、68は胴部が屈曲する浅鉢で、67は肩部の楕円区画内に集合沈線を施文する。

72は小形の手捏土器で、73～78は土器片を利用した土製円盤である。

石器類は79～100である。

79、80は石鏃である。

81は粗粒の石材を用いた大形粗製石匙で、摘み部が作り出されている。

82は磨製石斧であるが、作りが粗雑である。83、84は磨製石斧の破片である。

85～96は打製石斧である。85～90は短冊形を呈する。刃部が残存している87、89、90のうち、

87が片刃で、89、90は両刃である。特に89の刃部は摩耗している。また、87は被熱により裏面に残っている節理面が発泡している。91は分銅形を呈し、刃部が片刃である。また、刃部の裏面が摩耗している。92～94は撥形を呈する。刃部の残っている92は片刃である。

97は礫器である。

98が敲石で、上下端部に敲打痕を有する。

99は研ぎ面が不明瞭な砥石である。

100は磨石で、裏面が欠損した後も欠損面を使用面として再度利用している。

第6・20・28・30号住居跡（第110図～第126図）

R-13・14区に位置する。4軒の住居跡の重複である。当初第6号住居跡（新）と第20号住居跡（古）の重複を想定して調査を進めたが、第6号住居跡床面直下から第28号住居跡の炉跡が検出された。また、第20号住居跡の北東側の調査区壁際に、第20号住居跡より古い第30号住居跡の存在が明らかになった。土層の観察からは第28号住居跡と第20号住居跡及び第30号住居跡との新旧関係は不明であるが、床面レベルを考慮すれば、古い順に第30号住居跡→第20号住居跡→第6号住居跡→第28号住居跡という変遷が考えられよう。なお、北側で第48号住居跡と重複するが、新旧関係は明瞭でない。

第6号住居跡は形状不明で、規模は断面図から約5.9m×5.1m、第20号住居跡は北西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長径5.45m×短径5.00m、第28号住居跡、第30号住居跡は形状、規模とも不明である。4軒で合わせて6本の壁溝（壁溝1～6）が検出された。特に第20号住居跡（壁溝2、3）と第30号住居跡（壁溝5、6）は2本ずつ検出され、いずれも外側の溝（壁溝3、6）が新しく、建て替えを行っているものと思われる。

柱穴は4軒で25基を検出したが、それぞれの壁溝との対応は明瞭ではない。

覆土、重複状況、深さ及び配置から、主柱穴を検討すると、第6号住居跡はP6、7の2基が想定される。他の柱穴は、第20号住居跡の覆土中に掘り込まれており、未検出である。第28号住居跡は5基検出された。そのうちP3、5のみが深い、配置は明瞭ではない。第20号住居跡は4基検出された。そのうち、最終的に外側の壁溝3に伴うものはP8～12の一群と思われる。また、P13及びP19、20は覆土に多量のロームブロックを含んでおり、埋め戻された可能性がある。なお、配置的にP19、20は古い内側の壁溝2に伴うものと想定される。第30号住居跡は、検出できた柱穴はP22～25の4基のみである。

主柱穴の深さは、P3=57cm、P5=45cm、P6=30cm、P7=25cm、P8=50cm、P9=53cm、P10=42cm、P11=55cm、P12=50cm、P13=45cm、P19=55cm、P20=45cm、P22=53cm、P23=53cm、P24=54cm、P25=46cmである。

第20号住居跡の炉は、中央部やや北西寄りに位置し、被熱の弱い地床炉であるが、炉の外周部や炉内からチャート系の大形礫が数点出土していることから、石囲炉であった可能性が高い。また、炉の南側に近接して、石棒の頭部が出土している。

第28号住居跡の炉は地床炉で、第6号住居跡南壁際から検出された。炉床は被熱のため硬化及び赤化していた。

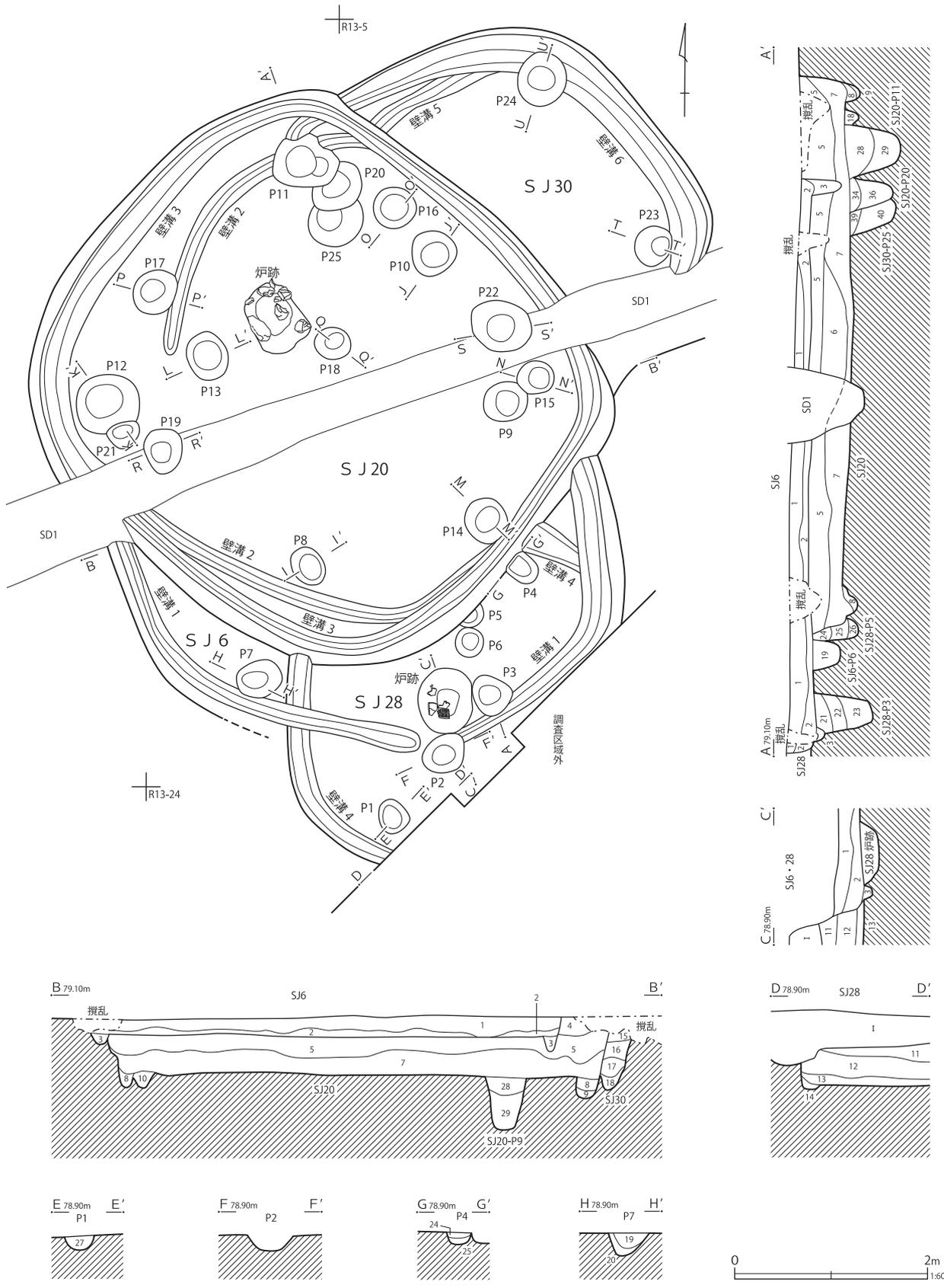
いずれの住居跡も、埋甕は検出されていない。

各住居跡は出土遺物から、第30号住居跡が加曾利EⅠ式後半期、第20号住居跡が加曾利EⅠ式後半期、第6号住居跡が加曾利EⅡ式～Ⅲ式期、第28号住居跡が加曾利EⅢ式期の所産と思われる。

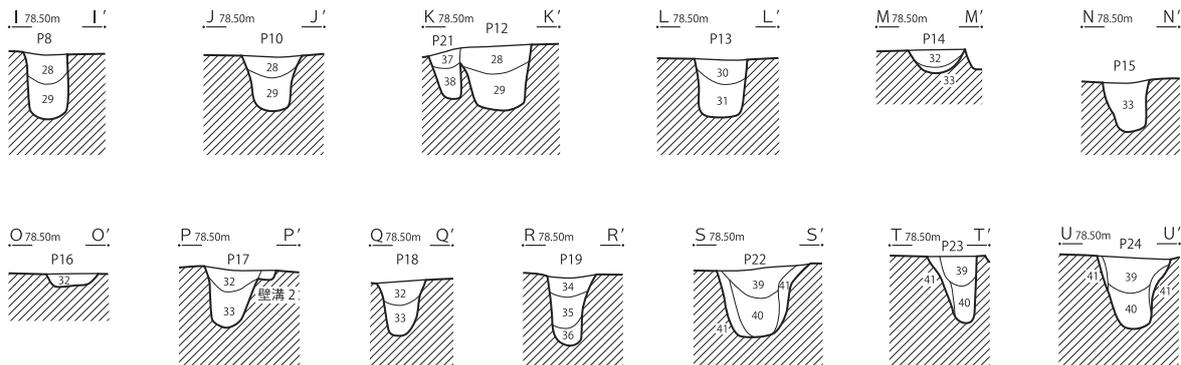
遺物は第113図～第125図で、各住居跡から土器類、石器類、土製品類が出土している。

第6号住居跡出土遺物

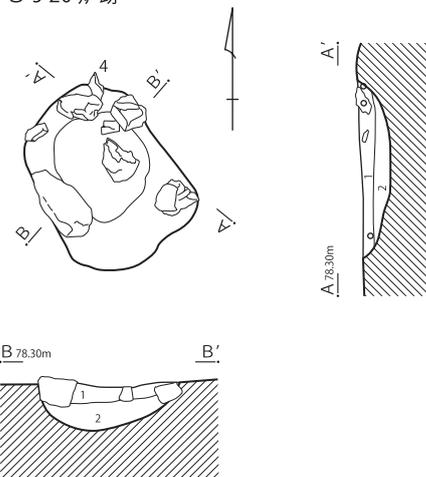
第6号住居跡からは第114図1～第116図37が出



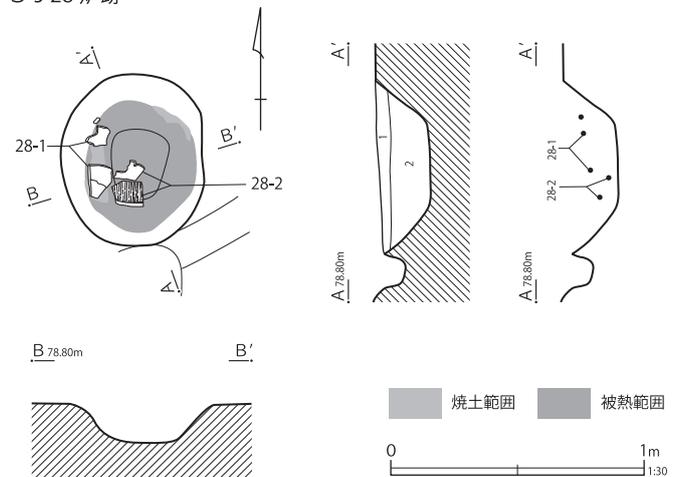
第110図 第6・20・28・30号住居跡(1)



S J 20 炉跡



S J 28 炉跡



S J 6・20・28・30

1 表土層

S J 6

- 1 黒褐色土 ローム微粒子少量 しまり悪い
- 2 暗灰褐色土 1層をベースにローム土を多く含む しまり悪い
- 3 暗灰褐色土 2層に近似 しまり非常に悪い
小ブロック状のローム土を多く含む (壁溝 1)

S J 20

- 4 黒褐色土 ローム土を微粒子状に含み、焼土粒子も微量含まれる
しまり良い
- 5 暗黄褐色土 ローム土をブロック状及び、微粒子状に含む
炭化物粒子微量
- 6 黒褐色土 ローム粒子含む 炭化物粒子・焼土粒子多量
遺物も多い
- 7 暗灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒子多量
5層に近いが、ローム粒子の混入多い
- 8 黄茶褐色土 6層をベースにローム土多量
粒子類に含まれない (壁溝 3)
- 9 黄褐色土 ローム土を主体に7層を混ざる 粘性非常に強い (壁溝 3)
- 10 黄褐色土 ローム土と灰褐色土の混土层 (壁溝 2)

S J 28

- 11 暗茶褐色土 黒褐色土をベースにローム土を多く含む しまり悪い
- 12 暗灰褐色土 焼土微粒子少量 しまりやや良い
- 13 黄茶褐色土 12層をベースにローム土を多く含む、粘性強い
- 14 黄褐色土 ローム土主体で17層土を混ざる
しまり悪く粘性非常に強い (壁溝 4)

S J 30

- 15 灰茶褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 16 灰褐色土 17層に近似するが、ローム土の混入多い
- 17 暗灰褐色土 ローム土を微粒子状に含み、炭化物粒子を少量含む
- 18 黄褐色土 17層をベースにローム土を多量に混ざる (壁溝 6)

S J 6・20・28・30 ピット

- 19 暗褐色土 ローム土多量 炭化物粒子少量
- 20 暗黄褐色土 ローム土を19層より多く混じる
- 21 暗灰褐色土 炭化物粒子を微量含むのみで、比較的均質
- 22 暗茶褐色土 粒子類は含まれずローム土を小ブロック状に含む 粘性非常に強い
- 23 黄茶褐色土 22層をベースにローム土多量
- 24 暗灰褐色土 ローム粒子少量 しまり悪い
- 25 暗灰褐色土 ローム土ブロック状に混じる しまり良い
- 26 暗灰褐色土 24層に近似するが、黒味強め 炭化物・焼土粒少量
- 27 暗褐色土 黒味とても強い ローム粒子少量
- 28 暗灰褐色土 ローム土・ロームブロック (径1~3cm) を含む
炭化物粒子少量
- 29 暗灰褐色土 28層に近似するがローム土の混入は少ない 炭化物粒子少量
- 30 暗茶褐色土 ローム土・ロームブロック多量 炭化物粒子少量
- 31 暗黄褐色土 ローム土主体 しまり良い
- 32 暗茶褐色土 ローム土を粒子状に含み、炭化物粒子微量
- 33 暗灰褐色土 32層に近似するが、ローム土を多く含み、より黄味を帯びる
- 34 暗灰褐色土 ローム土を粒子状及び小ブロック状に含む 炭化物粒子微量
- 35 暗灰褐色土 34層に近似するが、ロームブロックの混入多い
- 36 暗黄褐色土 ローム土主体に34・35層土を混じる
- 37 暗灰褐色土 ローム土を多く含み、またブロック混じる 炭化物粒子微量
- 38 暗灰褐色土 37層に近似するが、ロームブロックの混入が多い
- 39 暗茶褐色土 ローム土を粒子状に含む 炭化物・焼土粒子少量
- 40 暗茶褐色土 39層に近似するが、しまり非常に弱い
- 41 暗黄褐色土 ローム土主体 しまり良い

S J 20 炉跡

- 1 暗褐色土 ローム土を粒子状に微量含む ブロック少量
炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 1層よりローム土の混入多く、炭化物・焼土粒子も多く含む

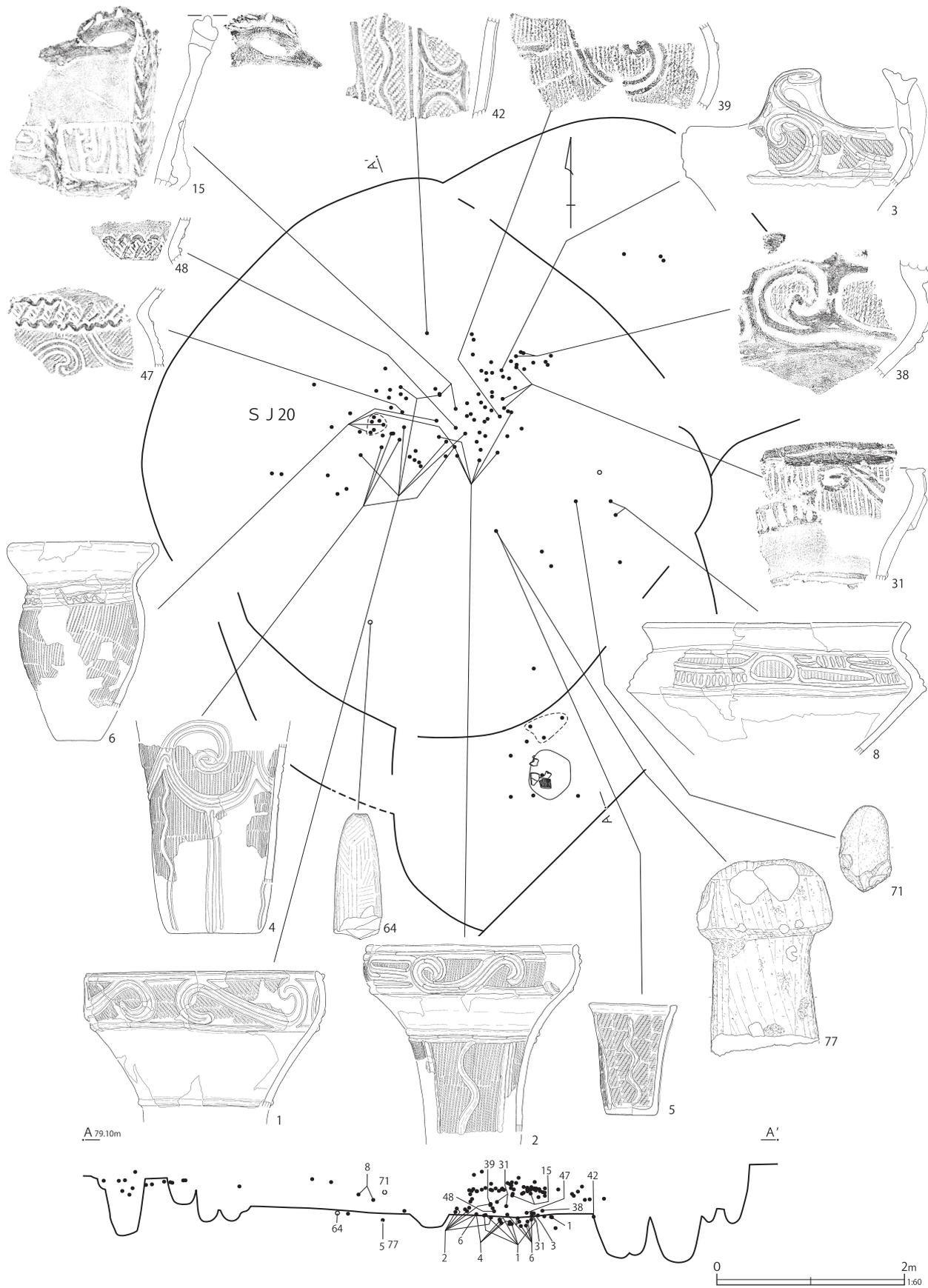
S J 28 炉跡

- 1 黄灰褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を少量含み、被熱したローム土を混じる
- 2 橙灰褐色土 大径の焼土・炭化物粒子を多く含む
被熱したローム土も多い為、ザラザラの触感

第111図 第6・20・28・30号住居跡 (2)



第112図 第6・20・28・30号住居跡遺物出土状況(1)



第113図 第6・20・28・30号住居跡遺物出土状況(2)

第43表 第6・20・28・30号住居跡柱穴計測表（第110・111図）

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	35.0	15.0	P 2	47.0	15.0	P 3	42.0	57.0	P 4	[30.0]	13.0	P 5	30.0	45.0
P 6	30.0	30.0	P 7	46.0	25.0	P 8	40.0	50.0	P 9	46.0	53.0	P 10	48.0	42.0
P 11	67.0	55.0	P 12	66.0	50.0	P 13	50.0	45.0	P 14	[45.0]	20.0	P 15	37.0	38.0
P 16	45.0	10.0	P 17	50.0	46.0	P 18	38.0	45.0	P 19	46.0	55.0	P 20	60.0	45.0
P 21	35.0	40.0	P 22	65.0	53.0	P 23	42.0	53.0	P 24	57.0	54.0	P 25	[55.0]	46.0

土した。

土器類は1～22で、8は勝坂式新段階の土器で、1、2、4、6、7、9、10、15は加曾利E式キャリパー形土器である。1、2、7は撚糸文地文上に隆帯で渦巻文や区画文を施文するものであるが、モチーフ等に崩れが見られ、加曾利EⅡ式～Ⅲ式に比定されよう。4、6は2本隆帯で渦巻文を施文するもので加曾利EⅠ式後半段階に、9、10、15は時期不詳であるが加曾利E式前半段階の土器群と思われる。5は口縁部が内折する深鉢の口縁部破片である。

11～14、16、17は磨消懸垂文や逆「U」字状磨消懸垂文を施文する加曾利EⅢ式土器である。

3、18、19は連弧文土器で、条線地文上に3本沈線の連弧文を施文する。地文の条線文を充填施文することから、加曾利EⅡ式終末～EⅢ式段階に比定されよう。

20は膨らむ器形であることから、両耳壺の胴部の可能性がある。21、22は深鉢の底部である。

土製品は、23が小形手捏ねのミニチュア土器で、24が土器片利用の土製円盤である。

石器は第115図25～第116図37である。

25、26は石鏃の未成品である。25は平面形が三角形状を呈し、正面右側縁に両面交互剥離を施すことにより先端部を作出しようとしている。また、末端にも剥離を加え、末端の中央を窪ませようとしている。以上の点から、石鏃の未成品と判断した。26は正面右側縁に両面交互剥離を施すことによって石鏃の側面観を整形しようとしているが、全体的に厚く、正面左側が欠損していることから未成品と判断した。

27はスクレイパーで、両側縁に刃部を有する。裏面には主要剥離面が残る。

28～33は打製石斧である。28～31が撥形を呈し、32、33は短冊形を呈する。刃部が残存する28～31のうち、28、29、31は両刃、30が片刃である。

34は礫器である。被熱の影響を著しく受けており、欠損部である上端面は部分的に発泡している。

35、36は磨石の破片である。36は欠損部である上端面を使用面として再利用している。

37は石皿の破片である。裏面の左右両脇に凹痕を有する。

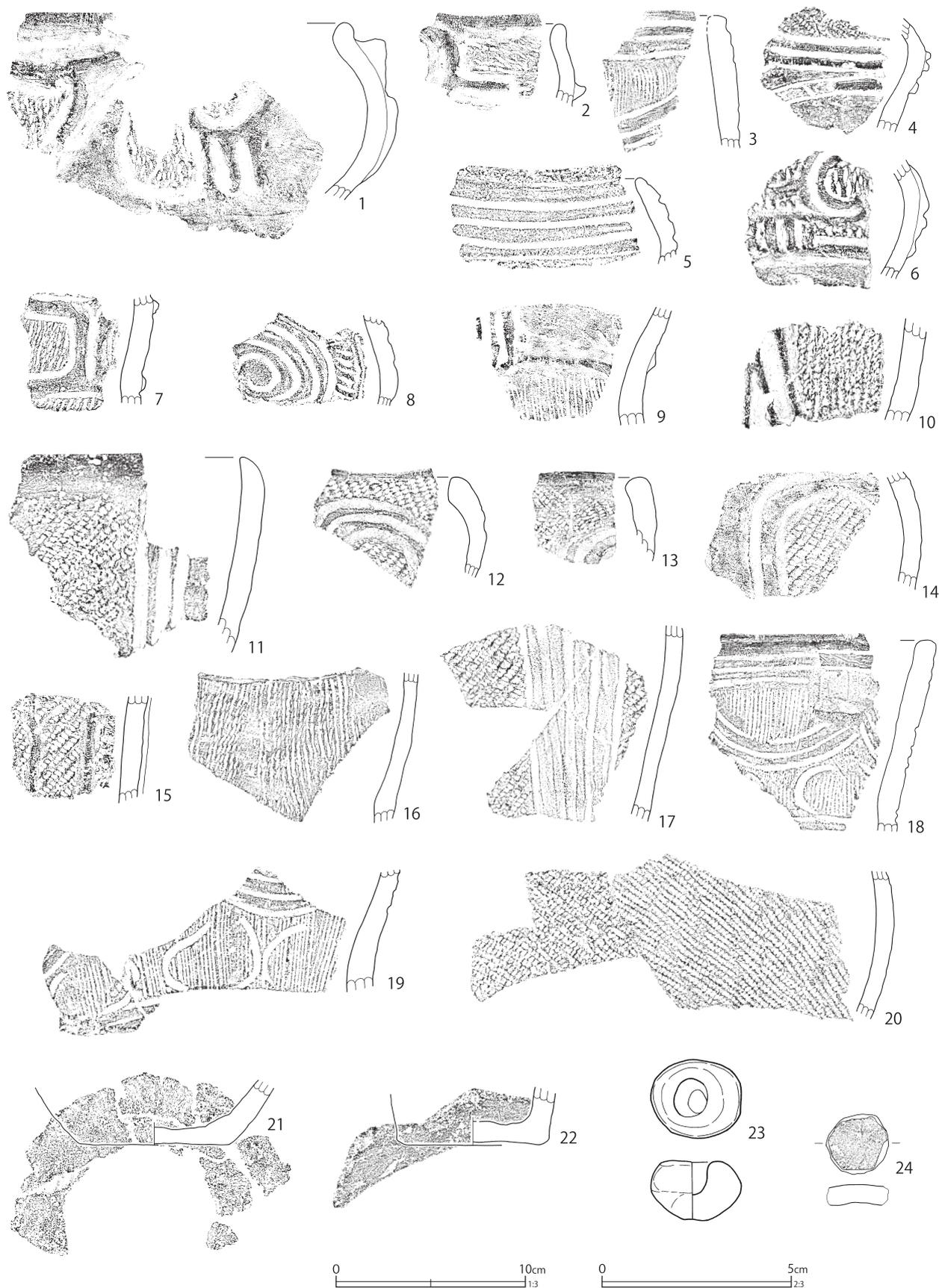
第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡の出土遺物は第118図1～第122図77で、土器類、土製品、石器類が出土した。

土器類は1～56である。1～4は口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯で構成される典型的な加曾利E式土器のキャリパー形深鉢形土器である。1は幅広の頸部無文帯を有し、口縁部に2本隆帯の横「S」字状渦巻文と半「S」字状渦巻文の融合したモチーフを2箇所、その中間に独立の横「S」字状渦巻文を1箇所に配置する構成をとる。口縁部の地文には、単節RLを横位施文する。

2は口縁部に横「S」字状渦巻文とクランク状モチーフの連結した横「S」字状文1単位と、単独の横「S」字状文2単位を配置する構成をとり、地文に撚糸文を施文する。胴部は2本対隆帯と1本の蛇行隆帯を撚糸文L地文上に垂下する。

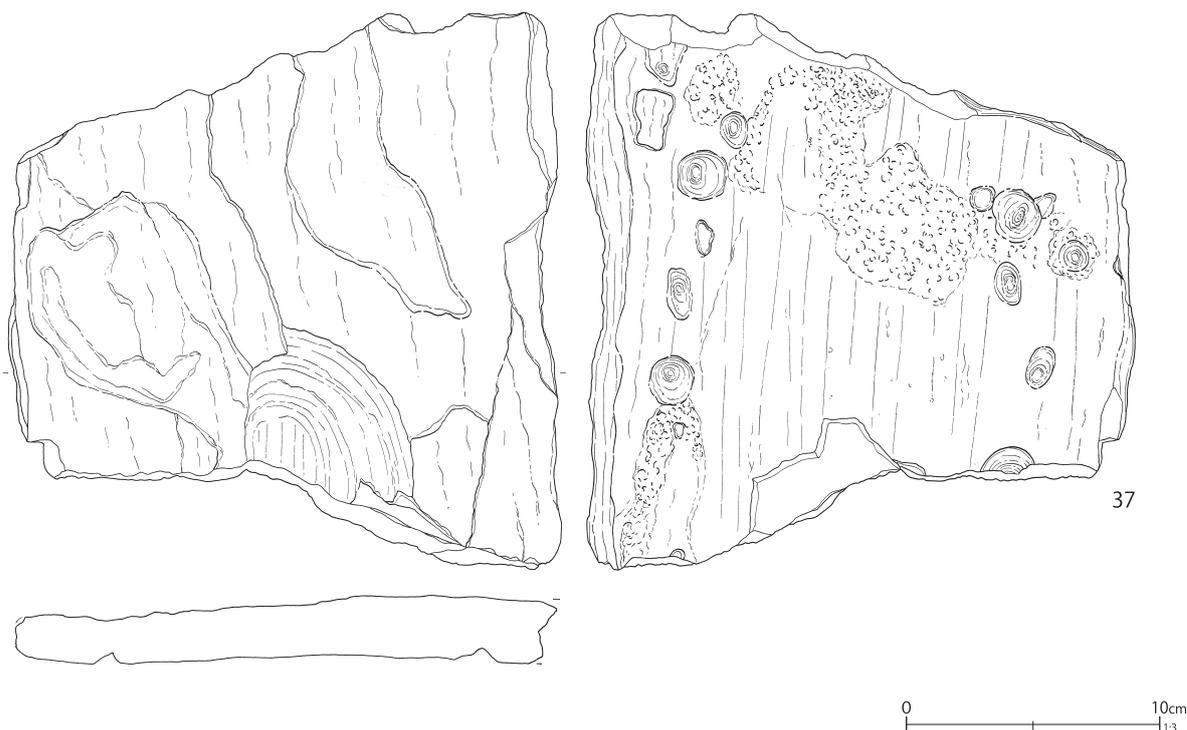
3は口縁部に捻りを加えた箱状把手状の橋状把手が付くキャリパー形土器で、地文に単節RLを施文する。



第114図 第6号住居跡出土遺物(1)



第115図 第6号住居跡出土遺物(2)



第116図 第6号住居跡出土遺物(3)

第44表 第6号住居跡出土石器観察表(第115・116図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
115 - 25	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.2	1.9	0.5	1.4	
26	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.2	1.7	0.9	3.3	
27	スクレイパー	Ⅱ1①イ	砂岩	8.2	8.8	2.0	166.2	
28	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.5	5.0	2.0	113.5	
29	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	10.5	[4.7]	1.9	105.7	
30	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[8.2]	4.2	1.8	67.1	
31	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	12.0	7.9	3.8	339.5	
32	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[10.1]	5.1	1.6	86.6	
33	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[7.6]	3.9	1.7	66.2	
34	礫器	②ア	砂岩	[8.7]	13.7	6.8	140.8	
35	磨石	I 1-3②イ	砂岩	6.7	[3.8]	[2.4]	74.9	
36	磨石	Ⅴ②イ	安山岩	[6.3]	[5.2]	[4.5]	140.8	
116 - 37	石皿	Ⅳ②ア	雲母片岩	[22.1]	[21.8]	3.1	2014.6	

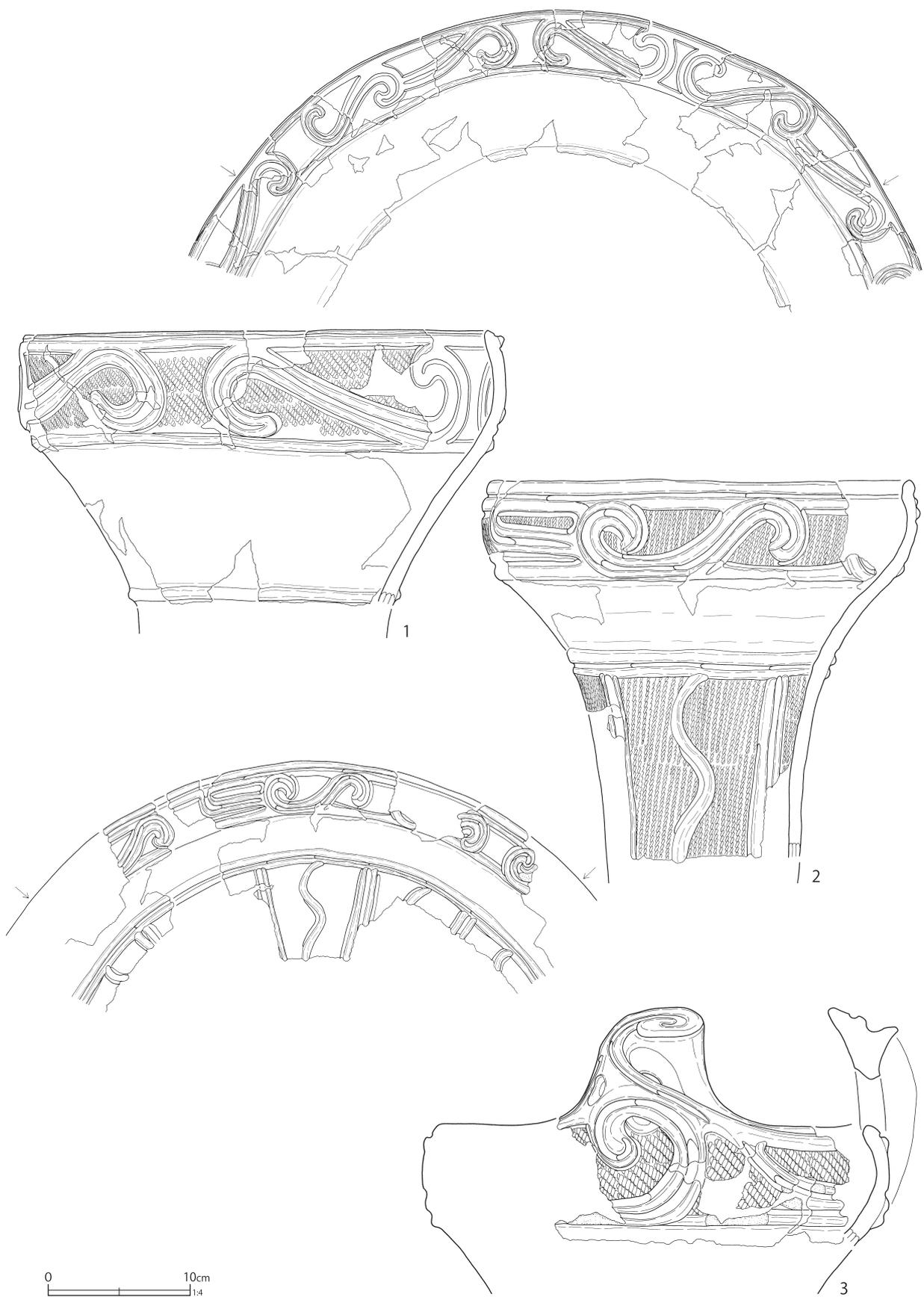
4は胴部破片で、2本隆帯の渦巻文3単位を横位連結するモチーフを描く。渦巻文からは2本隆帯の懸垂文が、連結部分からは蛇行隆帯文を垂下する。渦巻文からの垂下隆帯には、本数や形状に変化がある。

6は無文の内湾する口縁部が大きく開き、頸部で括れる深鉢形土器で、2段の横位小波状隆帯で頸部を区画する。胴部地文に撚糸文Lを施文する。頸部の区画に曽利Ⅱ式系の要素が見られる。

7は胴部がやや括れる筒形の深鉢で、口縁部に橋状把手が付き、把手を中心に口縁部の肥厚帯に広げた両手を、把手下の円形貼付文に腹部を、分岐して垂下する2本隆帯に脚部を表現した人体文と思われる装飾の付く土器である。

5はコップ形に開く深鉢で、地文単節RL縄文上に、隆帯と蛇行隆帯を交互に垂下するが、蛇行隆帯が1箇所省略されている。

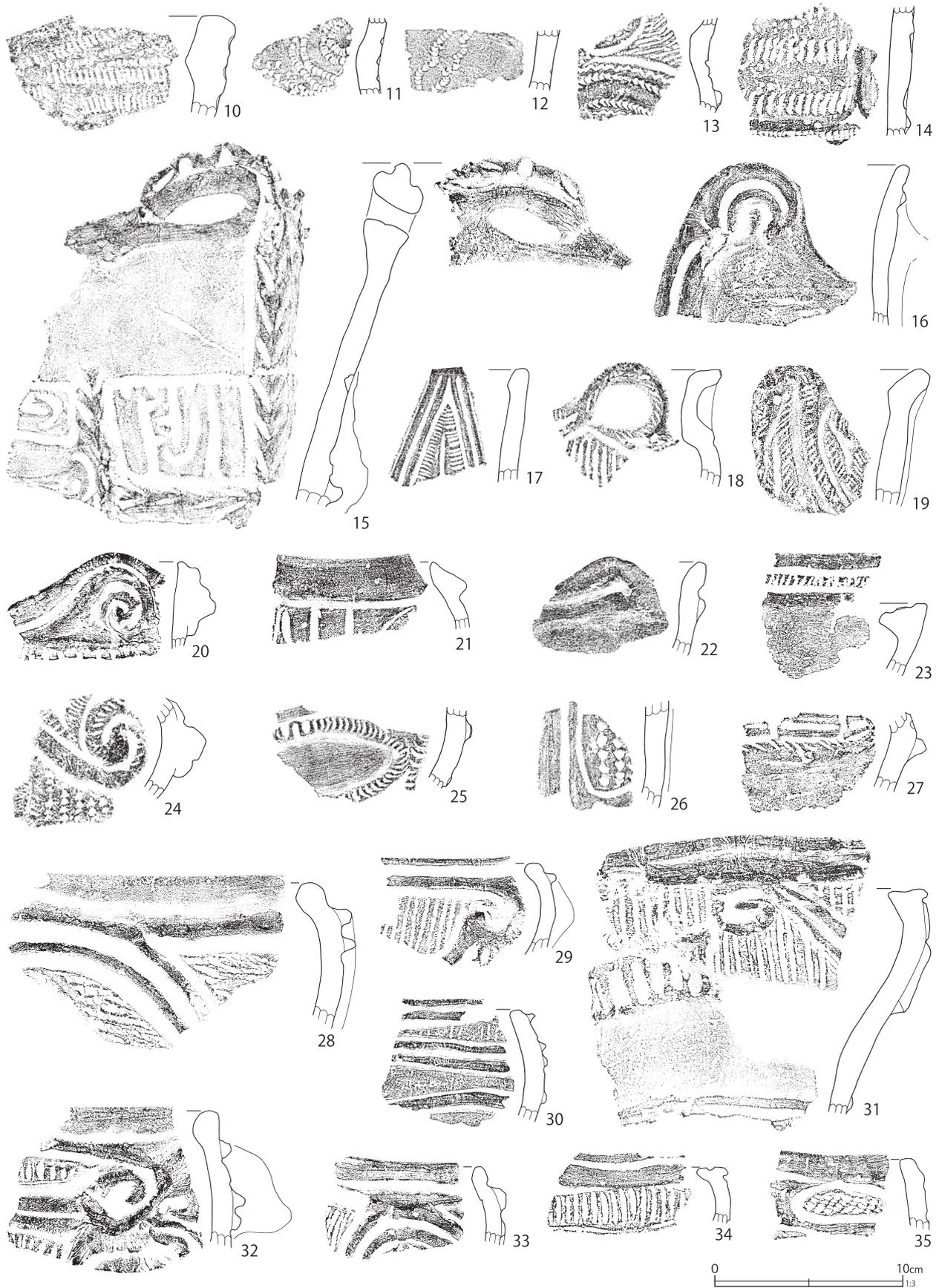
8は口縁部が外反して胴部が屈曲する浅鉢で、



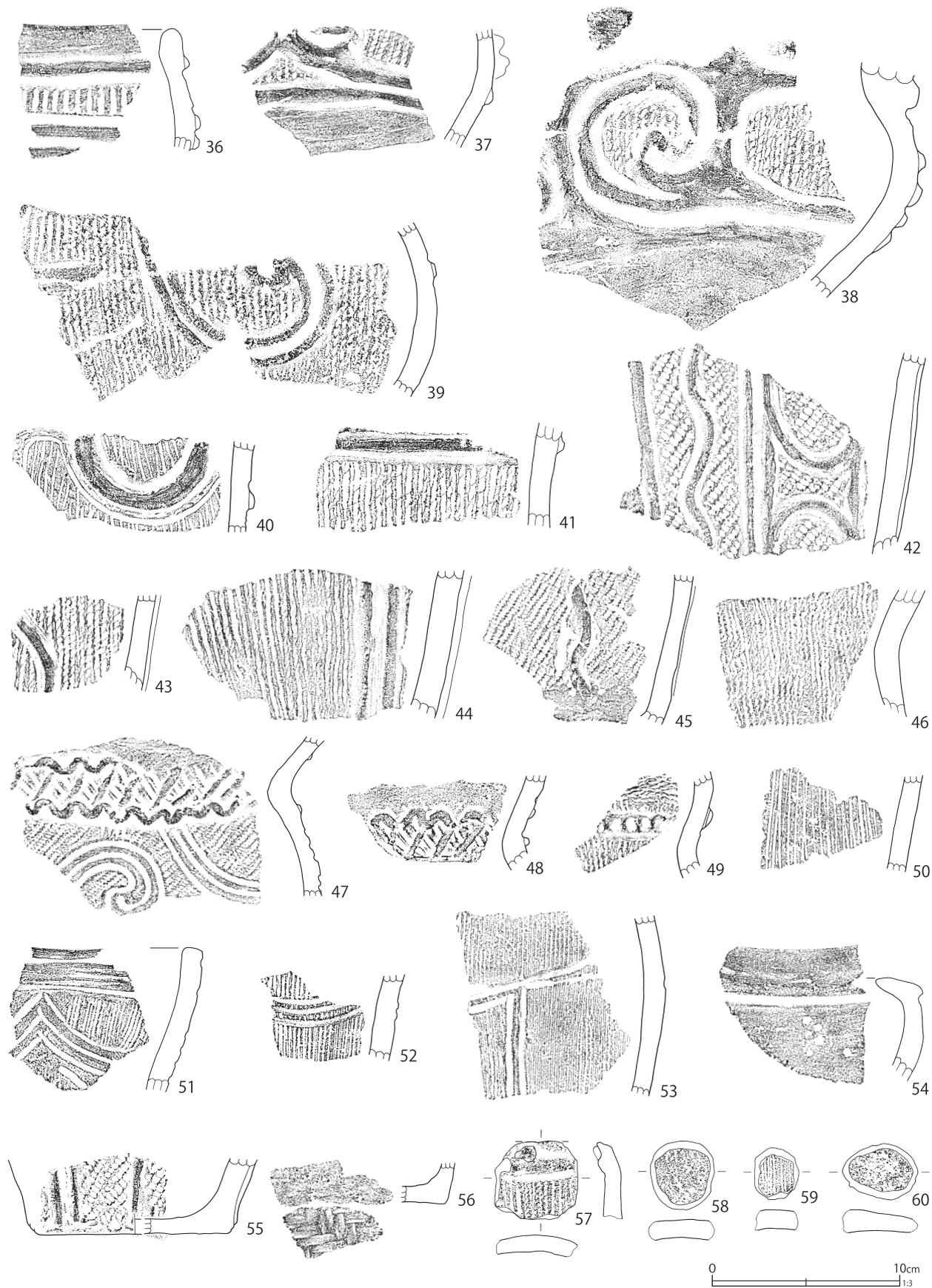
第117图 第20号住居跡出土遺物(1)



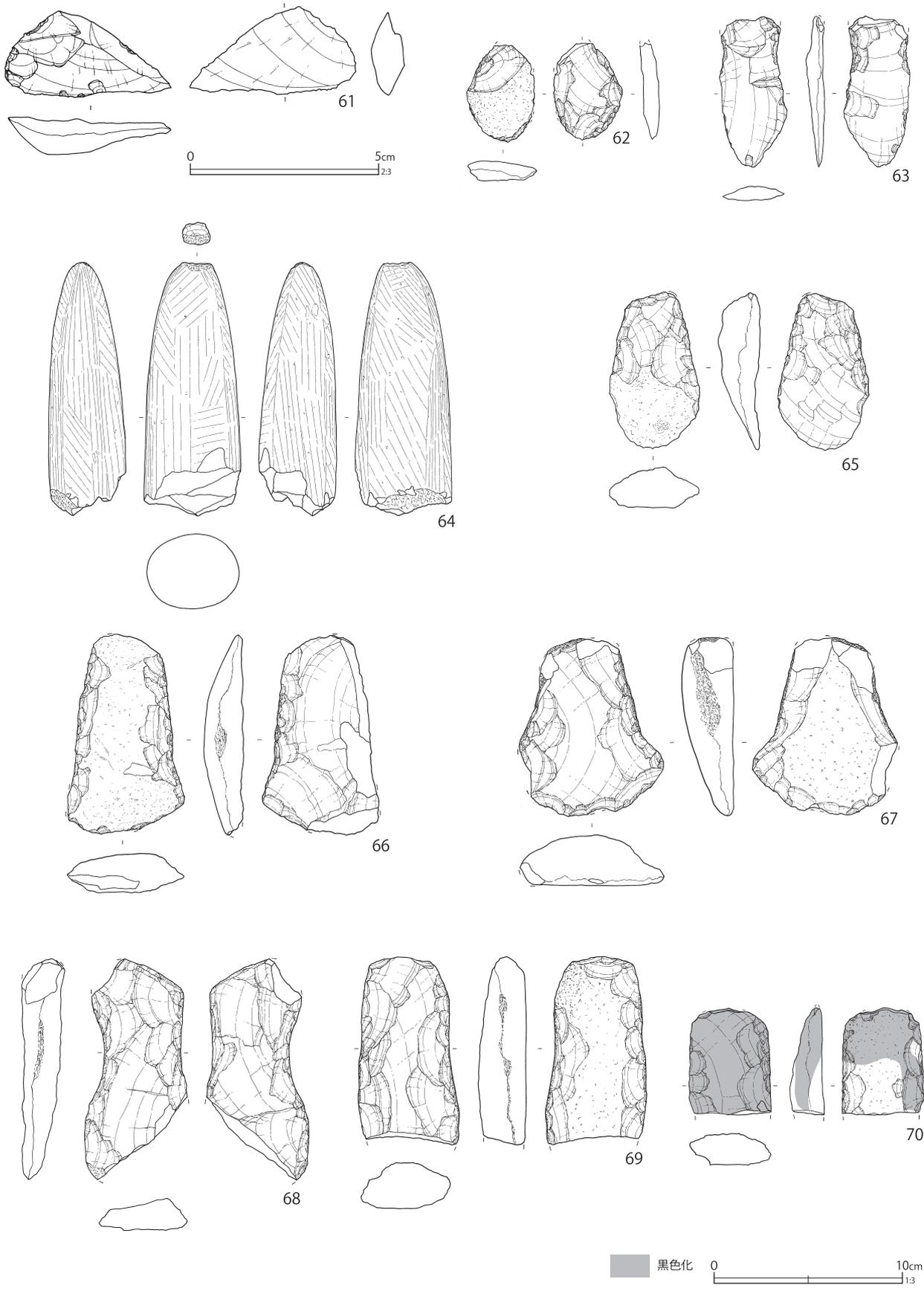
第118図 第20号住居跡出土遺物(2)



第119图 第20号住居跡出土遺物(3)



第120図 第20号住居跡出土遺物(4)



第121図 第20号住居跡出土遺物（5）



第122図 第20号住居跡出土遺物(6)

第45表 第20号住居跡出土復元土器観察表 (第117・118図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
117-1	[19.6]	(33.1)	-	-	40%
2	[26.7]	(29.2)	(30.2)	-	40%
3	[16.8]	(30.4)	(33.0)	-	20%
118-4	[19.7]	-	(20.9)	-	40%
5	15.6	12.6	-	7.2	完形

第46表 第20号住居跡出土石器観察表 (第121・122図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
121 - 61	スクレイパー	II1①	チャート	2.3	4.4	1.0	7.4	敲石として再利用
62	スクレイパー	II1②ア	頁岩	[5.2]	3.6	1.1	22.1	
63	スクレイパー	II2②イ	頁岩	[8.0]	0.5	1.0	23.7	
64	磨製石斧	I②イ		13.5	5.1	4.1	443.7	
65	打製石斧	III2①イ	ホルンフェルス	8.3	4.8	2.2	77.2	
66	打製石斧	III2②イ	砂岩	[10.7]	6.2	7.1	151.3	
67	打製石斧	II1②ア	砂岩	9.5	7.6	2.8	214.4	
68	打製石斧	II1②イ	ホルンフェルス	[11.7]	[5.4]	2.3	136.5	
69	打製石斧	V②ア	砂岩	[10.0]	5.3	2.6	196.2	
70	打製石斧	V②ア	砂岩	[5.7]	4.3	1.8	58.6	
122 - 71	敲石	①イ	ホルンフェルス	9.3	5.6	3.0	187.4	表裏面一部黒色化
72	敲石	IV1-3①イ	砂岩	13.3	6.0	2.8	268.7	
73	磨石	II1-3②ア	砂岩	[12.4]	[9.1]	7.9	1012.9	
74	磨石	II1-3②イ	砂岩	[6.4]	[5.5]	[4.1]	143.9	
75	磨石	IV1-3②ア	砂岩	[6.5]	[6.1]	3.1	124.2	
76	石皿	IV②イ	閃緑岩	[5.0]	[5.6]	8.0	266.2	
77	石棒	②ア	安山岩	[21.3]	14.4	12.3	4186.4	

肩部に文様帯を有する。9は胴部が「コ」字状に屈曲する無文の浅鉢である。

破片では、10～14は角押文や三角押文、幅広のキャタピラ文等を施文する勝坂式古段階の土器群である。10はキャタピラ文に沿って三角押文を施文し、区画内に三角押文の小波状文を施文する。11、12は細かな連続押引刺突文でモチーフを描く。14は阿玉台式系のモチーフを描くが、雲母は含まれない。10、13は雲母を含む。17は半截竹管状工具の重複施文による平行沈線でパネル状区画文を施文するもので、区画内に三叉文と連続爪形文を施文する。勝坂式中段階の藤内式段階に比定されようか。

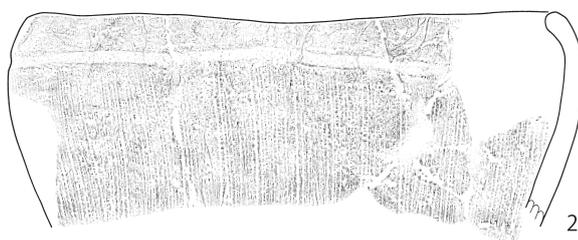
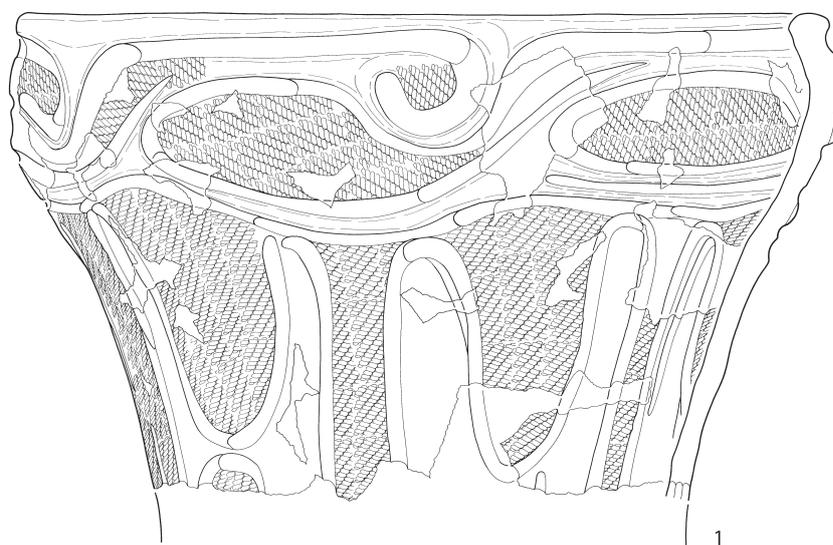
15、16、18～27は勝坂式新段階から終末段階の土器群である。隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に沈線文を沿わす。15は円筒形土器で、口縁部に蛇の頭から垂下するモチーフを施文する。24は

刻み隆帯の渦巻文とペン先状刺突文を合わせて施文する土器で、古い要素が残存している例である。

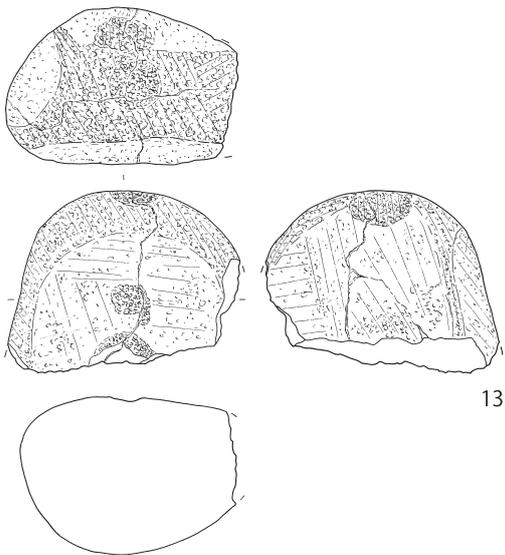
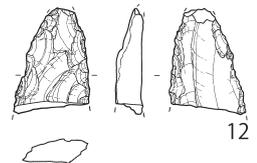
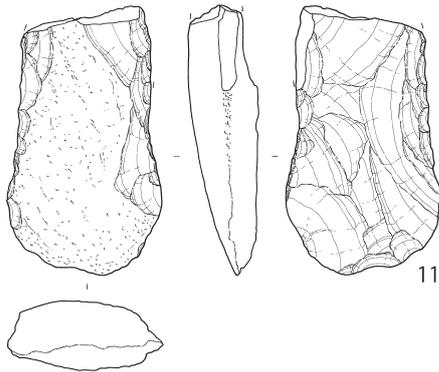
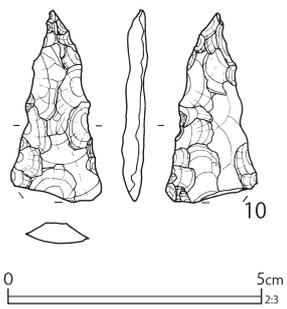
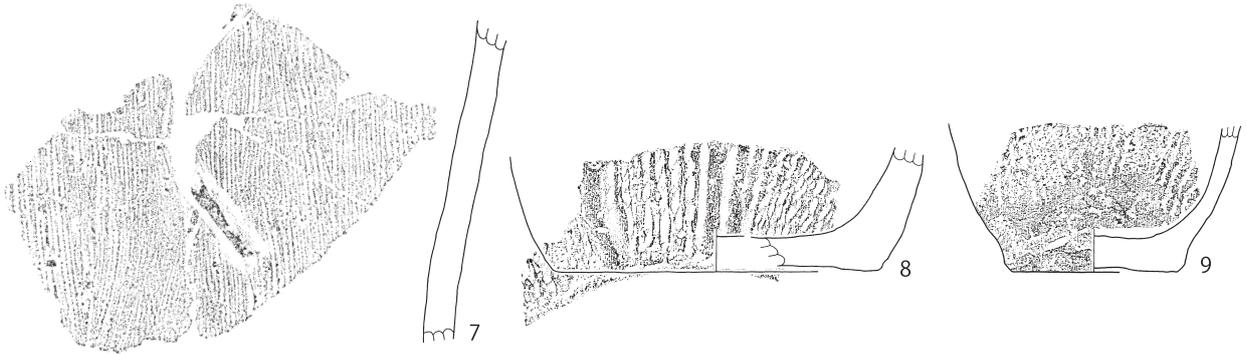
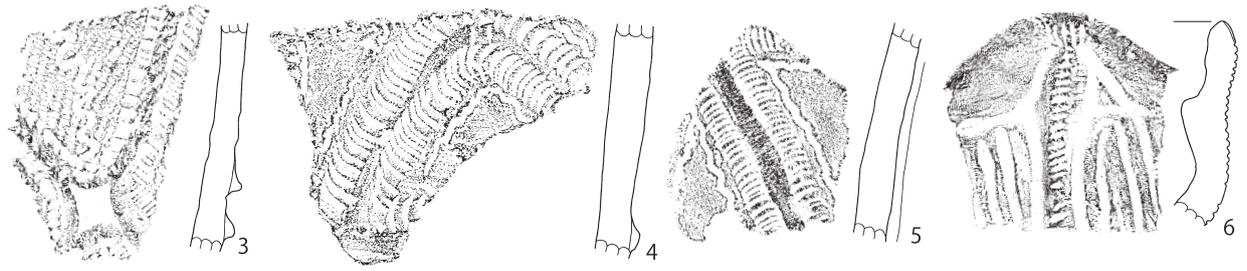
28～46は加曾利E式のキャリパー形深鉢土器である。口縁部に2本隆帯の渦巻文を施文するものが多く、大半は地文に撚糸文を施文する。31、34は幅広の口唇部に沈線を巡らせ、口縁部区画内に集合沈線を充填施文する、曾利式系の要素を有するものである。38は張り出す胴部に2本隆帯の渦巻文を施文する。42～45は隆帯の懸垂文を施文する胴部破片で、42は単節RL地文上に隆帯、蛇行隆帯、対弧状のモチーフを挟む隆帯の懸垂文を施文する。

47、48は頸部を籠目文で区画する曾利式系の土器で、胴部には3本沈線の渦巻文を施文する。49は頸部を押圧隆帯で区画する加曾利E式土器、50は条線文を施文する胴部破片である。

51～53は連弧文土器で、条線地文上に3本沈



第123図 第28号住居跡出土遺物(1)



第124図 第28号住居跡出土遺物(2)

第47表 第28号住居跡出土復元土器観察表（第123図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
123-1	[25.9]	(40.6)	(43.4)	-	50%
123-2	[11.9]	(27.0)	-	-	30%

第48表 第28号住居跡出土石器観察表（第124図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
124 - 10	石鏃	I 2②	チャート	3.8	1.8	0.5	2.6	
11	打製石斧	III 1②ア	ホルンフェルス	[10.7]	6.2	2.9	204.0	
12	打製石斧	III 2②イ	頁岩	[4.2]	[3.0]	[1.1]	12.8	
13	磨石	II 1-3②ア	砂岩	[7.3]	[9.2]	6.3	529.5	

線の連弧文を描く。53は緩い連弧文から沈線懸垂文が垂下する。

54は幅広の口縁部が内湾する浅鉢で、口縁部に沈線を巡らす。55、56は底部破片で、56は網代痕が残る。

57～60は土器片を利用した土製円盤である。

石器、石製品は第121図61～第122図77が出土した。

第121図61～63はスクレイパーである。61は素材剥片の末端を刃部として使用している。62が周縁に、63は両側縁に刃部を有する。63は縦長剥片を素材に用いている。

64は乳棒状の磨製石斧で、刃部を欠損した後、上下両端を使用面として敲石に再利用している。

65～70は打製石斧である。65が楕円形、66～68は撥形を呈する。刃部の残存する65が片刃、67が両刃である。その他、69、70が基部片である。70は被熱により黒色化している。

71、72は敲石で、自然礫を用いている。

73は自然礫を用いた磨石である。被熱によって全体的に赤色化している。74、75が磨石の破片で、74は被熱により赤色化している。

76は石皿の破片で、皿部の一部と思われる。

77は大型石棒の頭部片である。裏面の頭部末端には敲打痕が確認でき、整形痕と思われる。また、被熱によって黄色化している。

第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡の出土遺物は第123図1～第124図13である。

2は炉の覆土から、1は炉の覆土とその周辺

から出土した土器である。1はキャリパー形深鉢土器の口縁部に、単位文化した渦巻文と区画文を重層的に組み合わせた入組状区画文を施文し、胴部の単節RL地文上に「H」状の磨消懸垂文を施文している。2は内湾する口縁の無文部を沈線で区画し、胴部に条線文を施文する浅鉢である。1、2とも加曾利EⅢ式土器である。

破片土器では、3～5は隆帯脇に幅広の連続押引爪形文を施して区画し、爪形文脇に小波状沈線を施文する勝坂式中段階の、藤内式段階に比定される土器群である。6は勝坂式新段階の土器で、刻み隆帯と沈線でモチーフを描くものである。

7～9は加曾利E式の深鉢形土器で、7は条線文上に蛇行隆帯を垂下させ、8は撚糸文L地文上に隆帯懸垂文を垂下する。9は撚糸文Lを施文する底部破片である。

石器は10～13が出土した。

10は石鏃で、基部の一部を欠いている。

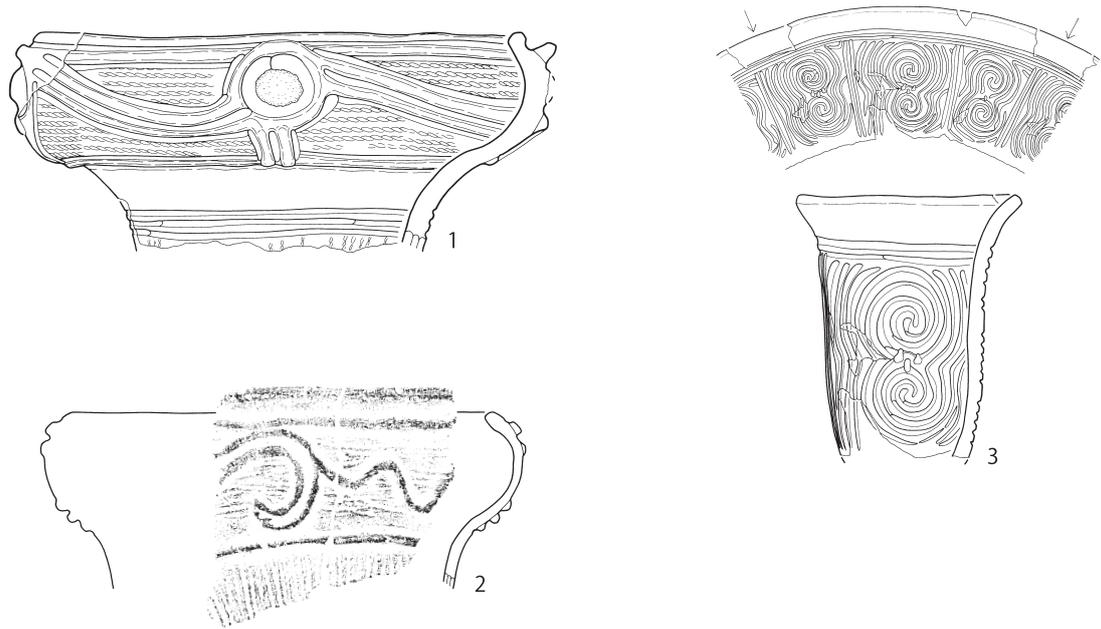
11は基部を欠いた短冊形の打製石斧で、刃部が片刃である。12は打製石斧の基部片である。

13は磨石の破片で、被熱により赤色化とひび割れが生じている。

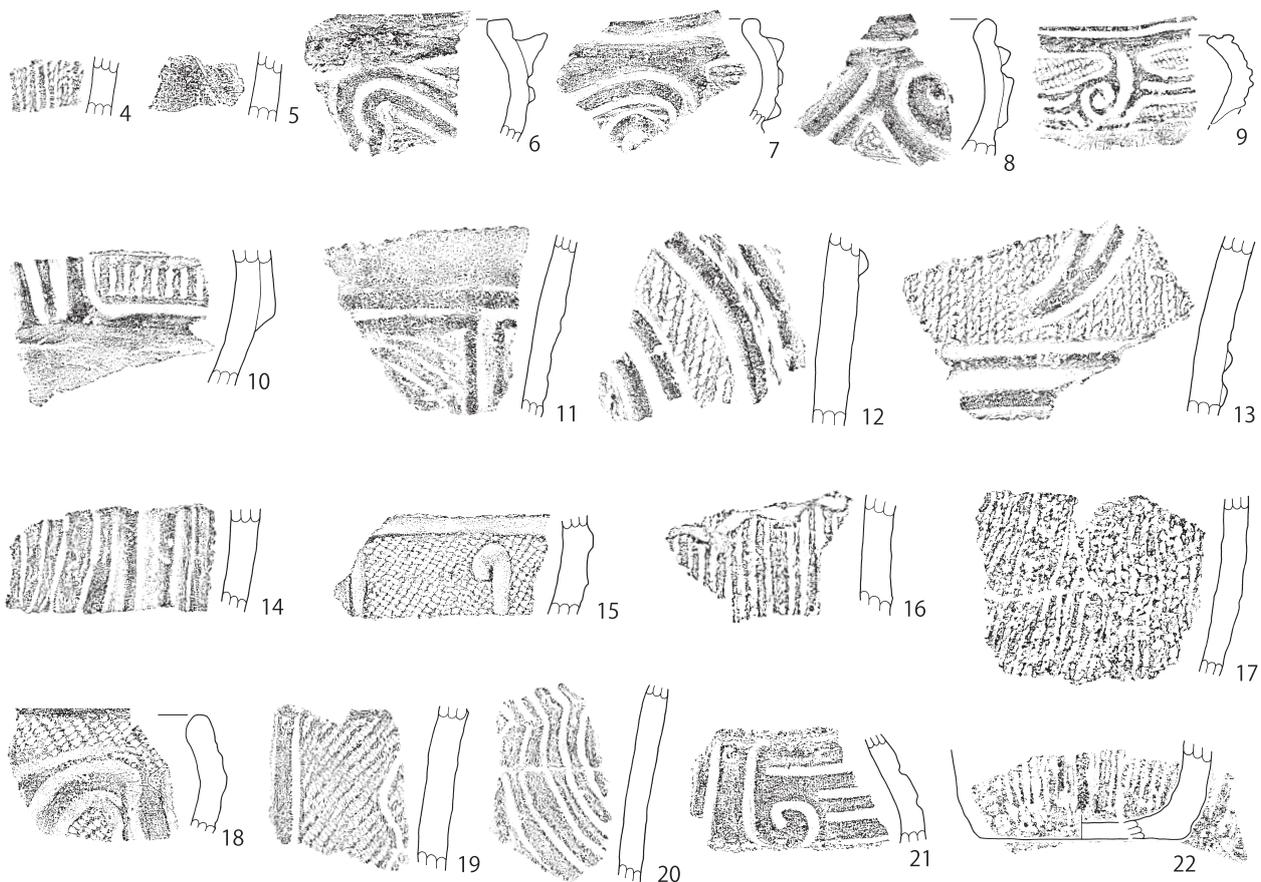
第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡の出土遺物は第125図1～第126図27である。

土器類は1～22である。1は頸部の括れが強いキャリパー形深鉢で、口縁部に渦巻文の楕円文化した区画文を2本隆帯で横位連結するモチーフを描いている。頸部無文帯は幅狭となっている。

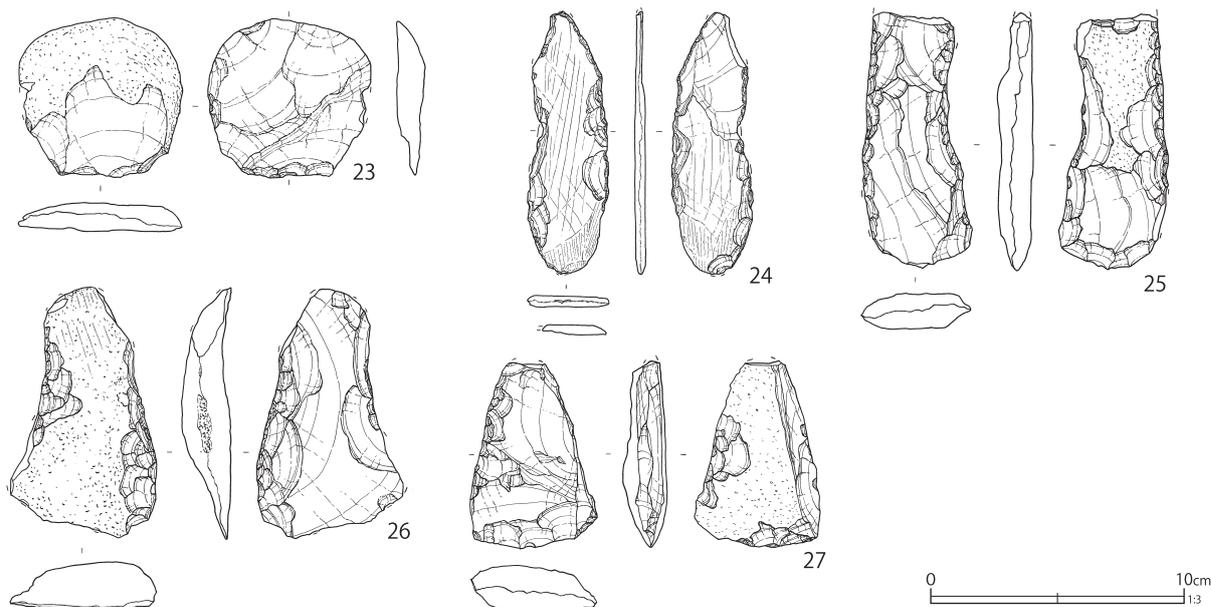


0 10cm
1:4



0 10cm
1:3

第125图 第30号住居跡出土遺物(1)



第126図 第30号住居跡出土遺物（2）

第49表 第30号住居跡出土復元土器観察表（第125図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
125-1	[11.6]	(25.4)	-	-	30%
2	[9.8]	(22.2)	-	-	10%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
125-3	[14.0]	11.9	-	-	80%

第50表 第30号住居跡出土石器観察表（第126図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
126 - 23	スクレイパー	II 1①イ	ホルンフェルス	6.4	6.4	1.2	53.5	
24	スクレイパー	II 2②イ	緑泥片岩	10.4	3.2	0.4	18.5	
25	打製石斧	III 1②イ	結晶片岩	[10.1]	4.3	1.4	67.9	
26	打製石斧	III 1②イ	黒色頁岩	9.9	5.7	2.0	92.9	
27	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[7.4]	5.0	1.7	70.4	

口縁部の地文は撚糸文Lの横位施文、胴部は縦位施文である。

2は頸部無文帯のないキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に2本隆帯の横「S」字状渦巻文を、1本の蛇行隆帯で横位連結するモチーフを描く。地文は口縁部で撚糸文Lを横位施文、胴部で縦位施文する。加曽利E I式土器であるが、2の方が古い要素を有している。

3は無文の口縁部が開く筒形の深鉢で、胴部に沈線文の上下に対向する渦巻文をモチーフ化している。渦巻文の合わさる部分では単位文的に交互刺突文を施文する。

破片では、4、5がP1から出土している。

4～10、12、13、16は加曽利E式キャリパー

形深鉢の口縁部付近の破片で、加曽利E I式の後半段階に位置付けられよう。12、13は胴部に渦巻文を構成するようである。16は撚糸地文上に横位の小波状沈線を施文するもので、加曽利E I段階のものと思われる。

11、14は地文に沈線文を施文する、曾利式系の要素を有する胴部破片である。加曽利E I式新段階のものであろう。

15、18、19は磨消懸垂文を有する加曽利E III式土器である。20は3と同様のモチーフを施文する。

21は浅鉢の肩部の文様帯部分である。17は撚糸文Lを施文する胴部破片、22は隆帯懸垂文が垂下する底部破片である。地文は撚糸文Lである。石器は第126図23～27が出土した。

23、24はスクレイパーで、23が末端に、24が両側縁に刃部を有する。ともに粗粒の石材を素材に用いている。

25～27は打製石斧で、いずれも撥形を呈し、刃部が両刃である。

第7・8号住居跡（第127図～第134図）

T-9・10区に位置する。住居跡北壁で第4号集石土壙と、中央南寄りで第14号土壙と重複するが、いずれも本遺構より新しい。平面形は長径6.7m、短径6.53m、深さ0.3mで、若干南北に長い円形を呈する。

ほぼ同心円状に壁溝が2本検出されたが、外側の壁溝1が新しい。柱穴は12基検出されたが重複するものはなく、覆土、深さ及び配置から、壁溝2を切って構築されたP1～6とP7、8、10～12の2群に分けられる。P1～6は、ほぼ均等に六角形に配されている。本住居跡の最終段階のもので、外側の壁溝1に対応する。他の一群は、南側を開けた五角形状に配されており、内側の壁溝2に伴う古い住居跡の柱穴と思われる。

支柱穴の深さは、P1=72cm、P2=62cm、P3=72cm、P4=68cm、P5=67cm、P6=70cm、P7=67cm、P8=66cm、P10=58cm、P11=63cm、P12=61cmである。

埋甕炉で、土器を中心に被熱による焼土が広がり、その更に外側にまで炭化物の分布が認められる。したがって、炉跡全体の掘り込みは南北に長い不整形を呈するが、炉として機能していたのは北側の網掛け部分であろう。また、南側の7・8層とした部分には炭化物、焼土粒子が含まれていないことから、炉跡とは異なる遺構と思われる。なお、5・6層とした部分の底面には被熱による赤化が見られることから、古い炉跡の可能性もある。

住居跡南側で、壁溝2と重複する位置に埋甕が検出されたが、実際には切り合っておらず、壁

溝2は埋甕の直前で止められている。また、土器は径37cm程の掘り込みの中に正位に埋設されているが、その掘り込み自体は、北側の浅い掘り込みを切って造られている。したがって、建て替え（拡張）時にも位置を変えずに埋甕を作り直した可能性が考えられる。なお、掘り込みの東西に径10cm程の小ピット状の掘り込みが2基検出された。用途は不明だが、内部には非常に締まりの良い灰褐色の粘質土が充填されていた。

P1の7層中から底部の土器片が正位で出土している。

住居跡は、炉体土器及び埋甕から加曽利EⅡ式後半段階の所産と判断される。

第7号住居跡出土遺物

調査時において第7号住居跡と第8号住居跡として区分した遺物を、報告においても区分して掲載することにした。第8号住居跡の方が新しいことから全体が8号住居跡の覆土出土として捉えられるが、床面等の関係から壁溝2より外側の遺物が、真に第8号住居跡の時期を表しているものと判断されるため、分けて掲載した。

第7号住居跡として取り上げた遺物は、第130図1～第134図92の土器類、石器類が出土している。

土器類は1～47である。1は炉体土器で、口縁部と胴下半部を欠損する。底部から直線的に開く深鉢で、胴部を2本沈線で区画し、上半部に2本沈線の緩い連弧文を描いている。連弧文の連結部からは胴部区画線まで蛇行沈線を垂下する。地文は条線文である。

2は炉の南側の縁から出土した土器片で、浅鉢の口縁部破片と思われる。

3は埋甕で、頸部で括れ、胴部を2本沈線で区画する。口縁部区画線には交互刺突を施し、3本沈線で比較的整然とした連弧文を描いている。連弧文からは2箇所のみ胴部区画線まで3本沈線を垂下する。地文は条線文である。

4は底部を欠損するがほぼ完形の連弧文土器

で、胴部の括れ部を2本沈線で区画し、3本沈線で1段の連弧文を描いている。連弧文の波底部から胴部区画線まで対括弧状の沈線を施し、連弧文下に杵状区画文を構成している。地文は条線文である。

5は炉体土器と同様の底部から直線的に開く深鉢で、緩い4単位の波状口縁を呈する。波頂部には沈線の渦巻文を施し、胴部区画線の波頂部下に相当する部分にも同様の渦巻類似文を施文する。胴上半部には4単位の楕円状の杵状文を区画するが、胴下半部には懸垂文は施文しない。地文は条線文である。

6は頸部が括れるキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に、7単位の隆帯渦巻文を突出させる繫弧文を施文する。口縁部と繫弧文の間に構成される楕形状区画文には集合沈線文を充填施文する。胴部には渦巻文下に上端部が繋がる2本隆帯文を7単位の垂下する。地文に条線文を施文するもので、多分に曾利式の要素の強い土器である。

7は口縁部がやや内湾して開く浅鉢で、無文である。底部を欠損する。

8、9はP1、10はP2、11～13はP3、14はP4、15、16はP5、17はP6、18はP9、19はP10、20はP12からの出土である。

21～25は流れ込みの勝坂式土器で、21、22は古段階、23は中段階、24、25は新段階から終末段階の土器である。

26～33は加曾利E式土器で、26、28、29は器壁の厚い大きな深鉢土器である。26は幅広の口縁部文様帯に2本隆帯で渦巻文を繋ぐモチーフを施文するものと思われる。地文は条線文である。27は口縁部の橋状把手に沈線の渦巻文を施文する。30、33は幅広の磨消懸垂文を施文する。31は地文単節RL縄文上に、沈線懸垂文を施文する。以上の多くは加曾利EⅢ式に比定されよう。

32は口縁部に2本沈線で波状文を描いており、連弧文土器の仲間か、勝坂式終末期であろう。

34～37は地文に沈線文を施文する曾利式系の土器である。34は口縁部に隆帯渦巻文を施文するもので、区画内に沈線文を施文する。39は3本沈線の曲線区画内に集合沈線文を施文する。37は蛇行隆帯の区画内に異方向の集合沈線を施文する。信州系の要素であろうか。

40～45は連弧文土器で、40～42は連弧文を描き、43～45は連弧文を描いていない土器である。

46は無文の浅鉢、47は無文の深鉢の口縁部破片であろう。

土製品では、48は口縁部に凹線状の沈線区画を施すミニチュア土器である。胴部に単節LR縄文を施文する。

49は鼓状の土製耳飾りで、上下面に沈線の渦巻文を施文する。

50～53は土器片を利用した、土製円盤である。石器は第133図65～第134図88が出土した。

65～68は石鏃である。67が円基鏃で、その他は無茎の石鏃である。69～71は石鏃の未成品である。69は正面右側縁に両面交互剥離を施すことにより石鏃の側面観を整形しようとしているが、全体的に厚く、正面左側が欠損していることから未成品と判断した。70、71は末端に両面交互剥離を施すことにより脚部を作出しようとし、両側縁にも剥離を加えていることから、未成品と判断した。

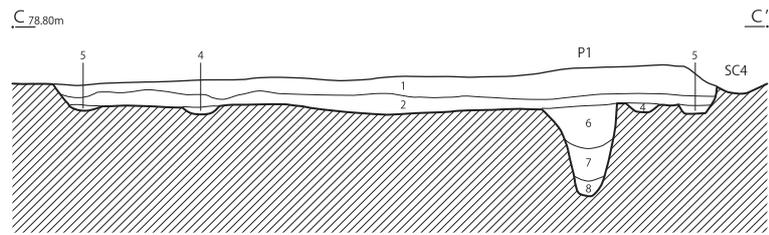
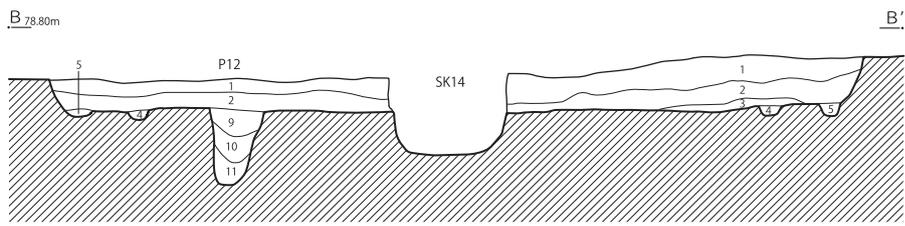
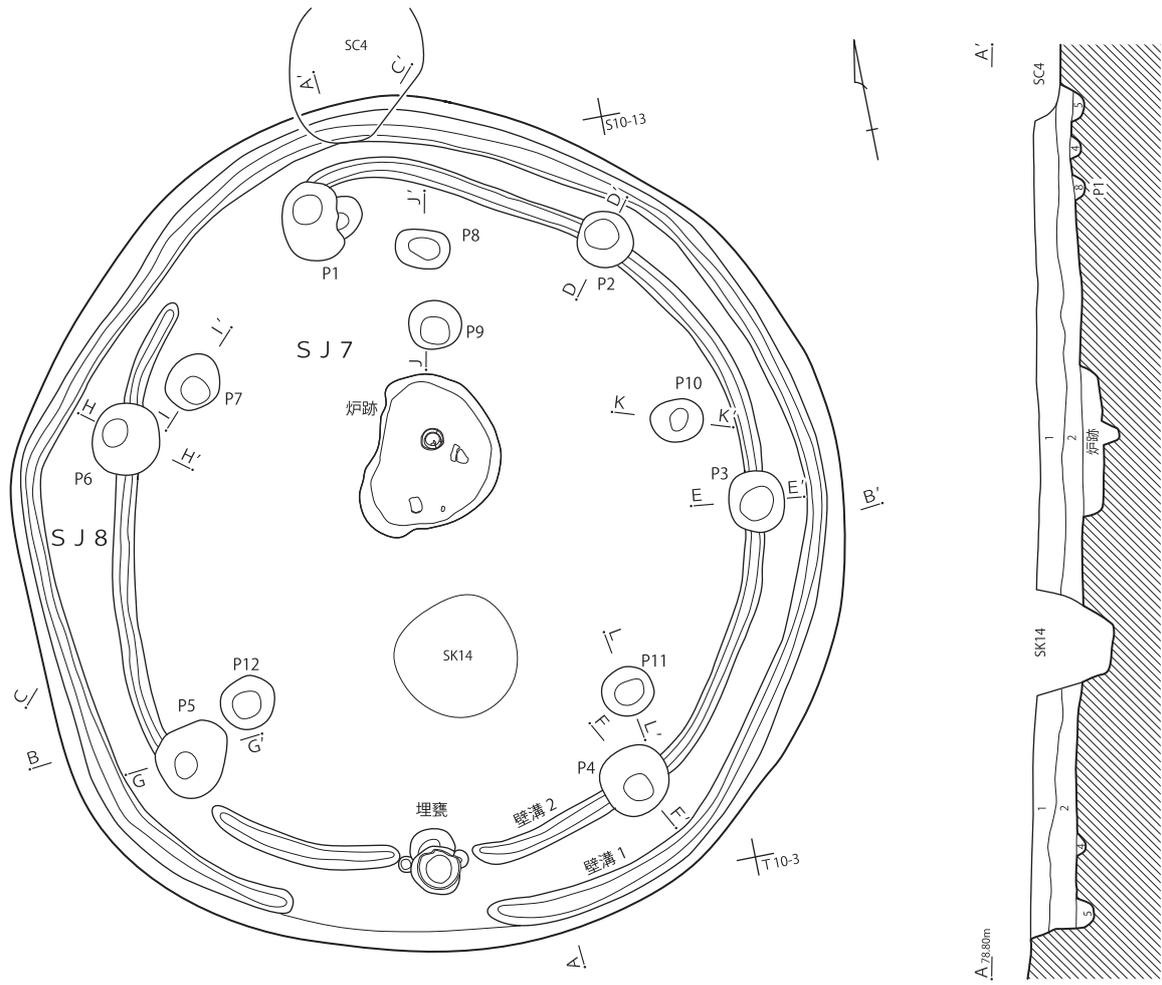
72～74はスクレイパーである。72が末端に、73、74は周縁に刃部を有する。

75は微細剥離痕を有する剥片、76が二次加工剥片である。

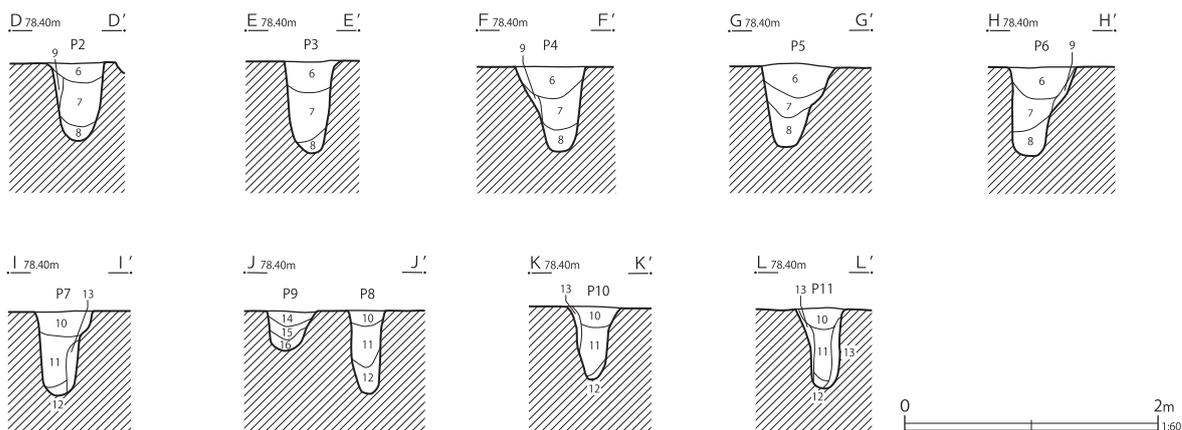
77、78がスクレイパーで、特に78は素材剥片には大形で粗粒の石材を用いている。

79～86は打製石斧である。79～85は撥形を、86が短冊形を呈する。刃部は79、80、83が両刃、81、84が片刃である。

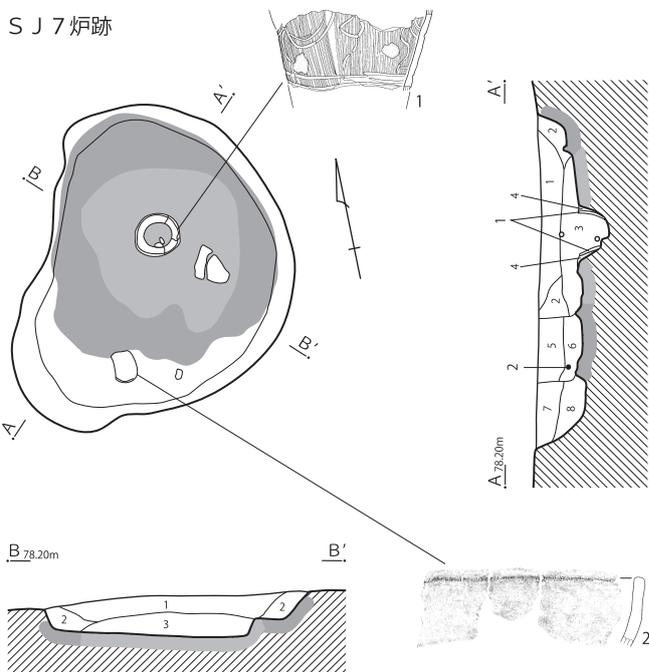
87、88は磨石で、ともに自然礫を用いている。



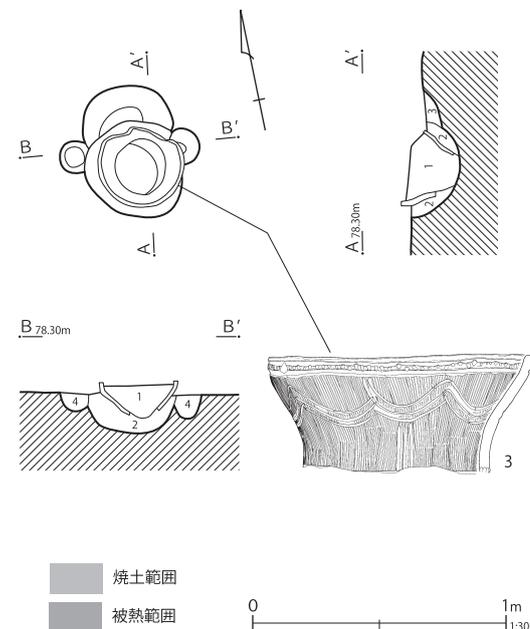
第127图 第7·8号住居迹(1)



S J 7 炉跡



S J 7 埋甕



S J 7・8

- 1 暗茶褐色土 黄灰色粒子・棕色粒子多量 しまり良い
- 2 暗灰褐色土 1層より更にしまりよく粒子類は少ない 部分的にローム土を混入
- 3 暗黄褐色土 2層をベースにローム土を混入 粘性強い
- 4 暗灰褐色土 茶褐色土とローム土の混土層 粒子類は含まれない(壁溝2)
- 5 黄茶褐色土 茶褐色土とローム土の混土層 しまり悪い 粘性強い(壁溝1)

S J 7・8ピット

- 6 暗茶褐色土 黒み強め ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 7 暗茶褐色土 1層をベースにローム粒子多量 ローム小ブロック少量
- 8 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子多量 ローム小ブロック少量
- 9 暗黄褐色土 ソフトローム土主体で暗茶褐色土を混入 ローム粒子多量
- 10 暗黄褐色土 ソフトローム主体で暗茶褐色土を混入
- 11 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 12 暗茶褐色土 11層より黒みを帯びる ローム粒子多量 ソフトローム土混じる
- 13 暗黄褐色土 ソフトローム土主体で暗茶褐色土を混入 ローム粒子多量
- 14 暗茶褐色土 ソフトローム土混じる ローム粒子多量
- 15 暗茶褐色土 14層より黄色みを帯びる ソフトローム土混じる ローム粒子多量
- 16 暗茶褐色土 15層に近似するが、ソフトローム土・ローム粒子多量

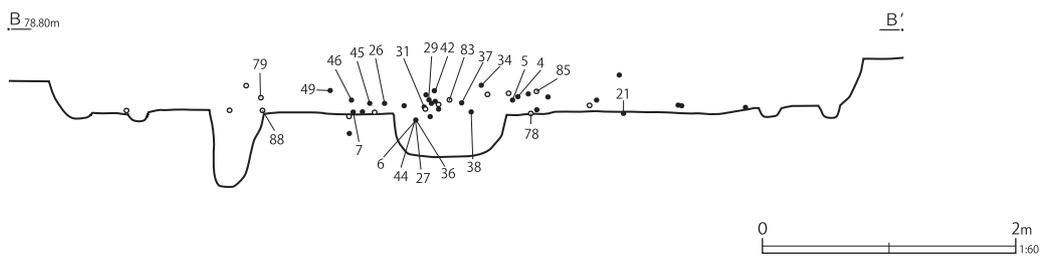
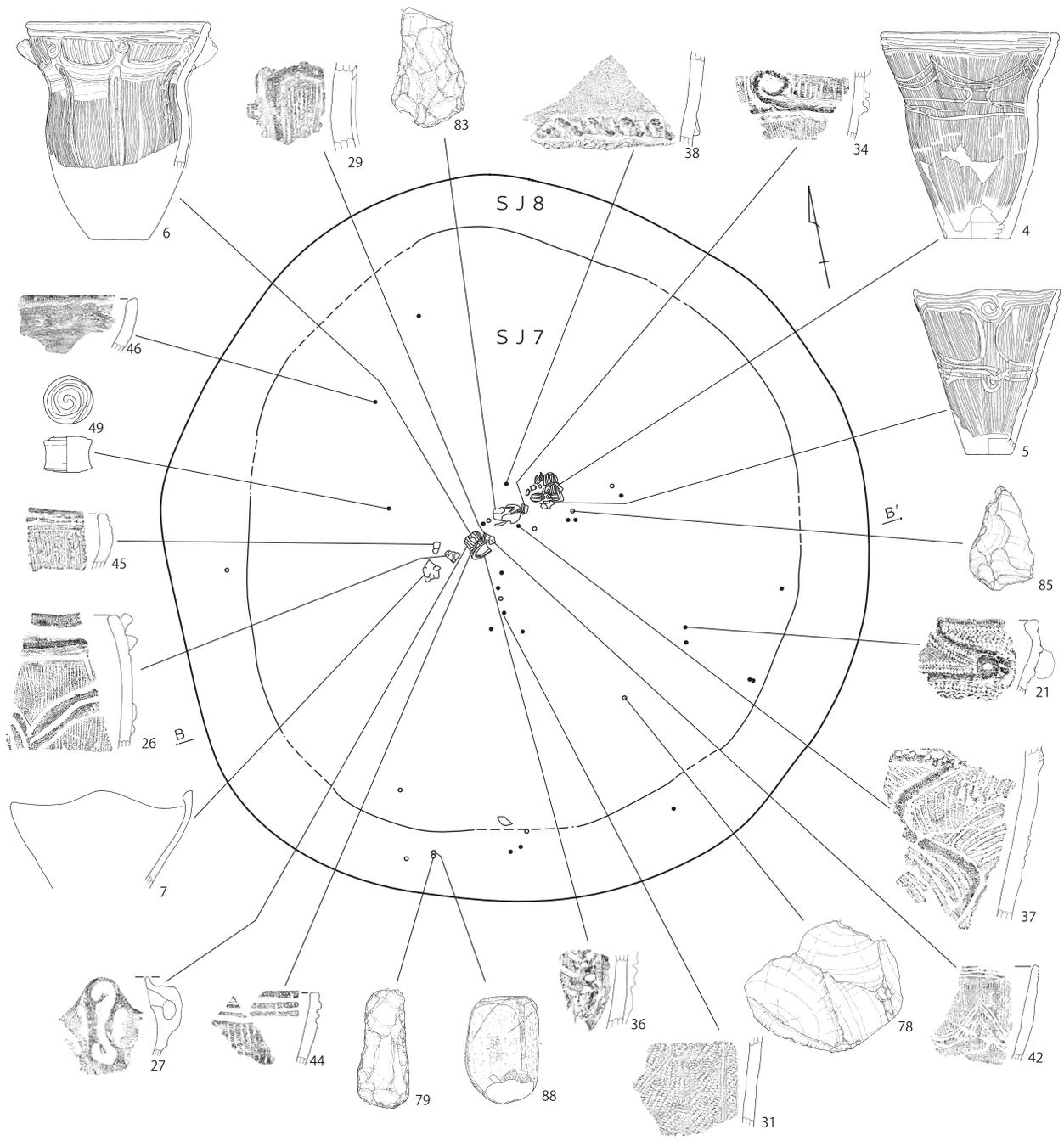
S J 7 炉跡

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 非常にしまり良い
- 2 黒灰褐色土 1層をベースにローム粒子を多量に含む
- 3 黒褐色土 黒色土に焼土粒子と少量のローム微粒子を混入
- 4 黒褐色土 3層に近似するが炭化物・焼土粒子の混入少ない
- 5 暗灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 暗灰褐色土 5層に近似するがローム粒子の混入多い
- 7 暗褐色土 ローム土を小ブロック状に含む
- 8 暗黄褐色土 茶褐色土をベースにローム土を多量に混入

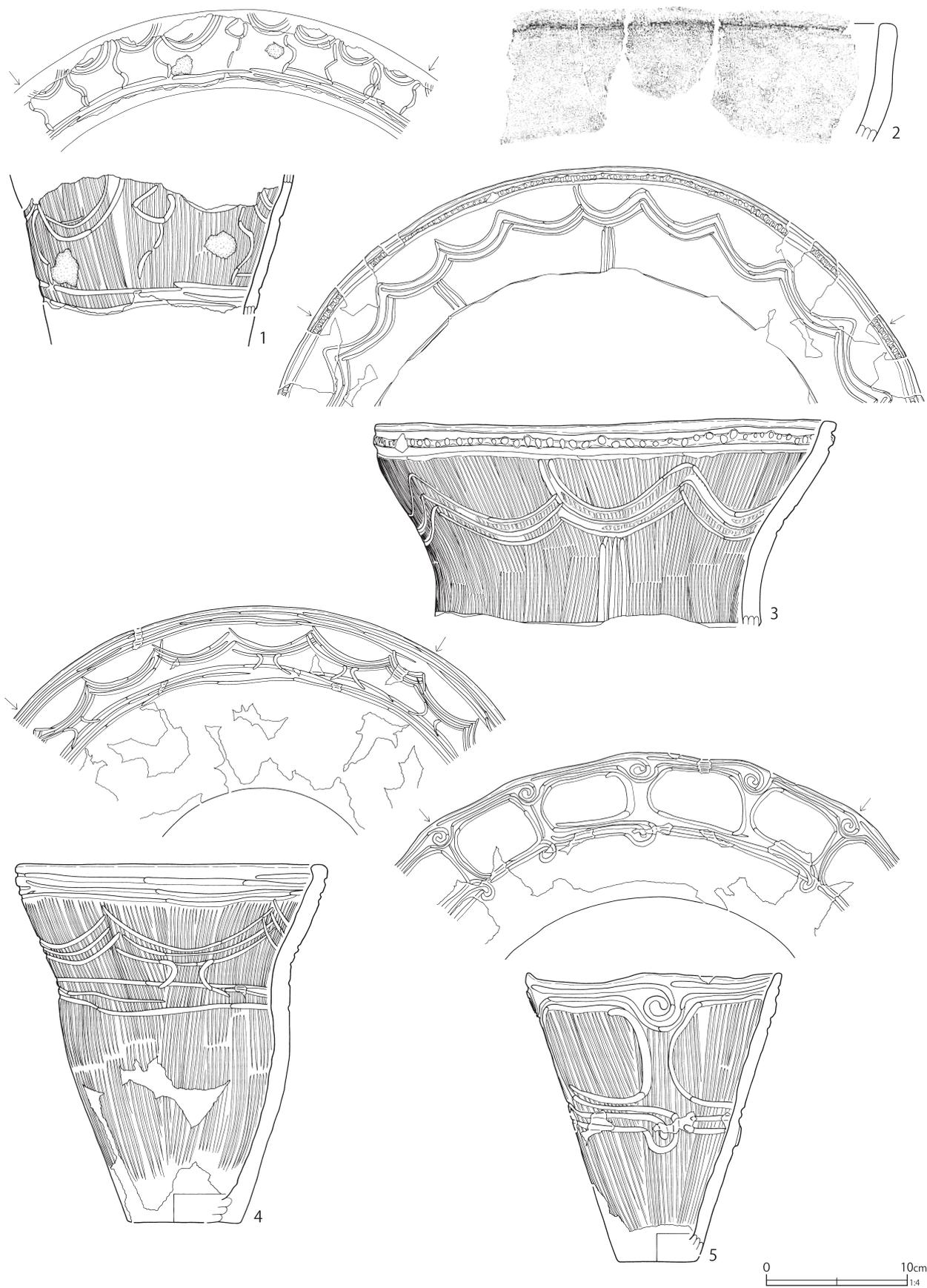
S J 7 埋甕

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子微量 土器内部の埋土で比較的均質
- 2 灰茶褐色土 4層に近似するが、ローム土の混入多い 埋甕設置の際の詰め土か しまり悪い 粘性強い
- 3 暗褐色土 茶褐色土とローム土の混土層 しまり良い
- 4 灰褐色土 埋甕の東西で検出された小ピット状の掘り込み しまりの非常に良い粘質土でわずかにローム土を混入

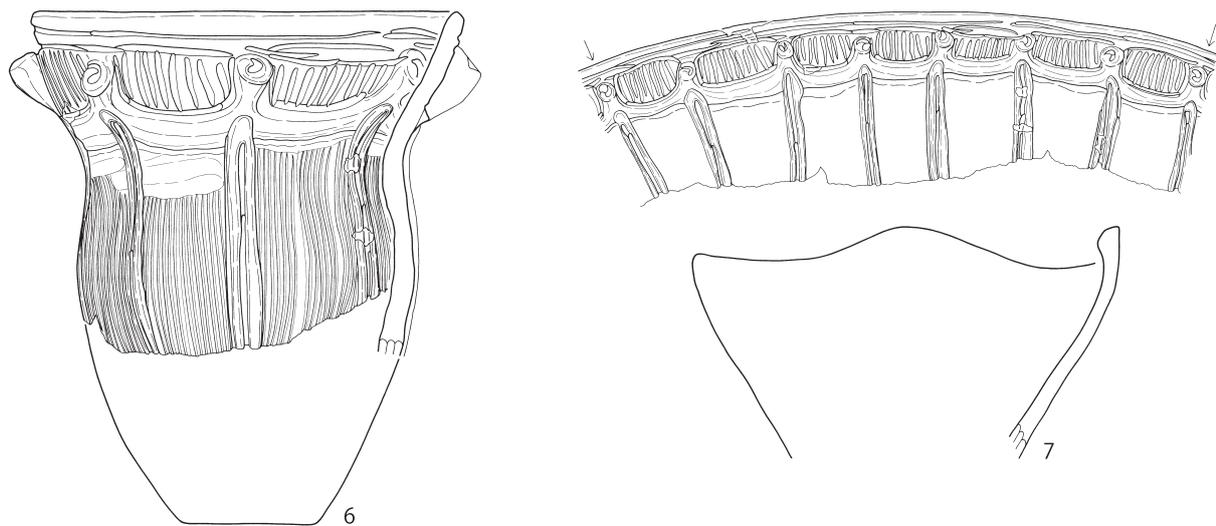
第128図 第7・8号住居跡(2)



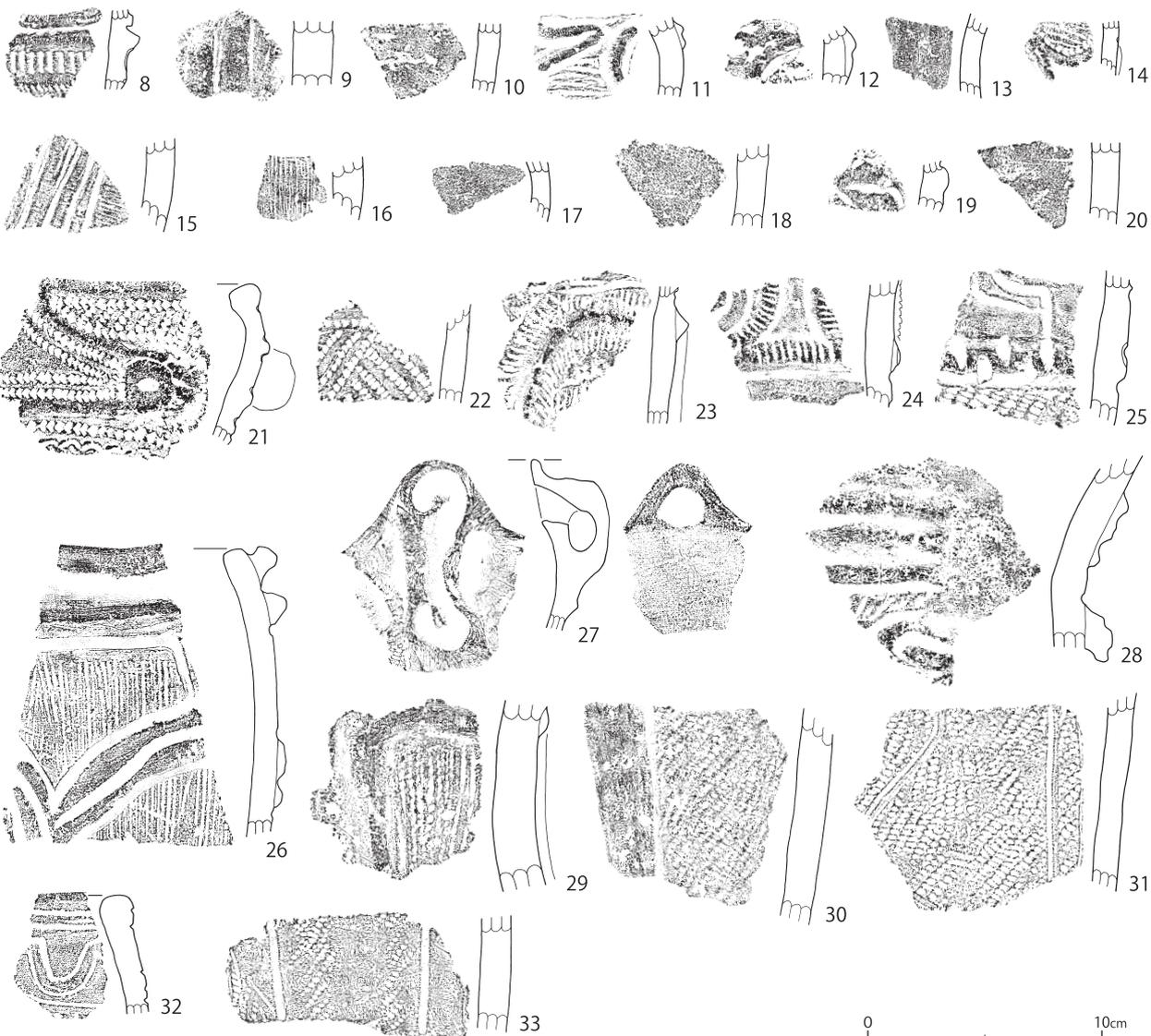
第129図 第7・8号住居跡遺物出土状況



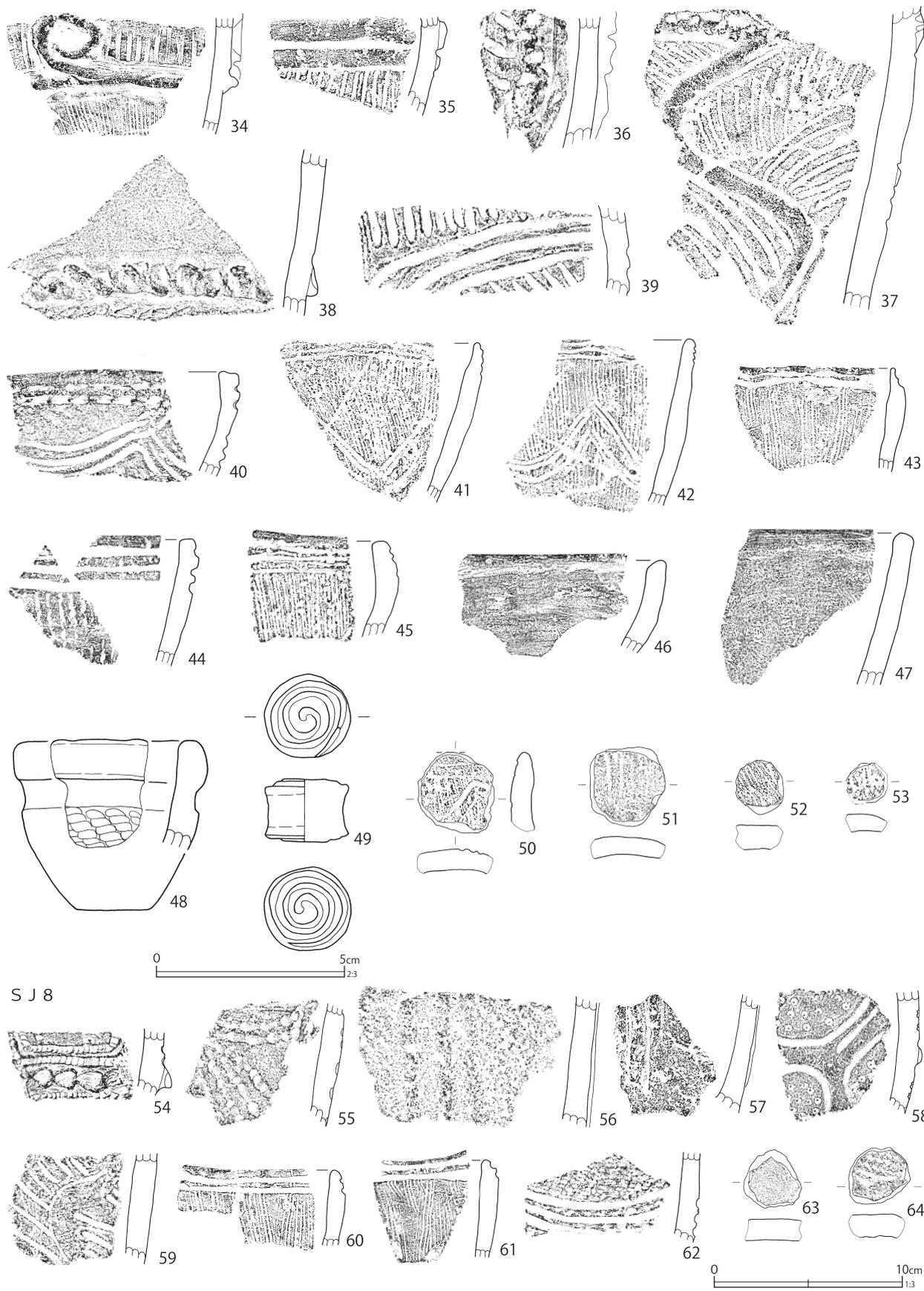
第130図 第7・8号住居跡出土遺物（1）



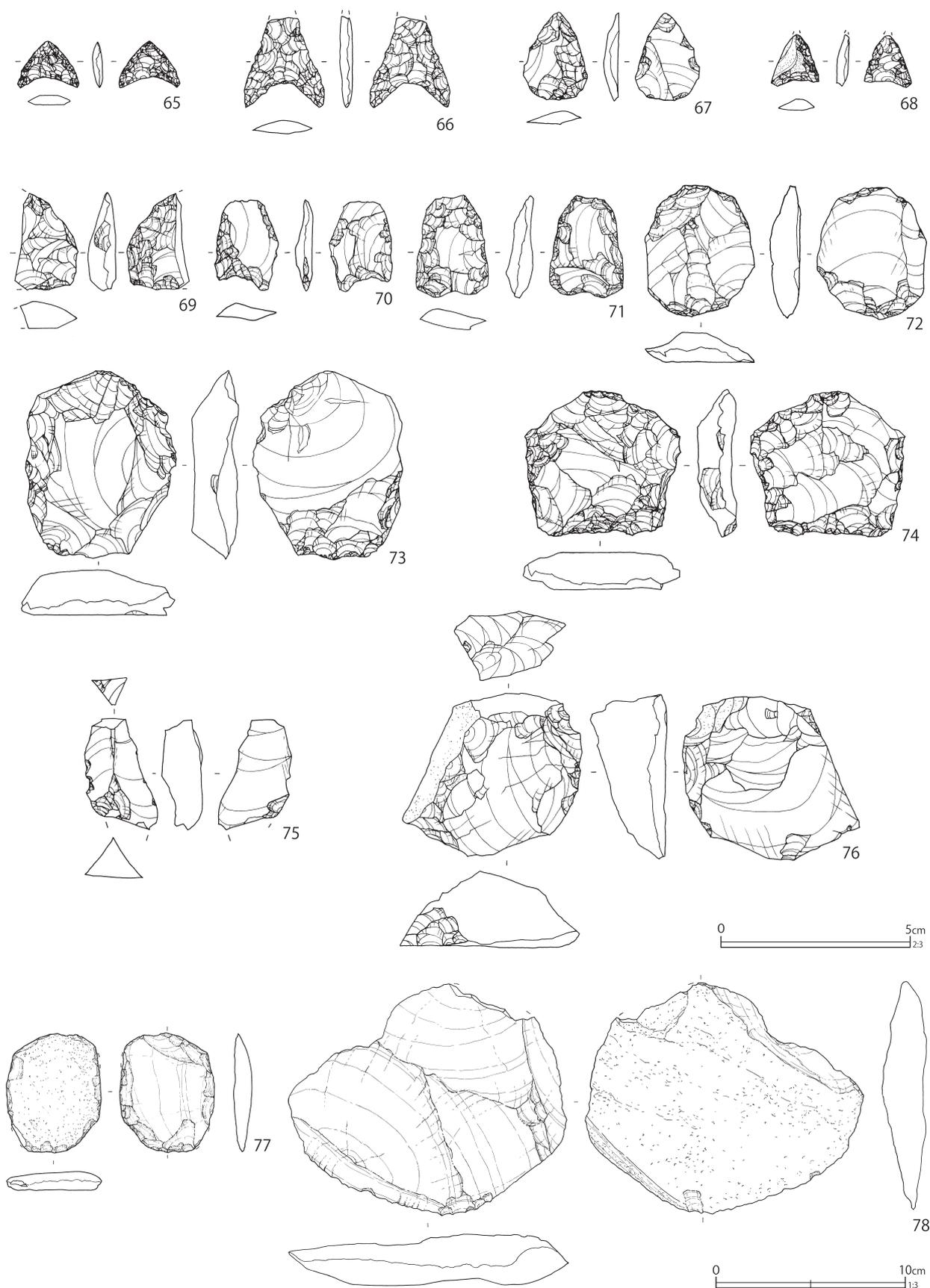
SJ 7



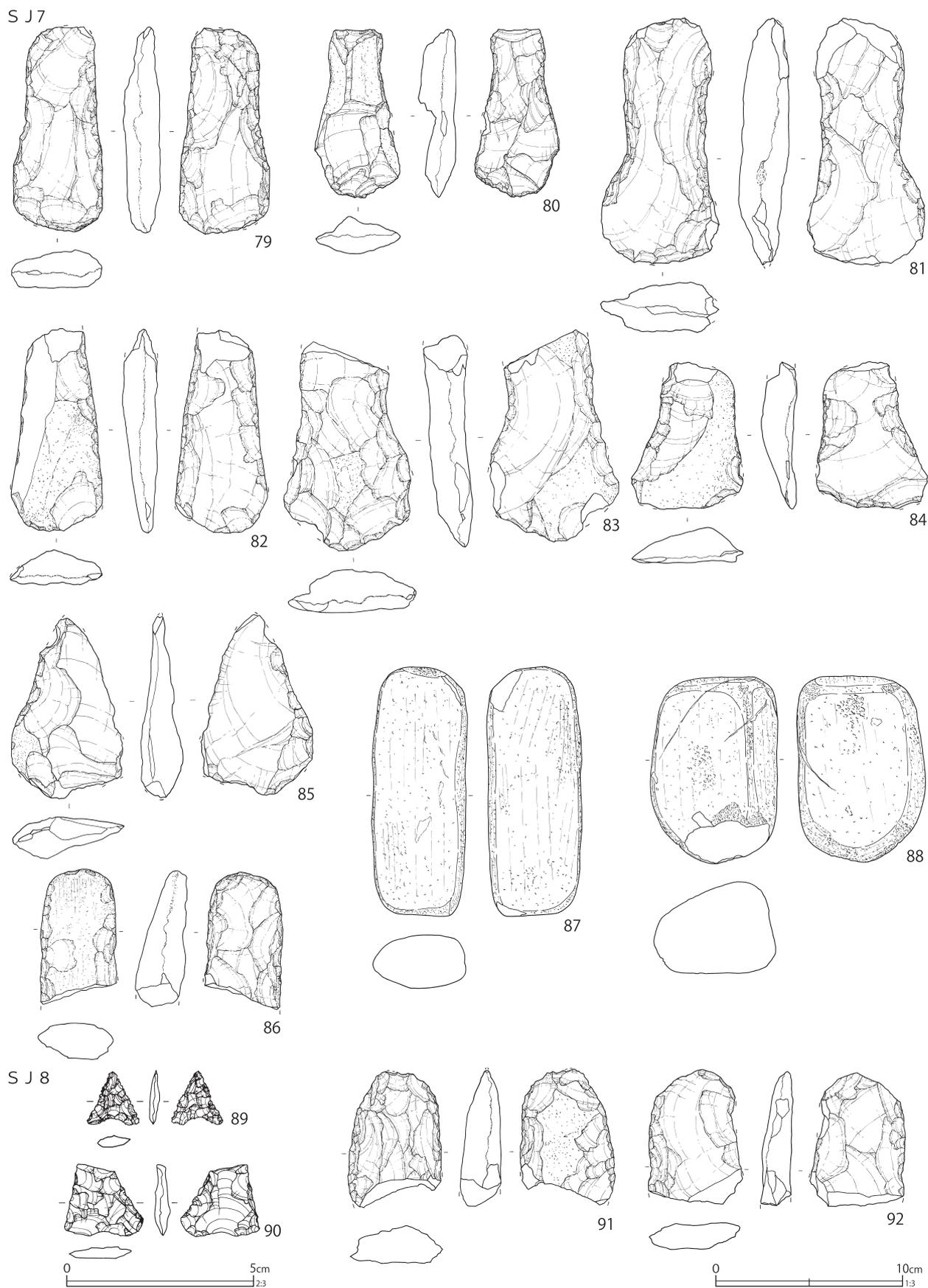
第131图 第7·8号住居跡出土遺物(2)



第132図 第7・8号住居跡出土遺物(3)



第133图 第7・8号住居跡出土遺物(4)



第134図 第7・8号住居跡出土遺物(5)

第51表 第7・8号住居跡柱穴計測表 (第127・128図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	64.0	72.0	P 2	45.0	62.0	P 3	50.0	72.0	P 4	54.0	68.0	P 5	63.0	67.0
P 6	57.0	70.0	P 7	46.0	67.0	P 8	43.0	66.0	P 9	41.0	30.0	P 10	41.0	58.0
P 11	41.0	63.0	P 12	43.0	61.0									

第52表 第7・8号住居跡出土復元土器観察表 (第130・131図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
130-1	[9.9]	-	[20.2]	-	40%	130-5	[20.0]	17.9	18.2	-	90%
2	-	-	-	-	20%	131-6	[18.2]	22.2	23.0	-	60%
3	[14.9]	32.7	-	-	40%	7	[12.3]	(22.4)	-	-	30%
4	[26.5]	21.2	21.8	-	90%						

第53表 第7・8号住居跡出土石器観察表 (第133・134図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
133 - 65	石鏃	I 2①	黒曜石	1.2	1.6	0.3	0.4	
66	石鏃	I 2②	チャート	2.4	2.2	0.4	1.5	
67	石鏃	I 1①	チャート	2.3	1.7	0.4	1.2	
68	石鏃	I 2①	黒曜石	1.4	13.0	0.3	0.4	
69	石鏃	III ②	チャート	2.6	1.7	0.7	2.9	
70	石鏃	III ①	チャート	2.4	1.7	0.5	1.7	
71	石鏃	III ①	チャート	2.7	2.0	0.7	3.6	
72	スクレイパー	II 1①	チャート	3.5	2.9	0.8	7.5	
73	スクレイパー	II 1①	チャート	5.0	4.0	1.2	25.7	
74	スクレイパー	II 1①	チャート	3.9	4.1	1.0	17.6	
75	微細剥離のある剥片	II ①	チャート	3.0	1.9	1.1	4.3	
76	二次加工剥片	II ①	チャート	4.4	4.7	2.0	33.8	
77	スクレイパー	II 1①イ	ホルンフェルス	6.3	5.0	1.0	43.7	
78	スクレイパー	II 1①ア	ホルンフェルス	12.2	14.8	2.7	432.4	
134 - 79	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[11.1]	4.8	2.1	125.1	
80	打製石斧	III 2①イ	硬質頁岩	9.0	4.5	2.0	65.9	
81	打製石斧	III 1②イ	頁岩	[13.1]	[6.3]	2.7	208.1	
82	打製石斧	III 2②ア	砂岩	10.9	4.9	1.9	105.0	
83	打製石斧	III 1②イ	砂岩	[11.3]	[6.8]	2.3	178.6	
84	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[7.9]	6.0	1.9	74.3	
85	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[9.7]	[5.9]	2.2	85.5	
86	打製石斧	II 2②ア	ホルンフェルス	[7.3]	[4.1]	[2.6]	92.2	
87	磨石	III 1-3①イ	ホルンフェルス	13.4	5.1	3.0	345.6	
88	磨石	IV 1-3②ア	砂岩	10.1	6.8	5.0	505.7	
89	石鏃	I 2①	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.3	
90	石鏃	I 2②	黒曜石	1.9	2.1	0.4	1.4	
91	打製石斧	V ②イ	ホルンフェルス	[7.2]	5.0	2.2	88.9	
92	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[7.2]	[5.0]	1.6	71.3	

第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土土器は、54～64である。54、55は流れ込みの勝坂式土器、56、57は加曾利E式キャリパー形深鉢の胴部破片、58は円形刺突文を施文する胴部が張る深鉢、59が曾利式土

器、60～62は連弧文土器である。

土製品は、63、64が土製円盤である。

石器は89～92が出土した。

89は石鏃で、両側縁が鋸歯状である。90は石鏃の未成品である。脚部を作出しようとした際、

剥離が長軸方向に伸び、剥離面の末端がヒンジングしたことにより、先端が欠損したと思われる。

91、92は打製石斧の基部片である。

第9・14号住居跡（第135図～第140図）

R-8・9区に位置する。当初、R-8区西側の黒色部分を第9号住居跡として調査を進めたが、樹根等による攪乱のため覆土が明瞭でなく、西側の床面から炉跡が検出されたことから、2軒の遺構の重複であることが判明した。また、第9号住居跡は住居跡としたが、覆土の観察から第14号住居より新しいものの、伴う炉跡や柱穴が確認できず小竪穴状の遺構であったと推定される。表記する柱穴・炉跡は、基本的には第14号住居跡に伴うものである。但し、遺物の出土は第9号住居跡の方が多く、そのほとんどが1・2層中からである。なお、南壁近くで中・近世に属する第17号土壇と重複している。両住居跡は東西に重複し、規模、形状は明瞭ではないが、両住居跡ともおおむね南北方向に長軸をもつものと思われ、第9号住居跡が長径3.57m、第14号住居跡が長径4.97m程と思われる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は21本検出されたが、覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは新旧の2種に分けられる。旧段階ではP4、7、10、14、20の一群が相当する。覆土中にはロームブロックを多く含むことから、埋め戻されたものと思われる。新段階の最終段階と思われるのがP3、6、8、11、15の一群である。P20はその一部が攪乱を受けており、樹根の近くにあったことから樹根による攪乱と判断したが、他の柱穴との重複であった可能性も考えたい。主柱穴の深さは、P3=75cm、P4=63cm、P6=59cm、P7=53cm、P8=69cm、P10=47cm、P11=64cm、P14=61cm、P15=66cm、P20=65cmである。

住居跡中央やや北西寄りに石囲埋甕炉が検出

され、正位に埋設された土器を取り囲むように4個の礫が検出された。そのうちの一つは石皿（第139図48）の欠損品を転用したものである。なお、炉石の下から土器の破片（第137図2）が出土していることから、炉の作り替えと思われる。また、炉の西側でピット状の掘り込みと重複するが、南西側の炉石が欠損していることから、本住居跡より新しい掘り込みと考えられる。

埋甕は検出されなかった。

第14号住居跡は、炉体土器から勝坂式新段階の所産と思われる。第9号住居跡は加曾利EⅠ式古段階の可能性はある。

遺物は第137図～第140図の土器類、石器類が出土した。

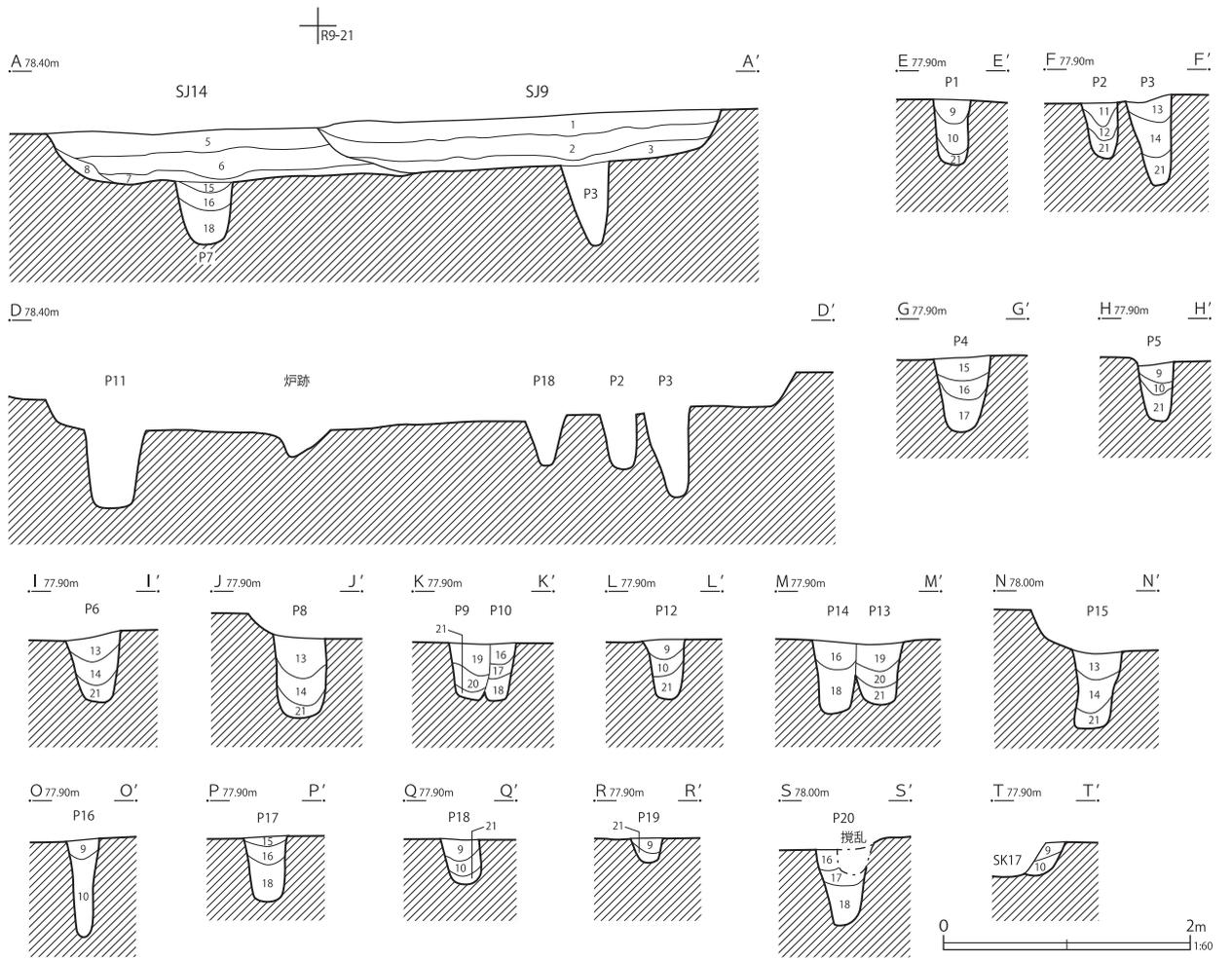
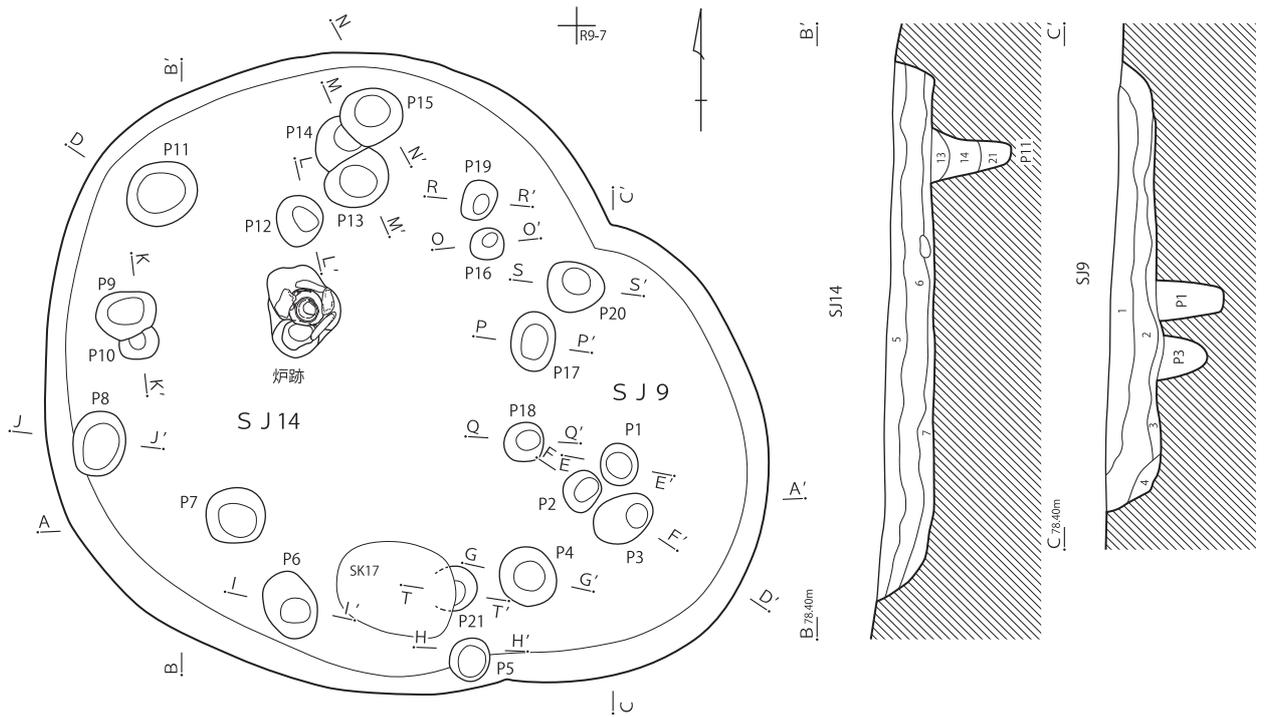
土器類は1～32である。1は無文の短い口縁部が外反して立ち、胴部区画線と底部区画線間に刻み隆帯を鋸歯状に配し、筒状の胴部に連続の三角区画文を施文する。区画内には三叉文とそれを取り巻く爪形文を施文する。区画隆帯脇には沈線を沿わせ、それに沿って爪形文を施文する。

2は古い埋甕炉の一部と思われる。頸部を刻み隆帯で区画し、口縁部に楕円区画文を施文する構成と思われ、区画内に梯子状沈線文と構成不明の沈線文を施文する。胴部の地文は撚糸文Lを施文する。

3はP7、4はP8からの出土である。

5は4単位の波状口縁で、頸部でやや窄まり、胴部が少し張る器形を呈する。幅狭の口縁部を隆帯で段帯状に区画し、波頂部に渦巻文を配する。頸部は2本沈線で区画し、2本沈線懸垂文を垂下する、地文は撚糸文Lである。6は同様な器形の胴部から底部である。接合はしないが、5と同一個体の可能性がある。

7は内湾する口縁部が開く加曾利E式のキャリパー形深鉢で、口縁部に2本隆帯の単独の横「S」字状渦巻文を施文する。頸部区画隆帯には刻みを施している。地文は撚糸文Lである。



第135图 第9·14号住居迹 (1)